文春文庫

私と直観と宇宙人

横尾忠則

文藝春秋

CamScannerでスキャン

目次

第一話　ワシ（滝の夢を想う）　7
第二話　彼（自己を想う）　71
第三話　わたし（宇宙人を想う）　151
「あとがき」にかえて　197
文庫版のためのあとがき　211
解説　高橋克彦　215

CamScannerでスキャン

私と直観と宇宙人

CamScannerでスキャン

第一話――ワシ（滝の夢を想う）

CamScannerでスキャン

夢がワシの勇気を試す

　ナイアガラ瀑布と比較するとその規模は天と地の差、比較すること自体間違っとるんだけど、日本では珍しく幅広の滝だ。天空に舞い上がった粉のような滝の飛沫（しぶき）の洗礼を受けてワシの身体は湿っぽい。

　ゴーッという滝の落下音があってもいいのに、辺りは森閑としとる。ワシは川原の砂利石の上に立って向こう岸の鬱蒼（うっそう）と茂った樹木の下の淀んだ水面に眼を落としている。と突然、静寂に亀裂が入って水中から二頭の巨大なイルカが盛りのついた猫のような声を上げてビョーンと空中に舞い上がったのには全く度肝を抜かれてしもた。一旦水中に没した二頭のイルカは再び空中に躍り出たかと思うと、そんな動作を何回も繰り返しながら、川下に去って行った。

　気がつくとワシは滝が上からよく見える崖のある方に向かって歩いていた。この崖は見た眼には大したことはないが、実際に近づくと見上げるほどの巨大な岩山やないか。まるで江戸川乱歩の『パノラマ島奇譚』のあの怪奇な人工風景みたいに物のサイズとパースペクティブが秩序と調和、そして順列を乱して目茶苦茶だ。第一ロッククライミングの装備を付けなきゃ到底登れそうもない屛風岩だ。とそんなことを考えていたはずの

CamScannerでスキャン

ワシがいつの間にかこの岸壁をよじ登っていたというわけや。

どのくらい登ったのか知らんが突然金縛りみたいになって岸壁にへばりついたまま恐怖のために身動きできなくなってしもた。ふと足元を見ると何と下界は遥か彼方。ワシは雲より上にいるではないか。

「一体どないしたらええというのや」

岸壁の頂上は上空の紺碧(こんぺき)の成層圏のような無限の空に吸い込まれていて、気が遠くなるほどや。今さら上へも下へも行けないまま、ワシはチベットの『死者の書』さながら、生と死の中間のバルドの宙吊り状態にあった。これを地獄と呼ばずに何と言おう。こんな非現実的なシチュエーションにワシが置かれていること自体非現実的だ、これはきっと夢や、そうや夢や、夢に違いない、そんな思いが脳裏を掠(かす)めるが、とは言うもののこのことがはっきり夢であると言い切る自信がない。

たとえ天の一角から、

「汝は今夢の中にある。安心して手を離すがよい」

と神の声がしたとしても果たしてその声に従うことができるやろか。今のワシは蚤(のみ)の心臓以下、そんな勇気はあらへん。

夢はいつもこんな風にワシを窮地に追いやってワシの勇気を試しよる。頭ではワシは自分の本体は肉体ではなく霊体であると思っとるが、それがたとえ夢でも、いざとなるとやっぱり肉体が本体だと考えてしまうらしい。情けないとしか言いようがない。こんな馬鹿げたシチュエーションは夢に違いない、よーし飛び降りてしまえ、と勇気を振り絞ることができたらワシはほんまにかなりイイ線いくのになあといつも眼が醒めて後悔しとるというわけだ。

ワシにはこの種の夢が実に多い。次の夢も同じバージョンだ。

高い柱の上にポツンと一人で置いてきぼりを食ったまま誰かの救いを待っているが誰も来ない。飛び降りると骨折は間違いないだろう。下手すると打ち所が悪くて死ぬってことも考えられる。といっていつまでもこんな柱の上にしゃがみ込んでいるわけにもいかん。

やっとの思いで意を決して飛び降りることにした。

「エイッ」

真っ逆さまに地面に叩きつけられるのかと思ったら、何と身体がフワリと宙に浮いて、まるで立ち泳ぎでもしているようにフワフワと地面に降りていくではないか。

夢と現実の区別がつかないのでなかなか勇気を発揮するのには難しいけど、この夢は

最初の岸壁の夢に比べると地上にうんと近い位置にいたので、何とか勇気を振り絞ることができただけの話や。

　また別の日にこんな夢を見た。

　ワシは十メートルほどの高さの滝口の側にある岩に、後にも先にも行けない状態でへばりついていた。眼下には渦を巻いた滝壺がワシが落ちてくるのを口を開いて待ちかまえているようにしか見えない。この場を逃れるためには意を決して、滝壺に飛び込んで、九死に一生の奇蹟を夢見るしか助かる道はない。ワシは恐怖のまま滝壺に飛び込む勇気が湧いてくるまで長い時間岩にへばりついたまま待つしかなかった。

　この渦に巻き込まれたら永劫に滝壺の底を白骨になってグルグル廻り続けなければならない。長い時間の末、九九パーセント絶望としても後の一パーセントに望みを掛けてワシはいよいよ飛び降りることを決断した。

「ジャーン」

とその瞬間ワシの身体はテレポーテーションをしたのか滝壺の前の浅瀬になった安全な場所に立っているではないか。これは一体どういうことや。ワシはその時フト思った。勇気ある行動に命を賭けて本気で決断した時、人はたとえその行動を実際に起こさなくても、それは現実に起こしたことと同じ結果が得られるんや、ということをワシは悟ら

されたのかも知らん。これはなかなか言えてる哲学やでと思った。

かつて夢の中でこんな経験をさせられているというのに、どうしてあの最初に出てきた巨大な岩壁から飛び降りることができなかったんやろ。そりゃ数千メートルの岩壁とたった十メートルの滝とはえらい違うけど、決断には違いないはずや。ワシの肉体はベッドに横たわっているわけやから絶対死ぬということはないのになあ。

夢の端は宇宙と繋がる

夢はビジョンや経験を通して常に何かを人に伝えたり教えたりすることに必死になっているように思う。ワシの場合はどうも物事に対する拘わりを取るように促すための夢が多いようや。前述の夢三題かて肉体に対する執着から自由になることを示唆しておる。

では一体誰が夢を媒介にしてこのようなメッセージをワシに伝達してくるのやろ。

夢の神様というのがおるのかも知れん。夢は日常の願望の具現化だという心理学者の言によれば、ワシが執着から自由になることを無意識で願望しとるからやということになるんやろか。それともワシの守護霊がこの男に一日も早く目醒めてもらいたいという願いから、夢でチャネリング体験させようとしてくれているのかも知れん。

所詮夢はあくまでも夢で現実ではないんだという人もいるやろけど、江戸川乱歩じゃ

ないけど「夢こそまこと」だと思っているワシは、夢こそ真実の自己に出会う唯一のメディアだと考えとるのだ。だから夢と同様、無意識で行ったことは、いずれ顕在意識にもその影響の波及があってもおかしくないのではないやろか。

全ての夢が啓示だとはいわないまでも、それに近いものも多いように思う。夢をよく吟味すればするほど、どこか宗教に通じる部分がある。明恵(みょうえ)上人自身の長年の夢との交流の記録は、ほとんど日常を超えて異界感覚と接触している。

明恵上人の魂を導いているのは確かに夢である。その夢のビジョンは時には神々しいまでに宗教的だ。心理学的に分析すれば彼が宗教家であるために、その願望が宗教的ビジョンを形成させるのやろ、ということに落ちつくかも知れんが、ワシはもうちょっと危険な見解をとりたい。勿論、無意識や日常の願望がビジョン化されたものもあるやろけど、明恵上人を指導する天界の神仏によって、テレパシックな夢のメッセージやサポートがなかったとはワシは絶対思えんのや。

夢に神仏が出現したからといって早急にそれが本物の神仏やというのではない。願望がでっちあげた神仏像の場合もあるやろし、また自己投影されたハイヤーセルフによる神仏像を見る場合もあるからだ。とはいうもののワシは肉体や意識に生じる超自然現象の全てを心理学や科学で説明したり分析したりすることの方がむしろ危険と違うやろか

と思う一人である。

昨夜この本を書くためにカンヅメになっている高輪プリンスホテルのテレビで、呪いと祈りについてのテレビ番組を見た。キリストの磔刑時に手足に打たれた釘の痕や、そこから流れる血が聖痕として肉体の一部に現れていた。ベッドに横たわっている人の足の甲から血が爪先を立てた指の間に向かって、つまり引力に逆らって下から上に這い上がって行くのだった。

信仰に奇蹟はつきものだが、科学や学問では説明できない神秘がこの科学万能の時代にも存在するということを人間はもう少し謙虚になって認めんとあかん。夢の研究にしても同じや。夢の研究が全てやり尽くされたわけでもないだろう。人間の意識に関する科学的解明は宇宙がまだ全て解明されていないようにまだまだ神秘のベールで隠されているのと違うか。そう考えると夢だってまだまだ奥が深く、その端は宇宙と繋がっているはずだ。だから夢が自我の領域だけと繋がっているとは思えんのや。むしろ宇宙とパイプが繋がっていると理解した方が納得できるとワシは思う。

ワシが岩壁にへばりついて恐怖しとった夢を遥か宇宙の彼方から意志のある巨大な眼球がジーッと眼を凝らして見ていなかったとも限らん。そしていつワシが岩壁から手を離すか、それを今か、今かと愉しみにしていた者がいたかもわからん。彼等にとっては

幻の肉体を後生大事に思っているワシをきっと滑稽に思っていたやろ。岩壁はワシにとっては執着の象徴や。それが手離せないならいつまで経っても真の自由は手に入らんぞ、とワシの夢は言うのだった。

古代人が夢を啓示として受け取ったようにワシも彼等に見習おうと思っとる。そして夢を導師と崇め、また友と慕っている。ワシが絵のモチーフに滝を選んだのも滝が夢に頻繁に現れ始めたからや。なんで、滝なのか、自分もわからん。特に滝を願望していたとも思えん。滝はいつの間にかインベーダーのようにワシの想念の一部に棲みついてしまったらしい。そしてワシを滝のある場所に行かせようとした。

「私を描いて下さい」

と滝がワシに囁くようにワシの意識に語りかけてくるのだった。

絵の資料として集め始めた滝の絵葉書は現在一万枚以上に達した。内外の大勢の人達から三日にあげず滝の絵葉書が送られてくる。そんな人達の背後に滝の作用さえ感じるくらいだ。でなきゃ短期間（二年間）にこんなに沢山集まってくるわけがない。ワシはもうほとんど奇蹟やと思っとるくらいや。宇宙の愛は正に狂気や。ワシの滝の絵葉書のコレクションは狂気じみてきた。ではなくてコレクションはすでに狂気なんや。そして

このこと自体がすでに芸術や。狂信的なコレクションは近代の理性に対立するはずや。

なぜワシは滝を描くのか。

答えはよくわからん。描きたくなるから描くとしか言いようがない。理由がないのや。だから自分で描くというより描かされているといった方が当たっているやろ。生かされているという感覚と同じじゃ。

「ワシはおたくのしたいようにさせてあげる道具になりまっせ」

という感じに近いかな。近代の自我が聞いたら驚くだろうね。近代は自我によって創作がなされると思っているからだ。芸術家は自我から出発するが、最終的には自我を消さなければならない。「オレがオレが」という意識は努力によるものだが、努力を強調するあまり、我に執着してしまう危険性がある。その結果、己しか信じられない人間になり易い。「放棄」という言葉があるけど、もし完全放棄したら凄いだろうなあと思う。これは本当に神の子としての真の内的リアリティだろうなあ。その時こそワシを物質界に縛りつける最後の絆(きずな)を断ち切る時だ。カッコイイけどそう容易(たやす)くできるものじゃないな。

でも直観に従うことは自己放棄の第一歩かもわからん。直観は認識に関して分析的な思考と違って、精神が対象を直接に知的に把握する力の作用がある。この働きの本源を

ワシは自然や宇宙や神が有する情報だと考えている。神秘主義の分野ではアカシック・レコードと呼ぶ情報装置みたいなものだ。このような存在を認めることは近代の理性が許さないだろうけど、創造は本来直観のなせる業で、地上で創造される芸術はすでに天上界で完成されているはずだ。それが大脳の旧皮質の作用によって直観として意識に流入してきよる。ワシが最初からコンセプトを放棄するのはこういう理由からや。直観こそ最大のコンセプトである。なんでかというと宇宙的な普遍性があるからや。

だけど直観とは本来神的なもので、天界の願望を素直に感ずることだ。つまり使命を論すための作用でもある。この場合無意識による自我などというものとも違う。だから直観は受けるものの徳に由来する場合が多い。だから直観と閃き（ひらめき）は違うのや。閃きとは五感を通じて体感するもので、一時的なアイデアを指す人的なものだ。直観は神的、閃きは人的というわけや。

マリア様の代受苦

この本は夢や滝が水先案内人になって様々な事象について思いのまま書くことから出発したけど、ワシの予定調和などというものはいつも破壊されてしまうので、海図なしで航海するようなものだ。どこかの港に着けばまだしも、ひょっとすると難破して、こ

の本も海中の藻屑とならんとも限らん。

ワンは今、品川の高輪プリンスホテルの366号室でカンヅメになって原稿用紙の升目に獄中記を綴るような気分で文字を埋めておるのだ。この366号室は十七年前に柴田錬三郎さんとまる一年間カンヅメになって時代小説の挿絵に奮闘したその部屋なんだ。今は亡きダンディストの剣豪作家との蜜月の想い出はこの部屋の壁にもびっしり張りついている。だからか、信じられないほど懐かしいものが胸の奥からせり上がってくるのを感じている。

さっきからテレビの中の声が何度かワンの名を呼んでいる。三日後に放映されるNHK教育テレビの番組『横尾忠則と滝と冒険』の番宣（番組宣伝）のスポットである。那智の一の滝の前に立っているワンの足元からいきなりイルカがピョーンと二頭宙に弧を描く夢のシーンの再現だ。この本の冒頭の夢のシーンだが、番組では一の滝になっておるのだ。そして、この一の滝こそ、ワンが滝壺に飛び込むかどうか思案にあぐねていたその滝だったのである。

こういう偶然の出来事をシンクロニシティと呼ぶのだろう。

この番組の制作に約五ヶ月掛かった。初めてドキュメントを制作するという若いディレクターがある日現れて、滝をモチーフにした番組を作りたいと言った。彼はすでにワ

シが滝をテーマに作品を制作していることを知っていた。彼がどうしてワシの番組を作りたがっているのかを訊ねてみた。

「理由はないんですがふとそう思ったんです」

まるでワシみたいなやつだと思った。よくあるありきたりのドキュメント番組じゃつまらないので、夢のシーンや回想シーンなどのフィクションを導入してみたらどうだろうと、いくつかヒントになるイメージを提供した。

ビデオの制作のスタートは宮崎にある滝を見た後、屋久島の滝を見に行くことになった。このプランはディレクターの発想である。ワシはどこの滝でもよかった。

一年前からワシはマッキントッシュでコンピューター・アートの制作を始め、そのオペレーション役を務めてくれている友人のグラフィック・デザイナーの田島照久君の同行を求めた。彼は写真の腕も一流だ。彼が旅先で撮ってくれた滝の写真を使って制作するコンピューター作品も番組で紹介することになっておる。

ワシがマック（マッキントッシュ）でデジタル・アートを制作するようになった経緯は全く気紛れが支配したとしか言いようがなかった。だいたいワシとコンピューターなどの接点はどこにもない。どちらかというとメカの苦手なワシはコンピューターと聞いただけで背筋が寒くなる。それが一年前、アメリカのメイン州のカムデンにあるコダッ

ク社から、マックによるワークショップに参加して欲しいという招待を受けたのだから相手も運のないやつだと思った。だけどアメリカには行ってみたいという気持があったので、ワシは板挟みになってしもた。直観に尋ねてみたら直観は、行ってみたら、という返事や。だけど面倒臭いといういつもの物臭が頭をもたげてきよった。そしてとうとう心と身体が分離して酸素過多症候群とかで入院する羽目になってしもた。

夕食を前にして突然呼吸困難に陥ってしまったのだ。過労死などが流行っているので、妻は驚いて救急車を呼んだ。病院に運ばれた時は足の先から痺れ始め、それがどんどん上に這い上がってきた。万事休す、と思った時、診療室いっぱいに巨大な青い地球の一部がまるで人工衛星から眺望しているように、部屋の風景と重なるようにして現れた。

何だこりゃ。半分死にかけて幽体が地球を離れようとでもしているというのか。医者や看護婦や救急隊員や事務所の者や妻の姿とダブッて、青い地球の球体の一部が壁の中まで食い込んでいる。そんなシュールレアリスム風の光景の中で、ピカピカと光るものが見えた。その閃光は地球の解決不可能な悲劇的な問題を常に抱えている地域から発生していた。それを眺めていると次第に悲しい感情が込み上げてきて、涙がとめどなく流れ始めた。だけどこの悲しい感情はどうも自分のものではなく、借りものの感情のようなんだ。誰か悲しい想いに暮れている者がワシの心の中に潜入して、ワシの感覚器官を

使って哭いているとしか思われへんのや。この悲しみは普通の悲しみとは違うで。まるでマリア様が人類に代わって哭いているみたいや。するとワシの涙はマリア様の代理涙ちゅうことになるのかいな。

ワシは顔中涙でずくずくに濡らしながら、意識の片隅でぜんざいが食べたくて仕方がないという感情にとらわれていた。間もなく痺れが治まり深夜に家に帰ってきて、ぜんざいを食べてその夜は何もなかったかのように熟睡した。翌日かかりつけの病院に入院して検査をすることになった。

前夜の症状は時々若い女性のみに起こる発作で、男性が経験することはほとんどなく、ワシのような年齢の男がなること自体、奇蹟のようなものらしい。つまり脳の中の酸素が過剰になって生じる呼吸困難で、そんなことを知らない救急隊員は救急車の中で必死に酸素吸入を行ったため、普通でも過剰な酸素がさらに増量され、あのような痺れが起こったそうだ。それにしても救急病院の若い医師にはその判断ができなかったとは、恐ろしい話ではないか。そういえば以前心身のブロックを取るために激しい呼吸を行う瞑想行をしたことがあるが、その時、今回と同じような痺れを経験したのを思い出した。

他人の感情の代理となって哭けたそんな行為を「代受苦」というと瀬戸内寂聴さんが教えてくれ、岡本かの子もいつもしくしくと悲しいこともないのに哭き続けていたそう

で、一種の宗教体験なんだって。ワシが人類に代わって哭いたなんて噂が飛んだら、もうそれだけでキ印だ。それにしても貴重な体験をさせてもらったと、交感神経と副交感神経のアンバランス症状に今では感謝しているけどね。

というわけでアメリカ行きはキャンセルせざるを得なかった。やっぱりワシはコンピューターとは縁がなかったのだ、と結論を下したかに思えた時、今度は大日本印刷から再びコンピューターで作品を制作して、展覧会を開きたいという話が飛び込んできた。二人の評論家の熱心な口説きをかわすのにワシは必死に応戦したが、ついに力尽きて引き受けることにした。

ところが生まれて初めてのコンピューターがこんなにワシのイメージの具体化にぴったりな装置であることを知って驚嘆してしまい、すっかりスーパー・ペイントなるコンピューターに憑依(ひょうい)され、三日間徹夜して三点仕上げてしもた。ワシとコンピューターの出会いは一種のコンタクトでもあった。

興奮冷めやらぬ折りも折り、再びアメリカのコダック社からマックのワークショップの招待が飛び込んだのや。もう一度チャンスを作りたいというのだ。ここまで言われればワシは流れに従うべきだと腹をくくって、アメリカ行きを決めた。アメリカでの収穫はマックだけでなく、他にも色々あった。この本の中でもし機会があれば語ることにな

るかも知れん。
三週間のアメリカ旅行から帰国すると、ワシを待っていたのはまたもやマックだった。田島君がマックの最高級一式をワシのアトリエに運んで、ワシのためにオペレーションを買ってでてくれたのだった。
「何でまた」
彼自身ワシになぜこれほどまでに献身的になれるのか、理由が見つからないという。
「きっと前世の因縁でしょうね」
マックとワシの結びつけにはワシは何か人智を超えた計り知れない神秘的なものを感じないわけにはいかなかった。
「マックを使って作品を作りなさい」
と天使に言われているような気がするのだった。そしてマックで制作した処女作品集は『天使の愛』（講談社コミックス）と題した。天使と直接コンタクトをして、そのメッセージを自動書記した中森樹庵さんとの共著で、本のデザインは田島君にしてもらった。

ゆうびんはテレパシー

そんな田島君をはじめ、ＮＨＫの柿野上ディレクター、高野カメラマン、飯塚録音技

師の五人で矢研の滝に行くことになった。矢研の滝は宮崎駅から日豊本線で約三十分の都農駅で下車、さらにそこから車で三十分ほど行った所にある、大小三十余りの滝からなる尾鈴山瀑布群の主瀑である。

柿野上ディレクターになぜこの滝を選んだのか訊いてみたことがないが、どうせ彼は「フト、ここだと思ったんですよ」と直観人間のワシを喜ばすような言い方しかしないに決まっとる。

ワシの興味は滝を見ると同時に滝の絵葉書をコレクションすることだ、ということはすでに述べたが、ワシが大いに期待するのは、ここ尾鈴山瀑布群の滝の絵葉書を手に入れることや。同行の都農町役場の河野さんにそのことを訊くと、「ない」と言う。ほとんど眼の前が真暗になりかけた。

「どうして滝の絵葉書のある滝を選ばないんですか」

「そこまで気がつきませんでスミマセン」

真面目なディレクターはワシの我が儘に頭をピョコンと下げて謝った。

「私が作った矢研の滝の絵葉書が一枚だけあります」

と言ったのは、車を運転してくれる地元のカメラマンの岩本さんだ。すでに諦めていただけに青天の霹靂だ。「求めよ、さらば与えられん」とはワシのためにある言葉だと

有頂天になる。はっと胸を撫で下ろして笑顔になっているのは柿野上ディレクターだ。でもまだ続きそうなワシの我が儘には一度クリアーしたぐらいでは安心できないという表情が笑顔の裏で緊張しているのがワシには透視できるのだった。

絵葉書が手に入るとわかれば、一刻も早くそれを手にしたいというのが人情や。その足で早速岩本カメラマンの家に直行する。写真とか、印刷物の滝では駄目でしょうか、と言ってくれる人も多いが、やはり絵葉書の滝でなきゃ意味がないのだ。

どこかでも何度も書いたが、ワシは子供の頃から「ゆうびん」関係が好きなんや。切手や郵政省認定の日付入り風景スタンプのコレクションをはじめ、文通大好き少年だったのは、ワシの郷里でも有名だったのだ。何しろかのエリザベス・テイラーにファンレターを出して、彼女から手紙やブロマイド、それに彼女の所に来た外国からのファンレターの封書に貼ってあったという切手を沢山送ってもらったことが地元の新聞で大々的に報道されたり、郵政省発行の郵便友の会の新聞などに出たりしたのだった。郷里に郵便友の会がなかったので早速郵政省に申請して郵便友の会を結成し、その初代会長に納まったりもしたものだ。会長ともなると他府県の友の会と交流したり大会に出席したりもしなければならなかった。

郵便友の会の主旨は郵便や文通を通して離れた土地の人々と情報交換をしながらお互

いの文化と教養を高め、よき社会を作り、社会に貢献できる人間像の形成というような立派な目的があった。ところがワシの目的というのは、他校の女子高生と文通しながら、いずれそれが恋愛に発展することを期待していたのや。恋愛も立派な文化だし、人間形成にもなる。だけど何といってもワシは我が郵便友の会の会長だ。ワシの文通相手は他校の会長や副会長のインテリ女子高生ばかりだ。インテリと美貌はどうもパラレルで両者が交差しないことが多く、従ってワシの夢は無残に終わってしまったというわけや。

しかし「ゆうびん」への憧憬は強く、将来画家の道を選ぶか郵便局に勤めるか大いに悩んだ挙句、進学を断念し、高二の時郵便局を選び、就職コースのクラスを取ったのである。その後の顚末(てんまつ)はすでにどこかで書いたので、ここでは触れないが、「ゆうびん」がワシに与えた影響は今後も止まることがないだろう。

滝は勿論、ワシの絵のイメージのほとんどはコレクションしている絵葉書から引用するものであったり、絵葉書そのものを作品にコラージュしたりするのも絵葉書が「ゆうびん」だからだ。ワシと「ゆうびん」の因果関係は直観と連関しているのだ。直観は一種の宇宙との接触行為(コンタクト)である。つまりテレパシーなんだ。言語やその他の感覚的手段じゃない精神から精神への思考や感覚や観念などを印象によって瞬時に伝達する一種の想念波動で、これをテレパシーというのと違うか。直観の受信もこのような機能によって

行われる場合だってあるはずだ。

ワシにテレパシー能力があるということを自覚したのは二十年ほど前や。こういう話をし始めると胡散臭いと思う読者も沢山いらっしゃるだろうけど、別に信じたくなければ信じる必要もありまへん。（大体こういう大事なところで関西弁を使うこと自体が問題だ。関西弁そのものがどこか胡散臭いからだ。ワシは上京してから三十四年になるから、関西での生活より長くなる。だから思考は現在使っているなまりのある標準語だ。関西弁が胡散臭いと思うようになったのは東京の生活に慣れたからだ。勿論、最初は標準語が馴染まなかった。例えば「だからサ」という言葉がエゴイスティックで押しつけがましくってどうも嫌だった。これを関西弁で言うと「せやからナー」ということになって、うんと情緒的だ。物をはっきり言うのが標準語というか東京弁だとすると関西弁は曖昧だ。しかも東京弁の論理に対して関西弁は感覚的だ。時には五感全体を使って表現するから身体的でもある。東京人の動作と関西人の動作は違う。前者は犬のようにキビキビしているが後者はのらりくらりしながら身体を猫のようにぐねぐねさせる。東京が機械的なら関西は自然的だ。また東京人は本音と建て前を分離させているが関西人はその二つがごっちゃである。

本音の中に建て前があり、建て前の中に本音があるのだ。その典型が京都にある。

「あらまあもうお帰りやすか、まあ上がってブブでも飲んでおくれやす」。その気になって座敷に上がってお茶でも飲もうなら、腹の底で「まあ、このどあつかましい」ということになる。この辺の心理の機微を嗅ぎわけるスリルは醍醐味でもある。だけど日本の文化は関西弁に代表されるように西洋に比較するとかなり曖昧だ。日本家屋一つとってみても内部と外部がはっきりしていない。山水画だって天地の境界がない。朦朧としている。横山大観などは「朦朧派」なる集団を結成したくらいだ。西洋はやたらとジャンル分けをしたがる。自己に対して他者を位置づけ、何でも対立させて喜んでいるようだ。日本のように島国ではないので国境に対する必要以上のアレルギーがあるのではないか。自然観も全く違う。西洋人は自然と同一化できないようだ。そしていちいち意味を問う。「なぜ、なぜ、なぜ」と。理由が認められないものに対する評価の恐れか。いちいち問題を追求して全て科学知で認識することが果たして人間の意識の進歩になるのだろうかということだ。最終的には自然を敵にすることになるだろうし、地球の破壊にも繋がる。

核の製造が好例だ。純粋科学の探求の結果の産物としか言いようがない。ＹＥＳ、ＮＯをはっきりさせるのが西洋近代の自我意識だが、同時に人間不信を生む。スケールは小さいが東京弁には近代の自我がある。ＹＥＳ、ＮＯが明快だから洗練されているが、関西弁のドン臭さにはどこか自我を拒否したところがある。金儲けのことしか頭にない大

阪商人でも自我がないのか、と反発を食らいそうだが、「まけてんか」「まけときまっさ」という具合に人情が商売の中に介在し、一種のゲームとしての遊び感覚がある。それはかつての江戸の下町の論理に共通したものがあったかもしれないが、今も存在しているかどうかだ。曖昧は言葉を変えると優柔不断ということにもなるが、人間はボーダーレスに森羅万象と連関している。その状態は一見曖昧だが、その因果関係は網の目の如く全宇宙に拡張されているものだ。むしろ曖昧であることの方が宇宙的なんだ。だから関西弁はエライのである）

ところで、ところでだ、UFOとはテレパシーによって接触（コンタクト）できるということを教えてくれたのはアメリカのジョージ・アダムスキーという人だったが、それを実践したある日本の若者がいて、その彼がワシにその事実を語った時からワシもテレパシー実験を始めたのや。その経緯についてはすでに『導かれて、旅』（JTB出版事業部）や『芸術は恋愛だ』（PHP研究所）などにも触れているので詳細は省略する。何しろこの本は今までワシが出版したどの本の内容とも重複しないようにとNHK出版の編集者の林さんから注文を出されているので、まるで火の中を潜（くぐ）るような思いだ。まあ火の粉は何度か被らざるを得ないやろけど、こんな感じで前に進もう。

テレパシーによってUFOが応答してくれるようになってからは、人とワシの間でもテレパシーが可能であることも知った。その先ず最初はユリ・ゲラーとの直接的なテレパシー実験やった。彼は超能力者だが、普通の人との間でもそれが可能であることを実験で体験した。実験者の全てと成功したわけではなく、ごく少数者だったがテレパシーが何も特別のものでないことを知った。テレパシー能力のある人の共通した性格は自分に妥協できない子供のような我が儘で無邪気な人に多かった。（ワシみたいだ！）

全てを理性で判断し、合理的科学主義が西洋の近代の知性といわれるようになってから人間は自然から離れ、人間が本来その因子の中に内蔵されているテレパシー能力を失っていった。それに代わって通信機関の発達が今日の文明を創造したわけだが、同時にそれは人間の精神の退化をも意味したのと違うか。

「ゆうびん」は正にその通信手段のプリミティブなメディアの一つである。テレパシーの後退に代わって登場した「ゆうびん」をワシが愛するのは、その原形がテレパシーだからや。

前世はニギハヤヒノミコト？

役場の河野さん、地元の岩本カメラマンを先頭にワシらも後をついて瀑布群のある山

懐に這入って行った。南国宮崎だといっても次の日から十一月、山の空気はひんやりとしとる。狭い山道の真中に黒い蛇が真一文字に伸びたまま横たわっていた。蛇を見るとワシはいつもドキッとして足が竦む。滝を見に行く機会が多いので蛇に会う機会も多い。気味悪いが縁起がいいというので内心は嬉しい。

天上も壁もごつごつした岩でできている人工のトンネルをくぐり抜けると小さい滝にぶつかった。川底がそのまま隆起したみたいに大小の岩や石がゴロゴロしており、そこには賽の河原に積み上げられたようなピラミッド状の小石の山が、あちこちに見られた。こういう風景を見るとやっぱり日本人の宗教観にあの世の観念が生きているんだなあと思ってしまう。

やや足元の危険な、カーブした崖淵をつたって出た所は左右に山を抱きながらも川幅はうんと開け、人が何人も乗れるような大きな岩が巨石群が崩れたみたいに重なり合っていた。そして、川の突き当たりは絶壁になっていて、その絶壁の頂上から二筋の滝が真っ逆さまに落ちて、轟音を滝を抱き囲んだ左右の山の腹にぶちつけておった。この場所はこの山の他のどこの場所とも異なっていて、別の時間が流れているような実にユートピックな神話的な空間だった。またこの場所だけにしかないという植物や、「大」の字そっくりの花びらを持った白い花が咲いていた。

CamScannerでスキャン

これが矢研の滝であった。
ワシはこの矢研の滝の由来を訊いて驚いた。これはまあ何という因果関係だろうと――。ワシは近代合理主義に毒されている一部の読者に再び顰蹙（実に難しい字だ）を買う羽目になるが、先ず物事を疑ってかかるという近代合理主義者と違って、ワシは先ず不可解なことでもそれを信じることを優先する人間なのだ。信じないということは科学知に頼り、また自己の思想（判断以前の単なる直観の立場に止らず、このような直観内容に論理的反省を加えてでき上がった思惟の結果＝『広辞苑』）の範疇から出たくない経験至上主義者やと思う。こういうタイプのインテリがいくら近代の自我の崩壊を憂えてもワシは信用しないことにしとる。
この種の人種を一番軽蔑していたのは三島由紀夫だった。彼らはだいたい三島さんの言う「義」などを持ち合わせていなかったから、当然、言霊のことなんか知らんはずや。ところが大衆はこの言霊によって芸術のパワーを見分けているのや。
それにしても『広辞苑』の「思想」の意味解釈にはちょっとひっかかりませんか。「単なる直観」とはどういうことだ。まるで直観が幼稚であると言わんばかりだ。それと「論理的反省」とはどういうことじゃ。直観を一〇〇パーセント信じるな、ということと違うか。ワシは直観は一〇〇パーセント正しいと思う。一〇〇パーセント正しいと

思う人間は、彼が直観を受信した瞬間にすでに直観の一部を思想化してしまっているからだ。「思想」に対してこのような解釈をした論者自身が直観を愛していない証拠だとワシは思っとる。

ワシも忙しい。こんなことにいつまでも関わっていることはできない。信じなくてもいい、「そういうこともあるやろなあ」と思う読者のために話を続けよう。

矢研の滝の名前の由来は、饒速日命が弟の神武天皇とともに東征される時、この滝で矢や鉾を研いで備えたということから矢研と呼ばれるようになったと言い伝えられている。ところがこの地元の観光協会のこの解説は何や。ニギハヤヒノミコトの弟が神武天皇とは何事や。ニギハヤヒノミコトの弟は紀記では瓊瓊芸命やで。

だけど紀記のいうことを信じたらあかん。これはほとんど時の権力者によって改竄されたものだということを知っておくべきだ。ニギハヤヒノミコトの弟がニニギノミコトというのだって怪しいものだ。天の橋立にある籠の宮大社の国宝に指定されている系図ではニギハヤヒノミコトはニニギノミコトの弟となっているではないか。ワシはこのことを三島由紀夫霊によって知らされていた。

ところでニギハヤヒノミコトといっても大方の人は知らない。何しろ日本史から抹殺

されている謎の大王(おおきみ)であるからだ。

そんなニギハヤヒノミコトが突然ワシの前に立ちはだかったのは十年ほど前やった。ある日三島由紀夫の霊とコンタクトしている見知らぬ霊能者が現れて、ワシの前世がニギハヤヒノミコトに関わる魂であると三島霊が言っているというところから始まった。そりゃ人間は転生を何度も繰り返しているのでワシが他人であってもちっともおかしくない。むしろその方が納得がいく。だけど、日本の古代神が転生するはずがない。輪廻(りんね)のサイクルが終わったから神になっとるんや。だけど、人の守護をすることはある。

「あ、そうですか、へえー、ニギハヤヒなんとかねえ、それにしてもその人はどんな人ですかねえ、名前からすると日本の神様ですかねえ、だけど日本の先祖をたどれば大なり小なり、どこかで神様と引っかかってくるのだから別に不思議でもなんでもないですよね」

とワシは特に驚きもしなければ不思議にも、といってこの霊能者の頭がおかしいとも思わなかった。その人にチャネリングしてくる宇宙存在がそう言ったのだから、その霊能者の責任でもなんでもあれへん。ワシもそれ以上ニギハヤヒノミコトに興味を持って調べることもなかった。だって、もしそうだとしても、今日から突然ワシの地位が上って偉くなるわけでも人生が変わるわけでもない。

だけど同じ人物の名前を全く別の遠く離れた場所に住む無関係な三人のチャネラー（霊能者）達から伝えられた。そこまで一致すると、「オヤ」と思わざるを得ないじゃないか。まあそんなわけでニギハヤヒノミコトにはワシは親近感を持っているのじゃ。ただそれだけのことで、その神話の人物とワシを比較して、横尾忠則はニギハヤヒノミコトに比べるとアカンナーといわれても困ったものや。

魂は転生するけど、一つの魂が分魂して複数の人間に這入ることもあるそうだ。よくブッダの生まれ変わりだという人が現れたりするが、本体は宇宙にあってそのオコボレみたいな分魂した魂が転生しているという場合があるので、その人が決して現世でエライ宗教家として人を導いているとも限らない。

ワシの知人で空海の生まれ変わりやという僧侶もおられるが、それにしても魂はある一定の方向性を持っとるので、前世と全くかけ離れたような人生を生きるというようなことはないと思う。だけどその魂が前世でか今生でかでカルマ（業）を解脱した場合は、一定の魂の方向性は無視されるはずや。だからよくない性癖は止めた方がいいというのはそういうわけと違うやろか。でないといつまでも輪廻のサイクルの中でぐるぐる廻っているだけで、ちっとも幸せな人生に遭遇しないと愚痴ばかり言うことになるはずや。

インドではこの輪廻のサイクルから何とか離脱して再びこの世に生まれ変わってこないことを願うために、修行したり宗教生活をしたりするのや。死期が近づくと長い長い旅をしてガンジスの河に辿り着いて、河の水で沐浴して彼岸に渡るのを歓びとしている病人をワシはガンジスのガートで見たけどね。

インドにカーストが未だにあるのはこのような宗教観が徹底しているからやろ。たとえ今生はハリジャン（不可触民）であっても来世はきっと貴族、上手くいけば天上界の指導者かと思えば今生の苦痛も耐えられようというものだろうか。

人は生まれながらに平等であるべきだ。なのにカースト制度があるのはおかしいということになりはしないか。確かにそうだ。だけど人間の存在を肉と考えた場合と霊と考えた場合は異なる。肉は今生限りだが霊は永遠である。つまり時間のスタンスが違うのだ。今世の百年たらずの時間で人を計るのと、宇宙的時間で計るのとはエライ違うじゃないか。

平等というのは霊の存在を指して言っており、決して現実の社会の場で論評されている平等とは本質的に違っているのや。今生だけで人の幸不幸を判断するから不平等論が生まれるのであって、永い転生の歴史の中では全て人は平等だと思うよ。転生のプロセスでカルマが付加されるので、そのカルマの表れだけを見ようとする現実認識が人の平

等に疑問を持ち、そして社会をヤリ玉にあげるのだ。
だけど戦争や飢えに苦しんでいる人々にとってはカルマ論を持ち出すことはなかなかできない。個人のカルマと国家のカルマがシンクロしていることだってあるかも知れない。そんな場合はどうすればいいのだろうか。祈りしかないのだろうか。肉を犠牲にして霊を救いなさい、となかなか言えるものではない。またそう思うことは難しい。
このようなことが地球の局部的な問題から地球規模に発展した場合、国家が悪い、社会が悪いといっておれないだろう。その時はやはり個人のカルマを見つめざるを得ないかも知れない。そうすると人類の滅亡は結局集合した一人一人のカルマが呼び寄せた結果ということになるかも知らん。

終末論みたいになってきたので話題を変えよう。
矢研の滝を見た日は宮崎に帰り、夜は田島君と映画『1492　コロンブス』というコロンブスの伝記映画を観に行った。それが最初から最後までわれわれ二人だけで誰も観客はいなかった。神の問題などが語られたり、ワシの大好きな密林が舞台だったりして偶然観たとは思えないような、なかなか示唆に富んだ物語だった。
次の日は宮崎から約一時間で都城（みやこのじょう）に着き、関之尾（せきのお）の滝に行く。車を降りるやいなや

ワシが飛び込んだのは土産物屋である。目的は言わずと知れた滝の絵葉書だ。あった、あった、にワシの心は弾む。

広い川幅いっぱいの滝だ。そこに見事な虹ができている。ゴツゴツした溶岩のような黒い岩壁に添って滝の水が大量に落下している。それを手前の吊橋から写真を撮ると全景がバッチリ入る。田島君はいくつもレンズを交換しながらワシのコンピューター作品の資料として撮ってくれている。

滝のすぐ上流には火山の溶岩でできたという甌穴群がありびっしり川を埋めており、その上を歩くのはちょっとスリルがあり愉しいものや。滝には伝説がつきものだが、この関之尾の滝にも悲恋の物語が伝えられている。

異界と現界は合わせ鏡

この本を書くためにワシはホテルにカンヅメになっているということはすでに書いたが、昨夜はこのホテルの中華料理店で『横尾忠則と滝と冒険』の完成を祝って打ち上げ会を持ったが、その席でお茶を沢山飲み過ぎたせいやろと思うが、寝つきが悪く、しかも夜中に眼が醒め、つれづれなるままに瀬戸内寂聴尼の『寂聴つれづれ草子』なるものを繙いたりしていると、ワシのことを書いた個所などがでてきたので、そこに眼を落と

すと、ワシと一緒にＵＦＯを見るために一晩中空を見上げ、瀬戸内さんが光り物を見るとワシが横から「あれは流れ星、あれは飛行機」となんでも全否定して彼女の愉しみを奪ってしまうと言い、折角見たような気分になっているのにと嘆き、最後に「暗示にかかりやすい人の方が、付き合って愉しい」と記されているが、この文章には異議あり。

第一、誰が一晩中も空を見上げますかいな。あの夜は秋吉久美子さんも交じえて、寂庵の近所の小川で蛍狩りをしたのだが、瀬戸内さんは少し上空を飛ぶ蛍を見て、「ＵＦＯだわ」とおっしゃるものだからワシが「あれはホタル」と訂正したら、「だって点滅しているわよ」だって。よくこれで王朝文学の世界と通じ合えるものだ。そりゃ錯覚した方が愉しいに決まっているかも知れんが、ワシのＵＦＯ目撃までが錯覚の産物だと思われたら困るので、幻想と現実の間に線を引いたというわけだ。

文中の「暗示にかかりやすい人の方が、付き合って愉しい」という個所はちょっとひっかかる。ホタルをＵＦＯと言ってくれなかったワシは暗示にかからなかったのであるで愉しくない部類の人間のように見えてしまうではないか。それともワシのＵＦＯ体験を瀬戸内さんはみんなワシの暗示だとでも思っているのでは。前世でワシの母親であった瀬戸内さんは子供の言うことを認めてくれなきゃ困る。

とこんなことを考えていると益々眼が冴えてきたので、持ってきた風邪薬を睡眠薬代

わりに半服飲んでみたが、もともと風邪など引いていないので妙な効き方をしてしまい、何だか身体がけだるくなり意識が風船のように膨張し朦朧となり、睡魔など一向にやってこない。非常に不快な気分を味わっとるわけだが、睡眠薬遊びがこういう状態を愉しむとすれば、これはかなりバッド・トリップである。その点マリファナやハッシシは意識を覚醒してくれるので天国的気分に導いてくれるよな。

この話を瀬戸内さんにしたら、彼女もいっぺんドラッグをやってみたいとおっしゃる。もし彼女がドラッグ体験をしたら、そのまま王朝世界にワープして、それはそれは目眩く雅びと眩暈の世界に陶酔しながら、「瀬戸内源氏」が誕生するかと思うと、そそのかしたくなってきた。

ワシは芸術は本来あちらの世界をこちらの世界に映すものだと思っている。芸術に限らず人間は何らかのかたちであちらの世界を養分として生きているからである。こちらの世界だけで生きるには辛いものがある。例えば先祖供養などはその最たるものじゃないかな。こういう行事を通して生者が心理的に浄化されるということもあるやろけど、生者と死者の間は念で結ばれているから、当然供養などをしてあげると死者にはその想いが通じて、彼等の魂も浄化されるはずだ。こちらがあちらの助けが必要なようにあちらもこちらの助けを必要としているのだ。つまり異界と現界は相対的なもので常に合わ

せ鏡だと思えばいいのじゃないかな。でも、こちらの世界に対する執着心のない霊はほっといても平気だろう。

この世界に必要なもの全てはすでにあちらの世界に用意されていると考えればいいと思う。だからあちらの世界に焦点を合わせて、回路を作ってやれば必要なものは何でも手に入るというわけだ。自我の範囲内でゴチャゴチャやっている間はこの宇宙のアカシック・レコードという知恵袋の存在に気づかないやろけど、自我を一旦離れればそれはダイレクトにあちらの世界がこちらに顕在化するはずだ。

ワシが描きたいものは、すでにあちらで完成されているわけやから、こちらで何も操作する必要がないのだ。自分が描いているという観念から描かされているという感覚に立てばあちらの世界とこちらの世界が通底するだろう。ドラッグはその両者の関係をシミュレートしてくれる。現実と異界をワシの内部で結びつけてくれたのはドラッグだった。それがまた瞑想を触発し、色々の超常体験に発展して、異界と現界は現在ワシの中でドラッグレスによって融合してきた。

そんな場を期待して屋久島にやって来た。鹿児島空港から日本エアコミューター機で屋久島に着いたのは午後の四時だった。空港には元ＮＨＫのカメラマンの日下田さんが

CamScannerでスキャン

迎えに来てくれ、屋久島で一番上等のホテル石路の宿に向かうことになったが、ワシと田島君を乗せたタクシーの運転手が、いきなりワシの娘の名前を言ったので驚いてしまった。

「美美さんが絵を描いてセンセイがデザインしておられる『TAO』にワタシの撮った屋久島の滝の写真が出てるんです」

『TAO』は日本導観の発行している会員誌だ。

「すると運転手さんは会員ですか」

「違うんです。この前、日本導観の導長の早島正雄先生が屋久島に来られた時、私が縄文杉に案内したんです。そんな縁で私の滝の写真を連載することになったんです」

ワシが十年前に導引術の指導を受けたのは早島先生からだ。そんなことがあって、現在『TAO』の表紙をデザインしているのだが、まさか屋久島でこんな運転手に遭うとは思わなかった。しかもこの人は自家製の滝の絵葉書を作っており、運よくそれを持っていたので貰うことになった。都農の岩本カメラマンにしても、この運転手にしてもたまたま滝の絵葉書を作製していたことと、またこの二人に巡り合う偶然は確率からいっても非常に低いはずだ。

この時期は一番日が短いので、たとえ九州の南端といってもホテルに着いた頃は陽が

陰り、辺りは青い紗を掛けたようになっていた。海岸が近いのか潮騒の音がする。ホテルの裏が松林になっていて、樹木の間から黒い海が見える。

と、その時突然ワシの魂がワシに語ってきた。

頭上には和志の故郷のシリウスが瞬いているのが見えるか。シリウスで発生した和志の魂は宇宙を彷徨すること五百万年にもなる。この銀河系の彼方の第三惑星の地球に降りてどれくらい時が過ぎたのだろう。和志の魂は今横尾忠則の肉体を借りている。棲み心地はもう一つだ。なかなか和志の思うようになってくれない。一体和志をいつまでこの地上に留めさせたいというのだ。和志は一日も早く和志の故郷のシリウスに帰還して未来永劫、神の懐で輝き続けたいと思っとるのじゃ。和志のこの叫びが届かぬか、横尾忠則。一日も早くカルマの輪廻から脱却して和志の元へ来たれ。

天空に瞬く星はその数を増し、見る見るうちに南国の天蓋を無数の輝きで埋め尽くした。夕食が終わってから、ワシは一人この天蓋の下に立って星空の友に思念波動の送信を試みた。冬の星座は格別美しい。東京のスモッグに覆われた夜空がまるでウソのようだ。ここ屋久島にはまだ神話の世界が生き残っておる。ワシの想念は神話の世界に一直線にワープしていく。

ワシの友とは、言わずと知れた遥か彼方からこの地球に来訪している地球外惑星の知

的生命体のことだ。ワシがどこへ行っても何をしていてもワシの友の意識が捉えられているのだ。そんな実感をさらに確信したいためにワシは天空に向かって波動を送信するのである。ワシの波動は宇宙の友に矢のように届くそうだ。すると友は次元移動を試みてワシの設定した視覚空域に光体と化して顕現してくれるのである。その光体は宇宙愛の波動だからそれに共振したワシの魂はその時グレードアップして、森羅万象と合一したような気持になるわけや。宇宙人の愛は人間では計り知れない莫大なエネルギーで溢れているのである。

この夜は最初ホテルの裏庭から友に波動を送り始めたが、波の音で意識が集中しないので、玄関の方に移り、静かな植込みのある場所からホテルの屋根のある上空を目撃対象の空域に設定した。波動送信を開始してだいたい二十分前後に友のシップは出現してくれる。早い時は五分位、遅くて三十分位だ。十五分位たった時、東から西にゆるやかな曲線を描いてシップは現れた。時間にすれば一秒もないだろう。シップの出現は何度見ても感動的だ。直截、魂をそっと女神に手で愛撫されたような感触が全身をインボルブする。このような宇宙感覚を体験するようになって久しい。

「あなた達はいつからぼくにコンタクトして来ているのですか」

「それはあなたがそう思った時からです。だけどあなたが考えているよりもっと以前で

す」

「ではなぜぼくにコンタクトをするのですか」

「私達はあなたを愛してしまったからです。あなたの神のようになりたいという気持が、ずっと私達の所に届いていました」

「あなたたちは何のために地球に来ているのですか、その存在は」

「神の仕事を手伝うためです。だから天使と同じような働きをします。私たちの生命体は女性です。あなたにはその方がいいでしょう。私達は肉体を持たない意識体ですが、あなたの所に飛んでいく時はシップに乗ります。私達が行けない時は私達と縁のある他のシップが私達の代わりに参ります。このことに拘わらないで受け入れて下さい。このこともあなたの成長になります。私達が誰であるかは今は内緒。それはあなたを危険から守るためでもあります。いつもあなたのことを想い、愛しています」

その後もワシは彼女達と何度も媒介者を通して語り合った。彼女達の宇宙愛に満ちた優しい想念をワシはこの原稿を書いている最中にも感応しているのや。それにしても彼女達の存在は「今は内緒」ということは一体どういうことなんやろ。聞かされたら吃驚するような存在なんだろうか。

ビジョン化された彼女達は、宇宙服を着用して背が高くキリッとした戦士の姿をとっ

ている。ワシがブラジルのイグアスの滝で彼女達のシップと遭遇した夜、ホテルの部屋でワシが寝ている隣のベッドに、足が膝から下ベッドの中に突きささった状態で宇宙服を着た一人の女性が立っていたことがあった。彼女のビジョンは黒闇の中だったがホログラムのように半透明に青白く輝いていた。頭部に白い帽子のようなものが載っかっていたので、最初は看護婦かと思ったが、次の瞬間この女性が身体にピタッとした宇宙服を着用していることに気づき、ワシは初めて彼女が宇宙人であることに気づいた。そしてその瞬間、彼女は闇の中にその姿をかき消した。

ついさっき目撃したシップの搭乗員の一人が、その姿をワシの所に次元投影してきたのかも知れなかった。そのことでワシは至福に満ちた幸せな気分で旅路の眠りについたのであった。

冒険小説と異界

翌朝は快晴だった。海岸の近くのガジュマル園でインタビューの撮影がある。ガジュマルはもともと琉球語で「榕樹」と書く。日本では沖縄と屋久島だけに自生しており、小笠原島にあるのは植栽されたものや。ガジュマルは繁茂すると他のガジュマルと混じわり、自他の区別もなくなるほどで、それだけで巨大なジャングルのオブジェと化す。

幹が多数分岐して気根を垂らすが、それは一直線に立てられた鉄骨のようだ。またその幹に傷をつけると白い液体がポトポトと止めどもなく流れ落ちるところはなかなかエロチックでええ。

そんなガジュマルの幹に凭れて、ワシは子供の頃読んだ南洋一郎の小説について語ることになった。

「あれは中学の頃だったと思いますね。学校から帰る途中毎日立ち寄る文化堂という本屋で、ぼくは一冊の本に釘づけになってしまったんです。その本からは輝くようなオーラが出ているように見えました。実際に出ていたかも知れません。ぼくは吸い寄せられるようにその本に近づき、そして〝早く手に取って頂戴〟と言わんばかりのその本を手にしたのです。その装幀と表紙絵は素晴らしいものでした。デコラティブな様式の金色の額画で本の縁が飾られて、その中にはターザンのようなたくましい肉体の長髪の男が片眼の黄金に輝くライオンと一緒に並んでいる非常に古典的な絵が描かれていて、それが南洋一郎の『片眼の黄金獅子』と題する〈新ターザン物語〉の第一巻だったんです。ぼくは生憎お金を持ち合わせてなかったので、誰かが買わないよう祈りながら一目散に家に帰り、父に小遣いを貰ってやっと手にしたんです。それまでぼくは南洋一郎の小説は読んでいなかったんですが、この本を買った動機は鈴木御水の絵（本文に挿絵が沢山

あった）と見たこともない装幀と、この小説が〈新ターザン物語〉だったからです。ぼくはターザン映画が大好きだったんですよね。ぼくの最初の映画の記憶はターザンです。ターザンが人食い人種に仕掛けられた檻の中に閉じ込められ、心配したチンパンジーのチーターが檻を一生懸命揺すっているシーンは今でも眼を閉じるとぼくの網膜に映るくらいです。この映画は長い間『鉄腕ターザン』だったと思っていましたが、偶然にもこの間テレビでこの映画を観たんです。題名は『類人猿ターザン』でした。見覚えのあるシーンに出食わす度に、胸が熱くなりました。それにしてもどうして『鉄腕ターザン』だと思っていたんでしょうかねえ。次に観たのが『ターザンの逆襲』だったように記憶しています。『ターザン砂漠に行く』というのもありましたね。ぼくがどうしてあんなにターザンに憧れたのか、理由はまだ幼かったからよくわかりませんね。超人的なカッコよさとあの密林に潜むセクシーな雄叫びですかね。またはモーリン・オサリバンのジェーンに母性を感じたのかも知れないし、ジョン・シェフィールドのボーイがぼくと同年輩だったこともあったと思います。そのボーイが如何なる危険からも両親に守られているという安心感でしょうか。それとも未知の密林に待ち構えている危機に異界の恐怖みたいなものを抱いていたからですかね。次々出てくる動物にはきっと眼を白黒させていたと思います。画面いっぱいにチンパンジーが歯を剝いて奇声を上げるシーンでは、

驚いて哭いたのを今でもはっきり覚えていますね。ところで南洋一郎の『片眼の黄金獅子』は日本人の母とアメリカ人の父の間に生まれたパルーパと名乗る密林の孤児がチンパンジーに育てられて、成人として成長し、大活躍する物語なんですが、全五巻で完結篇を残したまま出版社が倒産して未完のまま終わってしまったんです。ところがこの完結篇が三十年を経てやっと出版されたんです。こんな不思議な話は世界中でも滅多にないですよ。完結篇が出るまでぼくはずーっと自分の内部に中学生の〝ぼく〟を失わないで持ち続けていたんですが、その完結篇を読んでしまうとぼくの中学生が終わってしまうようで怖くて未だに本を開いていないんです。だからこのパルーパの物語はぼくの中の掛け替えのない宝物なんです。ぼくの意識の中ではいつもパルーパと一緒だったから、何をしても何処へ行っても彼はぼくについてきてくれました。だからぼくの現実はパルーパの世界まで続いていたので半分はフィクションの中で生きているという感じだったんです。そんなわけで現実がいくらフィクション化されてもぼくは驚かない性格になっていました。だから今、異界からの接触があっても全く恐ろしいなんて思ったことはないです。むしろ異界と接触している方が安心です。人は常に五感によるリアリティを認識していなければ不安になりますが、ぼくにとってのリアリティはむしろこのような肉体感覚では知覚できない超感覚の方が信用できるというわけです。ぼくが密林冒険小説

が好きなのは、もちろん冒険という未知に対する挑戦に興奮するわけですが、それは異界に接触することと全く同じなんじゃないかと思うからです。ぼくの中の因子がどうしても異界と接触したがるわけですね。それはもしかしたらぼくは異界から完全に抜け切らないまま現世に出現してしまったからかも知れないと、時々そんな風に思うことがあるんです」

ガジュマル園でのインタビューが終わった後、千尋の滝を見に行く。この滝は高台の展望台から見下ろすことになるのだが、かなり遠景にもかかわらず迫力がある。横なぐりの風のせいで滝の水が噴煙のように舞い上がり、そこに色鮮やかな虹が掛かるが、それが信じられないほど幻想的なんだ。

「あゝ虹だね！　滝に掛かる虹は美しい！　心が洗われるようだ！　太古の時代からこうして滝の水は途ぎれることなく流れているんだ！　人類の歴史も滝と同じなんだろうなア！」

とワシが立松和平の口調で滝をレポートすると、スタッフに大うけだ。

取材中しょっちゅう立松和平の物マネをしていたので、その口調の癖が取れず、つい本番のレポートでも出てしまった。千尋の滝に向かうシーンでのモノローグがどこか立松節に似ていると番組を見た人が言ったが、当たり前だ。

千尋の滝の後は大川の滝に向かった。ここは洪水になると近づけないほどの水量で非常に迫力がありそうだが、この日は水量が少ないと案内役の日下田さんは言った。

番組の中で岩に腰を下ろしてワシがこの滝を見ているシーンで、いきなり滝の流れの中にワシの高校生だった頃の回想シーンが重なるところは柿野上ディレクターの想像力の上手さに拍手を送ったが、その少年とワシの現実の姿をオーバーラップしながら消していったあのシーンは、今のワシが滝の流れの中にムカシのワシが岩に腰を下ろして郷里の滝野の闘竜灘の滝を描いているシーンを同居させた方が、もっと幻想的でよかったと思うだけに少々残念だ。

二つの滝を見てこの日の宿舎である国民宿舎ホテル屋久島温泉に向かう途中、いくつかの郵便局で風景入り日付スタンプを捺印して廻る。この趣味というかコレクションは昭和二十三年から続けているので随分沢山スタンプが集まったと思う。

案内された国民宿舎の部屋はなんだか落ちつかず、共同便所のドアは鍵が壊れたままだし、この部屋では疲れが取れそうにないので、田島君と二人で前日のホテルに移動する。ワシは食べ物などにはうるさくないがホテルと車だけにはうるさい。不眠症体質だから環境が悪いと眠れない。また移動は少しでも身体が休める車が必要なんや。スタッフからうるさいヤッチャなと思われたようだけど、このポリシーだけはどこへ行っても

守るようにしているのや。神経を休めるためにも常に身体を快適な状態にしていたいからである。だけど単に我が儘だと思ってなかなかこのことが理解してもらえないこともある。

『横尾忠則と滝と冒険』の放送が終了すると同時に電話が鳴り出した。番組の感想は口を揃えて「よかった」だった。延々話し中なのでその間FAXが何通も届けられた。
「NHK今見終わって、お宅に電話しても出ないし、事務所は話し中ばかりで、ホテルのTEL聞き忘れて、しまったと思っています。でもたぶん、今、そっちもTEL鳴りつづけていて、きっとつかまらないでしょう。
なんだかしらないけれど迫力があって、音楽がよくて、滝がダイナミックで、絵がド迫力で、よかったです。
こういうの再放送しないのかしら。
私は今、仕事場でひとりで観ていい気分でした。何かしら、イメージがいっぱい湧いてきました。滝はエロチックだけれど、このテレビではあまりエロチックな点は感じなかった。でも『生命』を感じます。『芸術の王』の完成が楽しみです。私は今『きみ子方式』の絵の教室で葱(ねぎ)の絵を描き、このTV見たら、何だかおかしくなりました。

早く原稿仕上ること祈っています」

瀬戸内寂聴さんからのＦＡＸで、この後すぐ電話があって、ワシが「眠い、眠い」と言うと「早く寝なさい、寝なさい」と言いながら一時間の長電話だ。

そういわれれば滝はエロチックだ。垂直に滝壺に落下する滝は、男性器と女性器の合体だ。滝はその性質上両性だからアンドロギュヌスであり、芸術家の特性でもある。那智滝はそれをその形体で説明している。この滝は全国でも有名な御神体である。その滝が見る者に巨大なバギナを連想させる。連想ではない、そのものズバリや。御神体には女性器や男性器を象（かたど）ったものが多いが、那智滝は正に自然の造型によって作られたバギナである。だから御神体と呼ばれる由縁やろか。

滝の落下を長時間眼を凝らして見つめた後、サッと視線を滝の左右どちらかの岩肌に移動すると面白い現象にぶつかる。岩肌がそのまま上昇していくのだ。ワシは最初自分に超常現象が起こったのかと思ったくらいだ。この遊びは結構面白くてやめられなくなってしまう。

滝の形体やその状態だけがエロチックだというわけではない。滝の側で長く見ているとそのエネルギーによって高揚し、官能的な気持にさせられてしまう。エロチックな表現は表現する者がエロチックな体験をどれほどしているかによって変わってくるものので

ある。そやけどエロチックな表現がされているかいないかで、作品の深さはうんと変わる。エロチックな要素はある意味で作品の要である。まだ若いディレクターの処女ドキュメントだ。そのうちエロチックな作品が作れるようになるやろ。そのためには時には不道徳でなきゃッ。

死の記憶

ここまで書いたところで高輪プリンスホテルを引き上げることになった。ほとんど部屋の中に閉じ籠もったまま原稿を書き続けていた。テレビや読書の好きなワシにしては珍しく誘惑に負けなかった。えらいストイックやった。担当の林さんと会食する以外はルームサービスだもんだから完全に運動不足になってしまい、長期入院していた患者の病み上がりみたいに身体がフラフラして体力が減退したのが目に見えるようにわかるんや。もうカンヅメになって仕事をするのは二度とゴメンだと思いながら、いっぱいの荷物と共に帰宅する。

その途上、首都高速で前を走っていたトラックの荷台から、畳一枚、厚さ三センチほどの大きさのデコラ板が落下してきた。この瞬間を見ていたのはタクシーの運転手と隣に座っていた林さんで、ワシは運転手の後ろの席だったので、タクシーがデコラ板を轢

いた「ガタン」という音を聞いただけだった。二人の目撃談によると、宙に舞い上がったデコラ板が一瞬タクシーを直撃するやに思えたその時、何を思ったか、デコラ板は急に水平になったかと思うと、そのままフワッと道路に着地したそうだ。

その瞬間を目撃した二人は突然饒舌（じょうぜつ）になって、如何（いか）に危機を脱したかについて喋りまくるのだった。

「横尾さんと車に乗るとヤバイなあ」

と林さんは思ったそうだ。それもそのはずワシは三度もタクシーで事故を起こしているからだ。『旅』誌で取材した時も石川県でタクシーが対向車と正面衝突をした。その時も同乗の編集者は事故の原因がワシにあると思い恐怖したらしい。どうもワシは事故に限らずヘンなものを呼び寄せる因子を持っているのかも知れない。でもそのことが決定的なダメージになったことは一度もなく、むしろ好転のきっかけになっていることの方が多いので、感謝しているくらいや。

一種の軌道修正が必要だったのだろうと思う。日常の流れがこのようなハプニングで一旦寸断されるが、そのことがきっと新しい展開のためには必要なのかも知れない。病気だって同じだ。五日間のカンヅメの後、翌日から三十八度の高熱でワシはダウンしてしまった。平熱が三十五度少々だからワシにとっての三十八度は一般の人の三十九度に

匹敵するはずだ。三十八度位になると医者の前でも自慢できるが、三十六度五分で苦しいと訴えても、医者は「奥さん、御主人を過保護し過ぎですよ」と言ってなかなか病人扱いしてもらえない。

ワシはしょっちゅう倒れる。だいたい風邪を引くと下手すると一ヶ月位寝込むこともざらである。ところがこれが結構休息になるので、まんざらでもない。わずらわしい仕事から解放されるからや。今や病気はワシにとっての健康法になっているともいえる。そのくせ、いよいよワシの人生もこれまでか、と悲愴な気持になってすぐ「死ぬ」気になってしまう。

死ぬのはそれほど恐怖しないのだが、死ぬ瞬間の苦痛を考えるとやはり恐怖だ。眠っている間に本人も知らずにスーッと死後の世界に移行するのがワシにとっては理想の死の美学じゃないかと思っている。

「アッ、いよいよ今死ぬのかな」

という瞬間は死んだ大部分の人が経験する感情だと思うけど、この瞬間恐怖心を抱かない人っているのかなあ。あるいは生きていることが耐えられないほど苦痛だった人にとっては死の瞬間は待ちに待った感動の一瞬なのやろうか。だけど唯物論者より唯心論者の方が、死の観念に打ち勝つと思うよ。

柴田錬三郎さんは、

「死んだら無になりたいねえ」

とおっしゃったことがある。ワシは欲があるのか死んでも意識活動は続けたいと願うのである。結局はなんてことない、生に対する執着が強いことを物語っているだけや。だけどワシの死後のイメージは生の延長上に置いているので、生も死もさほど変わらないと判断している。夢の中で「これは夢だ」と認識できないように、いちいち死の中で「これは死だ」と認識することがあるのかどうかだ。そりゃ死んだ当初はパニックを起こしているので、すぐ自分が死んだことを認識できないと思うが、そのうち時間が経つ（といっても死後の世界には現象界のような時間はない）に従って死を認めることになるだろう。

人によるが本当のパニックは自己の死を認めてから起こるのかも知れない。現世に対して執着が強ければ強いほど苦痛は激しいだろうと想像できる。肉体があれば解決できる問題でも肉体がないとなると現界とは一方通行で全くコミュニケーションが取れなくなる。それも肉体時の物質的波動よりさらに精妙な波動の意識体になるわけやから、建て前と本音が使いわけできた現象界とは勝手が違う。夢が本心を映し出すように霊魂は望むと望まざるにかかわらず裸の自己と余儀なく向き合わされるはずだ。これはちょっ

CamScannerでスキャン

と怖いね。だけど心の思いのまま生きている人にとっては全くどうってことないだろう。
死んだこともないのにエラソウに見てきたような話をするな、と言われそうだけど、本当は誰でも死んだ経験はあるんじゃないかなあ。この世に生まれてくる時は性別、国別、人格も時代も変わって生まれてきているので、その記憶は魂だけの知るところだけれど、死に対しては人は何か特別の意味とか恐れを抱いている。それは人間に限らず動物だって同じだろう。死を予感した動物は極度に恐れるが、それは死が何たるかを魂が知っているからだ。でなきゃ死の観念がない動物がどうして恐れなきゃいけないというのだ。
といって人間が死を恐れるのは単に死の観念だけではなく、もっと本能的なものやろ。本能的なものには何らかの形で死の記憶があるのではないかと思う。だからわれわれは死の世界からやって来て、ある時間を生の世界で過ごし、そして再び死の世界へ戻って行く、そんな旅人なんだ。

魂は転生する

ワシはかなり小さい頃から輪廻転生を信じていた。誰かに教えられたわけではなく、不思議といえば不思議だが、そんな実感だけはあった。死が別に怖いとは思わなかった

けれど、一人っ子のワシは両親の死をいつも恐れていた。これほど怖いものは世の中になかった。両親が死ぬということはどういう意味かさえ考えられないほど怖かった。想像がつかなかったのでよけい怖かった。両親がいなくなるということは世界の喪失と等しかった。またこのような両親の死はあり得ないことだと信じていた。だから自分の死以上に脅えていたのである。

小さい時、一度人混みの中でワシは両親とはぐれたことがあった。この時の孤独感ほど恐ろしい経験は後にも先にもたった一回だった。それは両親の死の予感でもあり、世界の喪失感でもあった。今でもあの時の絶望感は忘れられない。戦時下で幼い子供が両親を失って絶望している光景をテレビなどで見る時、ワシはあの時の自分の体験を思い出して、耐えられない気持に襲われる。

幼い子供にとってこのような強烈な孤独感は一体どこからやって来るのだろう。このような孤独感と死の観念はどこかで繋がっているように思う。ワシがこの世に生まれる直前までいた死の世界では、ワシは過去世の人格を持った別人だったはずや。そんな別人がワシという人格になってこの世に生まれて、まだ日が浅い時期には全ての事象が珍しいようだ。

長女が二、三歳の頃だった。ある日彼女は自分の名前がＭＩＭＩではなくＳＵＭＩＫ

Ｏだと言いだしたことがあった。「ＭＩＭＩ」と呼ぼうものなら狂ったように本名を否定して、「ＳＵＭＩＫＯ」であることを強調した。人格さえまるで別人のようであった。ワシと妻は途方に暮れてしまった。何か非常に恐ろしいことが起こる前ぶれのような気がしたからだ。

だが幸い翌日、彼女は本名のＭＩＭＩに戻っていた。それに不思議なことに前日自分がＳＵＭＩＫＯであったことを一切忘れてしまっていた。一体何が彼女に起こったのだろう。よく子供が前世の記憶を持ったまま生まれ変わることがあるというが、彼女の場合はたった一日だけだったが、前世の人格が突然蘇ったのだろうか。それとも全く別の人格が彼女に憑依して彼女の意志をコントロールしたのだろうか。

また彼女がもう少し大きくなった時だった。

「夕べも白い長い洋服を着たきれいな外国人のような女の人がベッドの所に来たワ」

と言った。何でも時々その美しい女性が深夜に彼女の所に訪れるらしい。特に会話を交すわけでもなさそうだ。そして「わたしはマリアよ」と自分のことをそう呼ぶのだった。夜な夜な現れるその女性の名前がマリアなのかそれとも娘がマリアなのか、その正確なところは幼い娘の表現じゃ理解できなかった。

そんな娘は学校へ行くようになってからはキリストやマリアの聖画を集めるのが趣味

になり、毎晩ベッドの側に小さい聖画を並べて眠るようになった。聖画だけではなく仏教の経本を読むのも好きになった。また霊夢を見る機会も多くなり、

「金色のお釈迦様が二人ゆかたを着て部屋の中に座っていた」

などと話すことがあった。夢だけではなく頻繁に幽体離脱をすることもあるようだった。

「ベッドから身体だけが、スーッと横に移動して宙に浮いたままになったかと思うと、急に身体が上昇して屋根を突き抜けていっちゃった」

これに似た経験はワシもあるが、彼女はその回数がかなり多い。そしてある日ついに、というべきか、寝ている時に部屋いっぱいに羽を拡げた大きい天使が飛び込んできた。そしてグレゴリオ聖歌を彼女にたっぷり聴かせた。

その日から彼女は教会に足を運ぶようになり、その数年後、洗礼を受けて本物のクリスチャンになり、一日も欠かさずに教会の礼拝に出席している。彼女がなぜクリスチャンになったかワシは知らないが、彼女を衝き動かした何か見えない力によって導かれていったことだけは確かなようだ。子供の頃からそのような要素はあったが、単に今生の出来事だけが彼女の行動を決定したとは思えないのである。彼女の中に元々ある因子は前世からの継承でもあると思う。

魂は肉体のように遺伝子を持っていないので遺伝するというようなことはないが、魂自体の性質による方向性はある。だから今生に於いても前世の習慣性の影響下からなかなか抜けずに同じような行動様式を取ってしまう場合がある。つまり前世から今生に、さらに来世へという具合に次界にかけわたすということになる。

例えばワシは今生に於いて絵を描いているが、ではワシがなぜ絵を描かなければいけないのかといえば、その答えは前世にあって今生では知る由もない。とにかく物心がついた時点で絵を描きだしたまでだ。両親に絵の才能があったわけでもないし、家系にそんな趣味のある人物がいたという話など聞いたことがない。魂の存在と転生を否定する人達はこのような現象を遺伝と考え、たとえ両親にそのような因子がなくとも遠い先祖にルーツを求めて立証させようと試みるかも知れない。

肉体的な特徴は確かに遺伝によるものだろう。つまり一人の人間が形成されるためには魂の方向性と遺伝が複雑にからむ必要があるのかも知れない。遺伝には合理的な理由があるが、魂の伝承に関しては動機などに理由を見つけることが不可能な場合がある。にもかかわらず合理的な理由をつけるのは悪しき近代主義の理性のせいやと思う。

とにかく自己ほど神秘的で謎めいた存在はない。これこそが人間であると思うよ。説明不可能な事象に科学のメスを入れたり、分析したりしなければならん理由などどこに

もない。合理的な解釈が行われなきゃ行動できないというのは自我の崩壊に恐怖を抱いているせいだ。苦悩や苦痛の原因を生む自我が何ほどの価値を持つというのや。自己を愛するということと自我を愛するということは別問題だと思うがね。

もし本当に自己を真から愛することができるのなら自我を捨てることぐらい朝めし前でなきゃおかしい。自我を後生大事に守りながら、自己を愛するということは不可能に近い。芭蕉が俗界から足を洗って旅に出たのも真に自己が可愛かったからであろう。何ものからも束縛されず本当に自然の本源と一体になって真の自由の大海の中を悠々と抜き手を切って泳ぎたいと念ずるなら、芭蕉がしたように全てを放下(ほうげ)するより道はないのと違うか。永遠の真理の探究者になることを自己に約束するなら、自我を捨てることが最も近道だろう。

　自分自身を完璧に愛することを躊躇(ちゅうちょ)していることは自我を愛していることである。自我を愛することは芸術家にとっては完全な神の意志の伝達者としての道具としては不完全である。とにかく難しい。何も芭蕉みたいに家族も名声も捨てて旅に出る必要はないけど、人は一度手にしたものを手離すということが如何に難しいかということだ。一度手にしたものには情が移る。愛情ではなくて、情なのである。愛はその対象を解放して自由にしてやることができるが、情はその反対に抱きかかえて相手の自由を束縛して

しまう磁性力がある。

多くの場合愛と情をごっちゃにしてしまっているはずだ。執着というのは愛ではなく情を指す。この執着がくせ者である。われわれは愛と情の区別さえできないでいるように思う。子供や妻に対する愛は本物だろうかと自問することがある。愛という名のもとで子供や妻の自由を縛っているとすれば、それは愛ではなく情だ。天上界には親子の情愛というものはないはずだ。天上界では全て兄弟（姉妹）としての共存で満ちている。友達のような親子関係が望ましいのだ。

日本人の美学の中に情を認める文化があるが、この美意識は危険なものであるとワシは思う。情をかけることによって相手が生かされるというのは実は大間違いだ。「情は人のためならず」とか言うじゃない。真に相手のことを思うなら、そこには自己犠牲の精神がなければそれにタッチすることを禁じるべきだ。情は相手も自分も同時に殺してしまうことになるからだ。

直観は神的

それにしても人間はなぜ自己を律し、時にはストイックな生き方に憧れるのだろう。ワシも芭蕉や山頭火に憧れたことがあった。何か自分の限界に挑戦してみたいという欲

求であったかも知れない。人間の存在自体に対する可能性である。この考えの根底には人間を超自然的な存在として認識していたことがあった。つまり人間を肉体的存在であると同時に霊的存在とみなしていたから、その霊的なるものに自らを委ねられないかと思ったのだ。

その場合、ワシの前に立ちはだかったのは死の問題やった。死の問題が解決されない限り、霊的なものとしての自己を認識できないと思ったのだ。なぜそう思ったのかはワシ自身もわからなかったが、とにかくそう思ったのである。ワシはがんじがらめの合理主義者ではなかったので、魂の転生は感覚的に信じていた。科学で解明できないこの不条理な転生をワシが信じることができたのはワシの直観的なものだ。直観は神的なもので、われわれがよく言う閃きとは根本的に違うと、書いた。直観は直接に神の観方を体感することであるが、閃きは人間が自らの五感を通じて体感する一時的なアイデアであるから、直観の神的なものに対して閃きは人的なものと解釈するべきや。

ワシはその直観で人間が輪廻転生することを理解し、過去世も来世もその存在には何の疑問も抱いていなかった。だけど死を恐れていた。転生を信じるなら死を恐れるのはおかしいはずである。それはワシがまだ未成熟で現世や生に対する執着が多々あるからだ。この執着がある以上、死の恐怖は永久に消えない。つまりワシが自分の限界に挑戦

しようとすることは、執着との闘いだったのだ。一度手にしたものを手離すのは非常に難しい。

名誉、地位、財産、家族などの物質的なものから自由にならない限り、自己の限界に挑戦することは至難の技といえる。最初からなきゃ簡単だ。ワシにとって一番難しいのは家族に対する執着だった。家族を友達のように、兄弟（姉妹）のように見ることが果たしてできるかどうかに、この遠大なテーマはかかっていた。このような現世的なものからワシが自由になれたら、その瞬間からワシの死の恐怖は消滅するはずだ。

現在、ワシは完全とはいわないまでも、死を愉しむ余裕が時に見えるように思われるが果たしてどうやろう。愉しみからか恐怖からかわからないがワシは死後の世界に非常に関心が強い。もしワシが死を恐れるとしたら死後の世界に行くことではなく、現世のものから別れることや、死の瞬間の苦痛を恐れているのだ。このことはワシに限らずほとんどの人間が抱く恐怖である。

だけどワシほど死後の世界にユートピックな観念を抱いている者も少ないのではないやろうか。それはワシの描く作品に最も顕著に表れている。ワシがロマン派絵画に最も傾倒している理由もそこにある。といって現界に絶望しているわけではない。チベットの『死者の書』がそうであるように、ワシは死の世界から生の世界を覗くことによって

生を実感しているのだ。ロマン主義はファンタジックな夢のような世界を夢みることとは違う。無限を表現することだ。自分の最もヤバイ自分を描くことだ。自分で自分の首を絞めて見せる。そのギリギリがロマン主義だ。三島由紀夫がそうだったように。

ワシはすでに媒介者によって死者と度々コンタクトを取りながら、亡き両親や親しい知人達と度々語らっているので、そのリアリティは他人が想像する以上のものを実感している。ワシにとっての現実は死後の世界や天界をも含んだものを指すことになる。もしかしたらこの物質的現実より、コンタクトを取っている天界や霊界の方によりリアリティを感じているのかも知れない。

ワシのこの両界にまたがる視線によってワシはバランスを取っている。対立する両極の概念こそ宇宙そのものであるからだ。つまり森羅万象を一つにして全てを共存させることがワシにとっての美の力になっているからだ。

ワシの共存すなわち共尊の考えは地上の矛盾する事柄や事物だけではなく、地上と天上をも共存させてしまおうとしているのである。それがまたワシの芸術に対する考え方でもある。ワシは今、集大成の時期にあり、森羅万象の一体化を目指そうとしている。この認識は現界での限界となろう。普遍性、永遠性とは正にこのことを指す。森羅万象の一体化とは天界からの目指(めざ)しである。

ワシは以前から常に上空からの視線を感じていた。その場合の視線はワシが愛して止まないUFOからの視線だった。上空からの視線を受けるようになったのも、元を正せばワシがUFOを求めて上空に視線を投げかけていたからであった。

ワシは幼い頃から不思議な特技があった。それは望めば流れ星を見ることができることだった。だがそのことは、UFOに波動を送って自在にUFOを見ることが可能になった現在、ワシが流れ星だと思っていたのが実はUFOであったということを、やはりUFOの搭乗者によって明かされた。

ワシの天界への憧憬は当然天界に通じ、天界の存在よりその都度、媒介者を通してワシに必要なメッセージや波動が送られてきた。その結果、ワシは天界の意志を地上に下すべき媒体の役割を自らに約束した。そして芸術家は神の道具となるべく運命づけられた使命によって創造すべきであるという考えに到達したのだ。

ここには近代主義的な自我は存在しない。全て神に預けてしまうことによって、逆に自らを消すことが創造であるということだ。芸術の本源は元々この人間界から生じたものではなく、天界からもたらされたものであるという考えがワシの中にあるから、ワシにとっては自我が逆に創造の邪魔になるのである。そしてワシは常に一元的なアイデンティティを拒み、多元的なアイデンティティを持つことで、自己の内部の複数化された

「小さい私」を表出し、トータルな自己を目指そうとしている。つまり己が己と共存（共尊）させようとしているのだ。ワシがマーク・コスタビをはじめリサ・ライオン、インドの映画の看板屋とコラボレーションするのも、みなこの共存のシソーから来ているということにしておこう。

ワシはコラボレーションのことを内なる他者との共存だと考える。この言葉が説得力を持つのは特定の様式を持たないというワシの「様式」からもうかがえるはずだ。つまり複数としての多様な様式をすでに内包しているからだ。ワシのこのような考えは「小さい私」が大いなる自己（超自我または大我）との統合を意味しているからだ。今後のワシは「自分が横尾忠則であるということを消す」方向を目指すことになるに違いない。北斎が複数の画号によって自己消滅を求めたように。

第二話——彼（自己を想う）

CamScannerでスキャン

飛行機での恐怖体験

本書のイメージをふくらませるために彼は出雲と隠岐に四泊五日の旅に出ることになった。が、その当日彼は三十六度五分の高熱を出した。この程度の熱は一般的には高熱とはいえないが、彼の平熱は三十五度そこそこだから、彼にとっては高熱ということになるらしい。そりゃそうだ、常人にとってはあと五分で三十八度だから、やはり彼にとってはかなり辛い状態に違いない。体力にそれほど自信のない彼は、もし旅先で入院でもするようなことになったら一大事だと思って、出発を一日延期して様子を見ることにした。

そして次の日が来た。熱は五分下がって常人並になったとはいえ、彼にすればまだ依然として一度高いのだ。もうこうなったら一般的な判断は彼には通用しなくなり、彼の気分が安定するのを待つしかない。彼の本心は当然旅に出たがっている。だけど肉体が拒否しているようだ。どちらを優先するかは彼の決定を待つしかない。肉体があるから精神があり、精神があるから魂が存在するのではなく、魂があるから精神、精神があるから肉体があると考える彼なら、当然肉体より精神を優先するのが彼らしいはずだ。

「エイ、死んでもいい、旅に出よう」

だいたい彼は大袈裟だ。

混雑した空港内ロビーで往来する人に何度もぶつかりながら、ふらつく身体をやっと立て直して、彼は機内の人になった。座席に着いた途端、彼の執着していた病状は彼の意識から忘却されてしまっていた。彼は飛行機が大嫌いだ。頻発する航空機事故を考えるとロシアン・ルーレットのゲームに参加するようなものだと考えていた。好んでこの殺人ゲームに参加するのはスリルを体験するという別の興味があるとしても、飛行機に乗るのは何もスリルを味わうためではなかった。

海外旅行の飛行機で彼は何度か怖い目に遭っている。その一つが最初にヨーロッパに行った時のことだった。そういえばこの時も常人では三十九度近い高熱のまま彼は飛行機に乗った。生まれて初めての海外旅行で、有り金はたいて団体ツアーに参加したので、キャンセルしても料金は払い戻してくれない。この旅行が最初で最後だと思っていた彼は、何が何でも一生の想い出にしたいと思い、苦しい家計も顧みずに、有り金を手にして日本を後にした。

乗客のほとんどが初めての海外旅行とあって、機内は妙な興奮で盛り上がっていた。間もなくアンカレッジ空港に近づくというアナウンスがあった頃、突然、飛行機は猛烈に揺れ始めた。頭上の荷物入れの蓋がバタン、バタンと開き始め、キッチンの棚からは

食器が心霊のポルターガイスト現象のように床にボンボン落下し始め、さっきまで通路を歩いていたスチュワーデスもパーサーの姿もどこにもない。機体が揺れるだけではなく、エアポケットに入ってしまっているのか、奈落の底に落ちるように、機体と一緒に身体がぐんぐん下方に引っぱられていく。生まれて初めて乗る飛行機がこんなに恐ろしいものだとは誰も想像していなかった。

「窓のシャッターを閉めて下さい」

命令調の英語のアナウンスがあった。窓のシャッターを閉めれば少しでも安定した飛行ができるとでもいうのだろうか。飛行機や飛行に関する知識など彼にはあるはずがない。

一斉に窓が閉められた。外は夕闇が迫り、雲海は墨を流した夜の海のように見えた。その雲海の彼方には血のように真赤な帯のような線が視界いっぱいに引かれていた。初めて見る光景だ。地上では絶対見ることができない恐ろしく美しい眺めだ。機体は依然としてギシギシと音を立てて軋みながら、喘ぐように飛行している。大方の人達が初めての海外旅行とあって、座席のあちこちからさっきまで聞こえていた華やいだ声は、いつの間にか、嘘のように静まり返り、じっと声を殺し眼を閉じ、口を結び、両手はしっかりと椅子の肘掛けを握りしめていた。そんな姿は、まるで電気椅子に縛られた処刑を

待つ人達のように思えた。

彼は窓のシャッターを閉める前に額を窓ガラスにくっつけてチラッと外に眼をやった。その瞬間、彼の恐怖は頂点に昇りつめた。そしてスチュワーデスが窓を閉めさせた理由が、乗客のさらなる恐怖を誘発させないためであることを悟った。彼が窓外に見たものは超自然的ともいえる恐ろしい情景だった。雲海の一部から天上に向かって巨大な真黒な歪んだ柱が立っており、その頂上は無限の宇宙を源流にしているかのように思えた。

それは竜巻であった。映画やテレビなどで見る竜巻は地上で起こっている現象だったが、今彼が見ているのは雲海から立ち上がっている巨大な竜巻であった。何もかも初めて見る光景だった。機体が降下したり上昇したりしている原因は全てこの竜巻の影響だとわかった。もしこの竜巻に飛行機が巻き込まれたらひとたまりもない。そのまま大気圏の外側か、それとも四次元空間に放り出されて、世界の航空史の謎の失跡の主役になることは間違いがない。そんな暢気なことを言っている場合ではない。この竜巻を見たのは彼とその隣に座っていた友人の二人だけだった。他の乗客は誰一人としてこの悪魔の巨大な尾っぽを見ていなかった。

とはいうものの彼は飛行機を一切利用しないわけではなかった。日頃、時間に追われ

ているだけに国内旅行ぐらいはゆっくりと列車の旅を愉しみたいと思ったが、限られた日程を消化するためには空路を利用しなければならなかった。

飛行中の機体はほとんど静止しているかのような状態で出雲空港に無事着陸した。

この本の最初の計画では出雲は予定に入っていなかった。だいたい本書の執筆意図は滝に関するエッセイ集を上梓することから出発していたからだった。滝について語りながら次第に脱線していこう、というのが一応の予定調和みたいなものだったが、彼にとっては同行の編集者のハヤシを安心させる口実に過ぎなかった。やってみなきゃわかんないよ。

「どこか行きたい所はありますか」

いきなりハヤシに問われても何も浮かばない。

「どこでもいいですよ」

「じゃ隠岐へ行きませんか」

またセスナ機に乗るのか、ヤだなあ。セスナ機では何度も恐怖体験をしている彼だ。

最初の恐怖はベリーズであった。ベリーズはメキシコのユカタン半島の付け根の辺りにあるカリブ海に面した日本の四国ほどしかない小さい国だ。ここに行った時、海洋の珊瑚礁に囲まれた中央に不思議な巨大な円い底なしの穴があるというので、セスナ機を

チャーターして見に行くことになった。ところが搭乗したその機にはドアがない。ドアのないまま機は空中に舞い上がった。

「ミスター・パイロット、ドアがはずされたまま飛んじゃっていいの？」

「写真を撮るからドアをはずしてくれと言われたんだよ」

「誰もそんなこと頼まないよ」

「日本の領事官から頼まれた」

ひどいことを言うやつだ。その領事官は地上でわれわれの機に向かって手を振っている。

「ところでドアがなくても大丈夫なの？」

「オレも長い間パイロットをやっているけどドアなしで飛ぶのは初めてだよ。ヘリじゃないんだから。安全の保証はできないが、お客の要求とあらば飲むしかないからね」

チキショー、何てことしやがるんだ。落ちたら死ぬのはわれわれだぞ。眼下の海中にある巨大な黒い不気味な穴を見せるために機体を大きく回転させる度に、はずされたドアの真横に座っている、首からカメラをぶら下げた気の弱そうな男の上体が半分ドアの外に出てしまっている。その男は眼を閉じて必死に吊り革に両手でぶら下がっている。カメラは首にぶら下がったまま空中でぶらぶらしている。機内には突風が巻き起こり、

長髪の女性の顔に髪の毛が巻きついたままだ。

彼も傾く身体を必死に元に戻そうとしながらちぎれそうな吊り革にぶら下がったが、プチッと大きい音を立てて吊り革が機体からもぎ取られてしまった。なんてオンボロ飛行機だ。足元を見ると床の鉄板の間からチラチラ海面が見えるではないか。ふと日本を発つ前に見た、ユカタン半島でセスナ機が墜落してアメリカ人の観光客が五人死亡したというテレビのニュースが頭をよぎった。

結局、何とか無事に帰還したものの、彼はあまりの恐怖で写真を撮るのをすっかり忘れてしまっていた。また、はずされたドアの側に座っていた若者は飛行中二度ばかり失神したと、血の気の失せた蝋人形のような白い顔でポツリと言った。

もうセスナ機など二度と乗るまいと思った彼だったが、再び今度はブラジルのパンタナールで乗る羽目になってしまった。

暴風雨の中を飛ぶ

パンタナールは大湿原帯で日本列島がすっぽり入ってしまうほどの広大な面積を備えている。またここに行く道路はなきに等しい。最寄りの空港からチャーター・バスで行くことになった。一時間も走らないうちに湿原帯に入った。見渡す限りの湿原には何一

つ出っぱったものがない。どこまでもどこまでも続く湿原帯にあるのは地図の上に引いたような一本の直線の道だけだ。その道がまた恐竜の背みたいで、その上泥んこ道でしばしばバスは立ち往生。その都度全員バスを降りて、バスの後押しだ。泥の中で空転する車輪で、見る見るうちにみんな泥人形のようになってしまう。バスの中は靴に付着した泥で、内と外の区別がつかないほどだ。

しかも丸太を並べて組んだ橋が次から次へとあって、車輪の通る所だけに板を置いてソロリ、ソロリと注意深くバスが渡るのだが、そのスリリングさはまるで『恐怖の報酬』の映画の中で、トラックがニトログリセリンを積んでジリジリ走行するシーンを思い出す。一つ踏みはずせば、大蛇アナコンダや鰐(わに)やピラニアのいる川に転落してしまう。実際アナコンダや鰐や狼や、見たこともないような得体の知れない動物の群がバスの前に出没して、何度も立往生させられた。

見えるものといえばバスのライトに照らされた、どこまでも続く泥んこ道だけで、時々飛ぶホタルの光と天空に瞬く星の光以外は漆黒の闇だ。午後三時に空港を出発して、夕食抜きで現地に着いたのが午前三時を廻っていた。なんと真夜中の十二時間の大湿原帯踏破行だ。誰もが口を揃えて二度とこの道を帰りたくない、と言ったものだから、逆にもっと大きな危険を冒す羽目になってしまったのだ。

このパンタナールの地に二日滞在して、いよいよ帰る時が来た。地上の孤島パンタナールには電話がない。無線でセスナ機を三機、空港のある街から呼ぶことになった。だがセスナ機がやって来た時は、天空の底が抜けたのではないかと思われるほどの暴風雨になり、雷鳴が大気を震わせながら轟いていた。三機のセスナ機は低空飛行をしながら頭上で着陸地を捜している。飛行場などないので着陸可能な空地を物色しているのだ。陸地といったってほとんどが草ぼうぼうの湿地しかない。そこに水飛沫を上げながら着陸するのだから、命知らずのパイロット達というしかない。

いよいよ三組に分かれて乗り込まなければならない。彼はこんな危険な状況で飛行することに反対の立場を取ったが、誰も彼の主張に同意しなかった。彼が恐れているほど、他の人達は恐れていなかったのだろうか。それとも「怖い」という言葉を吐く勇気がなかったのだろうか。そのくせ「遺書を書かなければ」とか「生命保険を掛けなきゃ」とか、恐怖をまぎらすための悪いジョークを飛ばしているのが彼には不愉快に思えてならなかった。

さて、いよいよ一番機に搭乗しなければならなくなった。暴風雨は依然として衰える気配はない。手を伸ばせば届くほどの位置に黒い雲が降りてきている。まさかその雲を突き抜けて機を上昇させるわけにはいかないだろう。一番機のパイロットが搭乗するよ

うに促しているが、誰も行こうとしない。そこで彼と、彼の担当編集者と最年長のカメラマンが手を挙げた。もう一人乗ることになっているが希望者がない。

「ぼくと一緒に乗ると安全だよ」

彼の呼び掛けに若い新聞社の記者が走ってきた。彼がなぜ一番機に乗る気になったかというとパイロットがターザン役のジョニー・ワイズミュラーに似ていたので、このパイロットなら信頼が置けると判断したからだ。

湿地帯を水をはねながら雨の中、セスナ機の所まで駆けた。狭い機内はすでにトランクで埋まり、身を縮めるような格好で、座席に着いた。

水飛沫を上げながら滑走を試みるのだが、草が車輪にからむのか、なかなか宙に浮かない。やっと浮上したが、機のすぐ上には墨をたらしたような真黒な雲が覆い被さっているので、よぎなく低空飛行をするしかない。あとは無事に目的地に着陸することを祈るだけだ。快適な飛行なら、見渡す限りの湿原帯の風景に感動もできよう。だが今の心境は神にすがる思いだ。

笑わないでもらいたい。彼は必死にコンタクトしている天使と宇宙人に安全をサポートしてもらうよう真剣に呼び掛けた。彼が必要以上の恐怖を抱くと、想念のバリアを張ってしまって、宇宙存在からの波動エネルギーが届かなくなってしまう。彼は極力気持

を落ちつかせて、天使達がセスナ機の翼をバランスを取りながら操作しているイメージを頭に抱き続けた。またUFOはセスナ機の上空から、機がバランスを失わないようサポートしてくれているイメージを描いた。

老カメラマンは夢中で眼下の風景を撮りまくっているので、それほど恐怖感を抱いていないようだ。彼の担当編集者の女性は、彼と一緒だから絶対安全だと信じている。むしろ一番恐れているのは彼なんだ。彼には常に天界の存在が密着してサポートしているというのに、こんな時にはその存在への不信が起こっているようだ。

窓外を火の玉のような光が走ったかと思うと、眼下のジャングルに稲妻が起こった。と同時に水飛沫と煙が上がった。落雷だ。パイロットの横に座った新聞記者はドアの外にレインコートの端をはみ出したままだったので、無残にもズタズタに切りさかれてしまっていた。この新聞記者は、もしパイロットが飛行中に気絶でもしたら、代わって自分が操縦桿を握らなければならないかも知れないと思って、必死に操縦の仕方を横で観察していたという。とにかく状況が余りにも異常だったことは確かであった。

「オイ、下を見ろ」

と言ってパイロットが指をさした眼下にはこのセスナと同機種のものが二機湿地帯に頭から突っ込んで墜落していた。

「もっと近づいて見るかい」

と言いながら、さらに高度を下げる。こちらがいつ事故機になるかわからないのに暢気に他の事故見物などしている気持の余裕などない。それにしてもこの信じられないような悪天候の中、まるで旅客機のように全く揺れないまま見事な水平飛行を続けているのも不思議だ。セスナ機に乗る経験の多い老カメラマンも信じられないと言う。やはり天使とＵＦＯがガッチリと機をサポートしてくれていたのだろう。このことは後に事実であったことを天使達に聞かされた。

後から遅れて到着した他の二機は相当激しく揺れたらしい。着陸と同時に、開いたドアからころがり落ちるように出てきた男性はその場で横たわったままだ。また別の機に乗っていた女性の一人は恐怖のためにその日は終日一言も口がきけないほどのショックを受けていたのも事実だった。

偶然に導かれるように出雲へ

「またどうしてぼくを隠岐に連れていくんですか」

「地図を拡げた途端、隠岐に眼が移り、そこに『横尾山』という名の山があることを発見したんです」

シンクロニシティが日常茶飯事に起こっているというハヤシが得意になって話すのだった。

「しかも、この横尾山には二つ滝があって、それを発見したのは近くにある光山寺の住職で、ある日この僧侶の夢に神様が現れて、横尾山には二つの滝があると教えたそうなんです。不思議でしょう」

彼も夢の啓示で滝の絵を描くようになり、滝の絵葉書のコレクションを始め、そして現実の滝を訪ねるようになったのである。「夢と滝」は何かありそうだ。ハヤシの直観も冴えている。彼をその地に導くためにハヤシを通じて天界からメッセージが降りてきたのかも知れない。こういう発想は彼には当たり前に受け入れられる資質のようなものが子供の頃からあるので、それを立証してみたいというような興味は全くない。彼にとっては、面白いと思うかどうかという直観的判断が全てだからだ。

隠岐に関する彼の知識は皆無だが、せっかくそこに行くなら出雲に寄らない手はないだろうというのが彼の考えだった。かつて一度は出雲に行っているが、今またなぜか理由もなく惹(ひ)かれるのだった。子供の頃から親しんでいた神話の大国主之命(おおくにぬしのみこと)の物語が誕生した地であることも無関係ではなかろう。だけど、ここで再びニギハヤヒノミコトを引っぱり出してみると、ニギハヤヒノミコトがまだ幼名を歳(とし)、または大歳(おおとし)と呼ばれていた

頃、その父の名は素戔嗚尊（すさのおのみこと）であった。この説は紀記によるものではないが、それだけにある種のリアリティがある。いずれにしてもニギハヤヒが出雲の土地と無関係であるはずはない。まあこの辺の古代史ミステリィは別の機会に譲るとして、先に進もう。

出雲に行くことになる一ヶ月ほど前、彼は東京で開催された出雲神話フォーラムで、若い宗教学者のナカザワと公開対談した。神話という漠然としたイメージには興味があるがその知識となると彼はとっても自慢できるものは持ち合わせていない。数年前、パリ・ビエンナーレに招待出品された作品のテーマは古事記から発想したものだった。

ナカザワと出雲神話フォーラムで語り合った内容はおよそ神話と掛け離れた話題に終始してしまい、「神話」を期待して集まっていた聴衆は二人のいい加減さに完全に裏切られた格好になってしまったことだろう。対談が開始される直前に、ムカシ作られた東宝映画『日本誕生』の前半部分が上映され、雰囲気はいやが上にも充分盛り上がっていた。対談の相手役のナカザワは彼の親しい若い友人ということもあって、日頃の延長の雑談の感覚から入って、近況の情報交換から始まった。ナカザワは宗教学者だから神話はお手のものだ。だけど一向に神話が二人の話の中心に持ち上がってこない。それどころかこの話題からむしろ逃げているような空気がお互いの間に流れていた。

だいたいこの対談の相手に彼を選んだのはナカザワだった。

「神話について話すことは何もないよ」とナカザワにダメ押しをした彼に対してナカザワは別に神話でなくてもいいと言う。

だが、考えてみれば彼の作品は何がしかの神話的メッセージを持っているように思う。

先端科学が提示する宇宙観に対し、その反作用として顕現する古代人の宇宙観は近代の理性や合理主義の秩序などを破壊する生命エネルギーとして人類を宇宙意識に導く、根源的な想像力から出発しようとしているからだ。

神話とは「親和」のことではないのか。理科学による親和とは、物質の化合をいう。神話とはつまり「人話」であり、神と人の化合物なんだ。カオスとは神と人とを含む森羅万象の親和力で、森羅万象の悲を描くことが、神話を描くことであり、全ての化合を描くことにもなる。

彼が試みようとしていることは彼の内なる混沌とした部分に光を当てることである。それがつまり彼の神話創造なのである。

出雲神話フォーラムに参加した一ヶ月後に、まさか出雲に出掛けることになるとは思ってもいなかった。このシンクロニシティの不思議さにいつも彼は驚かされている。しかし、天界におけるシンクロニシティは、主にその人間の運命すなわち使命を示唆する時にのみ用いるのだ。従って現界でいっているシンクロニシティは天界から直接受けて

いる事はまれなのである。感度のいい人間が宇宙波を通じて、運命的不安を時に察知するぐらいで、天界波と宇宙波をちゃんと認識して、その区別をする必要があると思う。

シンクロニシティが神がかり的に説かれていることがよくあるが、現界で起こっているシンクロニシティは誰しも感知できる事象で、むしろ自然界は全てこの共時（シンクロニシティ）によって成り立っているというべきだ。天界は安易なシンクロニシティによって人間を諭すようなことは絶対にしないことを知るべきである。従って天界はシンクロニシティというより、その人間の運命すなわち使命を諭す場合のみに、その人間がより理解し易い形の奇跡を起こすのである。

彼は時々たった今起こっていることの真の意味や理由がわからないことがある。そんな時不安ではないかと訊かれることがあるが、彼はむしろこのような時こそ最もスリリングでエキサイティングな瞬間だと答える。どんな運命が彼を待ちかまえているかと思うと興奮の連続だ。

直観と衝動を唯一信頼できる友としていると、自分の行動の論理や観念がない。だからこそ自由だといえる。論理や観念に縛られていないために、彼の目的自体が遊戯化するようだ。

彼が出雲に来たのは偶然ではないだろう。そう思うと期待に胸がふくらむ。何かある

CamScannerでスキャン

に決まっている、という確信に導かれながら彼はその時々の心の赴くままに従えばいいわけだ。

出雲には出雲大社がある。ここの権宮司さんとはつい一ヶ月ほど前に、出雲神話フォーラムで会ったばかりだ。このことだって彼が出雲に来ることになった以上、単なる偶然とはいえなくなった。このような偶然に見せかけた必然性を否定する人は世の中に多いが、彼は宇宙こそ全て必然の連鎖によって生成されていると思っている。

ダイコク様が空中より出現

出雲大社といえばダイコク様の信仰で有名だ。ダイコク様といえばオオクニヌシノミコト。イナバの白兎の伝説を知らない人はいないだろう。ある意味で天照大神やスサノオノミコトよりもポピュラーかも知れない。黒澤明監督の『まあだだよ』の試写を見たばかりの彼は映画の中で内田百閒役の松村達雄が大声で歌っていた「ダイコクサマは誰だろう」、というフレーズが耳に残っていて、出雲の旅行中彼はしょっちゅう「ダイコクサマは誰だろう」、と口ずさんでいた。

実は彼はこの間からずーっとダイコク様に拘わっていたのだった。彼の知人にマサキ先生という人がいる。この先生は元大阪大学の化学専門の先生で、現在は岡山のインタ

ーフェロンの研究で有名な林原微生物研究所に常勤している科学者である。この先生を知ったのは社長の林原健氏からだった。マサキ先生は自ら超能力を研究するだけではなく、先生自身が超能力者である。先生の頭の中にメッセージを語りかけてきたり、発明の元になる設計図を脳内視させる宇宙存在と長年コンタクトを続けておられ、先生の発明品としては自動ドアやエレキギターなどがある。彼がこの文章を書いている机の上の電気スタンドも宇宙のメッセージによる先生の発明品で、三十ワットの電球で二百ワットの明るさがあり、同時に視力を正常化させる機能を持つという神秘的な代物だ。

そのマサキ先生には数え切れないほど不思議な現象が起こっているが、その中でも最も驚くのは突然眼の前に出現した木材が、見えない刃物によって見る見るうちに削り落とされてダイコク様の像を作ってしまったことだ。数日後には俵の上に胡座を組んで右手に打ち出の小槌を持った見事なダイコク様の彫像が完成した。その顔の表情がまたマサキ先生そっくりなんだ。

この話を彼はマサキ先生から何度も聞いたし、神サマが作ったというダイコク様の完成されるまでのプロセスを撮った写真も見せてもらってよく知っていたが、この話に興味を持った彼の友人にも話してもらおうと思って、ある時、京都でマサキ先生に会うことになった。何度聞いても頭がクラクラするような感覚に襲われ、今この瞬間にもテー

ブルの上にダイコク様が出現するような錯覚に襲われるのだった。

次の日、彼は用があって信楽に行くことになった。そして行きつけの寿司屋に二、三人の人達と行って、座敷に上がろうとした瞬間のことだった。

「ピカッ」

と小さい物体が彼の足元の宙空で光ったかと思うと、ポトッと音がして何やら金色に光った小さい金属のようなものが畳の上に転がった。この出来事を彼の側で見ていた店の女主人は思わず「キャッ」という小さい声をあげた。

畳の上の小さい金属は、神社で引くおみくじなどに入っているダイコク様だった。驚いたのは彼と女主人だけではない、目撃した他の人達も一様に驚き、お互いにこの奇蹟を信じ合った。

前日、マサキ先生からダイコク様が突然出現した話を聞いたばかりだっただけに、彼の驚きは格別だった。早速その夜、彼はマサキ先生にこの出来事を電話で報告した。

「ああ、よくあります。全然不思議でも何でもありません。あなたの波動が顕現させたんでしょう」

「何のために現れたんですかね」

「あなたの寿命が長くなった印のために現した、とたった今神サマが私におっしゃいま

した」
「………」
そういえばマサキ先生も六十四歳で寿命が終わるということをすでに知らされていたが、ある時神サマから「あなたは陰徳を積んだので寿命を延ばす」という通達があったそうだ。それには理由がある。神サマから送られてくる発明品のアイデアを製品化すれば、自動ドアやエレキギターやうそ発見機などの特許権は膨大な額になったはずだ。だけどマサキ先生はたった二、三秒で出来てきてしまう神サマの作られた発明品だからといって特許権を放棄された。社会や他人のためになることを個人的欲望を捨てて行った場合、それは陰徳になるそうだ。
本来の寿命はある程度決定しているらしい。だけど人間が私利私欲を捨てた時は、運命が転換して寿命も延びるというのだ。このような作用には如何なる宇宙のメカニズムが関係しているのか彼にはわからないが、とにかく「陰徳の効は大なり」であるということは信じているらしい。
マサキ先生のもとにはすでにダイコク様や他の仏像などが計四体も出現している。最初の出現にはマサキ先生も吃驚(びっくり)仰天だった。その時、神サマは次のように伝えられた。
「汝があまりにも人間性が低いがために神仏の世界のアソビを汝に示しただけ

CamScannerでスキャン

である」

それまでのマサキ先生は神仏などこの世に存在しないと豪語してはばからなかった。無理もない、阪大のコチコチの近代合理主義者の典型の科学者だったからだ。だけどこのことと「人間性が低い」ということは一致しないと思う。マサキ先生が神サマとコンタクトをするようになるにはそれだけの理由があった。発明品の特許権を放棄されたようにマサキ先生は以前から金銭欲や成功欲には全く無関心だった。物に対する拘わりがない子供のような性格である。そのことは長年交流のある彼が感じるところだ。

そんなマサキ先生でさえ、神仏の次元から見れば「人間性が低い」ということになる。ましてや一般の人間ということになると一体どれほど低いのだろう。自己の欲望が達成されないことを社会や他人のせいにして、常に自己正当化する輩。これが一般の人間像とはいわないまでもわれわれはこの現象世界を唯一現実と認識し、肉体感覚の知覚領域を物質的聖域としているために、神仏や天界のリアルな存在を理解できないでいるのではないだろうか。

消えたダイコク様

出雲大社で彼が求めようとしていた、ある物があった。それはダイコク様である。出

雲には大黒様の置物は土産物店に行けば各種取り揃えて販売されている。だけど彼が求めていたダイコク様は実は信楽の寿司屋で宙空から出現したあの金色の小さいダイコク様であった。
つい三ヶ月ほど前に、マサキ夫妻の結婚五十周年記念と喜寿のお祝いの会が京都のホテルであり、彼も招待されて出席した。マサキ先生を囲む二百人ばかりの人達が全国から集まった。国会議員をはじめ有名俳優、歌手などの顔も見えた。そんな華やかなお祝いの席で、彼は以前衆議院議員選挙に出馬して落選した浜田マキ子さんから声を掛けられた。
「横尾さんの所にダイコク様が出現したというのは本当の話ですか。マサキ先生から聞いたんです」
浜田さんはテレビや雑誌で何十回ともなく観ており、顔も名前もよく知っていた。
「そうですよ」
「一度ぜひそのダイコク様を見せて戴けないでしょうか」
「いいですよ」
彼女は彼の家の電話番号を教えてほしいと言う。そんなものを見てどうするんだろうと彼は思ったが、彼女は真剣にそれを見たがる。

「とにかく証拠が欲しいんです」

「証拠？」

「そうなんです。私は何か見えない力が私を動かしているということだけはよくわかるんです。だけど私にはまだ超自然的な現象が起こらないんです」

「でもその超自然的な現象をすでに感じてらっしゃるんだから、別に見なくってもいいじゃないですか」

「いいえ、私はそれが見たいんです」

と言って彼女は彼の両手を握った。

「私からは物凄く強いエネルギーが発散しているんです。あなたにあげます」

本当に驚くほど熱い手だ。こんなに強いエネルギーを出す人は治癒家でも滅多にない。彼女は思ったことは何でも口にするような人だ。何というか意志の強さが彼女の全身から発散されているのを彼は感じた。こういう人を味方にすると心強いが、敵に廻すと手強そうだとも彼は思った。芸術家の恋人になるとミューズ神の役割を果たすだろう。いわゆる巫女的な存在である。だけど、彼女は他人をサポートするようなタイプには見えない。自らが表舞台に立たなければ納まらないような人だ。

「こんなに強いエネルギーを発散している人は珍しいから、あなたの存在自体が超自然

的なんだから、証拠など欲しがらなくてもいいじゃないですか」
彼の言葉を受けて横からマサキ先生が言った。
「見たい見たいという欲望がある間は何も現れないですよ。見たいという欲望を捨てればすぐに現れます」
見たい人に、見たくないと思いなさいといってもなかなか難しい。以前、彼はある人から同じようなことを言われた。
「あなたは仏様を見たいと思ってらっしゃるんでしょう」
言葉通りの神秘体験を求めていたわけではないが、自己の内なる真我に出会いたいと思っていた。
「まあそうです」
「でも求めている間は駄目でしょうね。欲しいと思っている、その求めている手を離した時、自然に仏様は向こうからやってきます。そんなもんと違いますか」
この方は先般亡くなったが、元ジャーナリストで井上靖氏を世に送ったり、戦後初めて外国の交響楽団を日本に招聘して戦後の日本の文化に大きな貢献をした人である。彼はこの言葉をサモアから帰国する飛行機の中で聞かされた。当時の彼はどっぷり精神世界に浸かっており、正に精神世界のボヘミアンという感じであった。

ところがこんな話を彼は宗教家でもない人から聞かされたのがよほどショックだったのか、帰国と同時に精神世界に関する書物（蔵書のほとんどがこの類のものだった）を二階の奥の物入れに投げ込み、封印してしまった。

彼にとって、この行為は考えられないことだった。つまり、彼がこの時点で最も愛し、求めている対象と決別したからだ。はっきり言って彼から精神世界を捨てたら一体何が残るんだ、という「現実」を失ったのである。「キリストもブッダもマホメットも何も信じない」と歌ったジョン・レノンの心境だった。

大きい欠落感と同時に妙な解放感があった。背中に覆い被さっていた重い荷が降ろされ、不思議なことに「自由」を求めて精神世界に首を突っ込んでいた頃に比べると、今の方がもっと自由な感じがしていた。その時、初めて機内であの人から聞いた言葉の意味と実感を彼は抱いた。今彼が感受しているこの軽やかな感じがもしかしたら仏様かな、と思ったくらいである。

宗教の抱える危険性は人を時に盲目にしてしまうことだ。そして自己実現を求めながらその願望から限りなく遠ざかっていくことに気づかない。自由になりたい、解放されたい、悟りたい、すべて欲望である。欲望が別に悪いとは思わない。だが欲望によって執着が生じる。彼の精神世界も完全に執着だった。執着の状態はバリアを張ったと同様、

直観にしても霊感にしても最も受けにくい状態で、それらを拒否しているも同然だ。まして神仏とのコンタクトなど望みようもない。彼と、ある宇宙存在達とのコンタクトが開始されたのは精神世界の探究を放棄して十年ほど経ってからだった。

浜田マキ子さんが自宅にダイコク様を見るために来訪されるかもしれないと思い、彼はマサキさんや彼女に会ったその夜帰京して、早速ダイコク様の存在を確認しようとしたら、それがいつも置いてある場所から消えてしまっている。彼は様々なキッチュな宗教的なグッズ（?）をコレクションして、それらをまとめて一個所に並べており、特に空中から出現した金のダイコク様は彼の宝物として誰にも見せずに大事にしていたものだ。それが影も形もなく、あった場所から消えてしまっていたのだった。家人に訊いてもその存在すら知らないという。

このダイコク様は神サマからのプレゼントである。何ものにも代えられない、彼にとっては掛け替えのない守護神のようなものだった。それだけに彼の悲しみと落胆は想像を絶するものがあった。神サマが彼の元から去ったわけだが、その理由は彼にはわからなかった。何か彼が神の意に反したことを行ったのだろうか、とか何か悪いことの起こる前兆なのではないかと心配したりしたが、いずれにしても偶然ということは考えられない。

何か目に見えない次元での必然によるものに違いない。いつまでもこのことにくよくよしたり失望していても始まらない。失くなったものは仕方ない、と諦めることにした。

だけど本書の執筆のために出雲に来てみると、再びあのダイコク様に遭遇するかも知れないと思い、一番可能性のある出雲大社のおみくじに関心を持った。ところが大社のおみくじには七福神が入っているものはなかった。彼の手元にあったダイコク様は、よくおみくじの中に入っている一・五センチほどのもので、見たところ全く既製品と変わらないキッチュな金メッキをしたものだった。どこかの神社のおみくじの中からテレポーテーションをして飛んできたものかも知れない。

だがマサキ先生の所に顕現した木製のダイコク様の材質は科学的調査の結果、木材ではなく空気が圧縮されてできたもので、およそ地球の物質ではないという結論に達したそうだ。だから、もしかしたら彼の足元で顕現したダイコク様も地球上の物質ではないものでできていたということも考えられる。そんなことを想像しながらハヤシと彼は出雲大社を後に日御碕（ひのみさき）神社へ向かうためにタクシーを走らせていた。

天照大神と素戔嗚尊

午後、七類から超高速フェリーに乗って隠岐に向かうことになっているが、そのため

にはまだ少し時間が早い。どこか一個所に寄るくらいの時間がある。さあどこへ行きましょう、と旅行ガイドブックを開いて見ていると、日御碕神社という文字が彼の眼に飛び込んできた。何でも出雲大社より古いと書いてある。何の神サマが祀られているか知らないがとにかく行きましょうということになったのである。偶然はない、何かの必然によって行かされるのだろうという気がしていて、気のせいか彼の胸の鼓動は高鳴る。境内の入口でタクシーを降りると、ニャー、ニャー、ニャー、と猫の鳴く声がうるさい。神社の一角から海が見えて岩肌とその上空に無数のカモメがいる。

「カモメではなく海猫ですわ」

タクシーの運転手が言う。

「するとあの猫のような鳴き声は海猫？」

「そうです」

さすが出雲大社より古いだけあって日御碕神社は古色蒼然とした佇(たたず)まいだ。灰色の建造物だが柱だけが新しく朱色に塗装され、奇妙なコントラストを浮かび上がらせていた。無人のような社務所の窓ガラスの向こうに、天照大神(あまてらすおおみかみ)と素盞嗚尊(すさのおのみこと)と書かれたイラスト入りの掛軸があるのが彼の眼に飛びこんできた。その瞬間、彼はこの掛軸を長い間捜し求めていたことに気づいた。勿論、無意識にだ。「アマテラスオオミカミ」は子供の頃

からの崇拝の対象だった。母方の家宗が神道の黒住宗忠神を祖神とする黒住教の信者だったから、アマテラスは太陽大神と崇拝される黒住教の祭神でもあったわけだ。子供の頃彼は毎朝、神棚に向かって鎮座して禊祓詞（みそぎはらいのことば）を上げてから登校していたものだ。といっても真剣に拝んでいたわけではない。単に習慣化していただけだ。

だけど不思議なもので毎日拝んでいるうちに、いつの間にかアマテラスに親しみを抱くようになっていた。そのせいか日本の神話に興味を持つようになった。子供が抱く関心の範疇だからせいぜい国生みや、オオクニヌシや、海彦山彦、それに天の岩戸などの物語である。

アマテラスと並んで彼が一番最初に認識したヒーローはヤマトタケルノミコトだった。家には講談社がまだ大日本雄弁會講談社という長ったらしい社名の時代に子供向けに出版していた「講談社の絵本」シリーズの中の『日本武尊（ヤマトタケルノミコト）』があった。子供の彼にとってはこの本は一種の座右の書ともいうべきものでいつも眺めていたのを記憶する。彼のロマン派的性質に『日本武尊』が大きく貢献をしていることは否定できないような気がする。アマテラスを拝し、『日本武尊』を愛読していた彼はいつの間にか、手の届かない時空に想いを馳せながら、ここではない別の次元にリアリティを求めるようになっていた。

CamScannerでスキャン

彼にとってのリアリティとは物質的な次元の現実ではなく、魂の安堵する場所を指すのである。そしてその場所を夢想することによって、彼の創作が自由なものになっていくような気がしていた。彼にとって魂の安らぐ場所はこの現象界だけでは不充分だった。彼が天空を見上げて、ここではない次元に想いをワープさせる時、彼は自然に天界を夢見、そして神を思念している瞬間なのかも知れない。

天界への想いは知らず知らずに神にも通じて、直観という形を取って天界のイメージが装置化された彼の肉体を回路として、作品を地上に具現化させることを彼は実感している。天界を想う時、彼は少なくとも畏敬の念から謙虚にならざるを得ず、そんなわけでエゴのボルテージも低下していることがわかり、霊感の受信チャンネルも全開状態に近くなっているという実感に彼は時として天界を内なるものとして自覚することがある。

「どうぞ自由自在にぼくを天界の意志を伝える道具として使ってもらえれば光栄です」という気分になることが芸術家にとって最高だと彼は思っている。だから横尾忠則であって横尾忠則でないことが理想だと思っている。彼が彼自身に縛られ、囚われることがないということを知った時、彼は主題からも様式からも完全に解放され自由になるだろう。勿論、美術の制度などは視界の外である。

そしてそこで何よりも重要なことは「今」ということであろう。作品の主題も様式も

単に遊びに過ぎないということを知覚するはずだ。これらに観念を投影することは全くナンセンスだということがわかってくる。「今」が全てである。その「今」に入魂することが芸術だと彼は思い続けているのだ。

さて、ヤマトタケルノミコトがスサノオノミコトであることは梅原猛・市川猿之助のスーパー・カブキ『ヤマトタケル』などで知っている人は多いと思う。スサノオはイザナギの鼻から生まれたとされており、アマテラスは同じくイザナギの左目から生まれたとされている。イブはアダムの肋骨から生まれたとか、ブッダは母の脇腹から生まれたとか、神サマや聖人はどうもまともな場所から生まれていないようだ。

それにしても不思議なのはこの世に初めて出現した神サマ、イザナギ、イザナミは前者が男神、後者が女神であるというのに、どうして男神のイザナギからアマテラスやスサノオが生まれたのだろう。まあ比喩に違いないから真剣に考えてみてもわかるはずもあるまい。あるいは古代史研究家がすでに迷解答を出しているかも知れない。

いずれにしてもアマテラスとスサノオは同根であるから姉弟ということになる。またスサノオは高天原(たかまがはら)に上ってアマテラスと子供を作るというウケヒ神話もある。これじゃ近親相姦ではないか。モラルもリンリもあったもんじゃない。

天界にはモラルやリンリなどの自由を束縛するような制度などはなく、このような制

度は単に人間社会の秩序や調和を保つための人間のためだけの制度だと思う。だから神の世界の近親相姦はそこに人間界のような歪んだ愛情などないはずだ。第一天界の神霊達は肉体がない上に、天界の法則に適（かな）った生き方をしているので人間界のような欲望や執着など存在する必要がないのかも知れない。

アマテラスと同様、彼がスサノオに興味を抱くもうひとつの理由は、アマテラスとスサノオのウケヒによって生まれた天忍穂耳命（あめのおしほみみのみこと）の子供が実はニギハヤヒノミコトだということだ。だが、このことだって疑わしい。別の説ではニギハヤヒノミコトはスサノオとイナダヒメの間に生まれた子供であるというではないか。ああややこしい。

「天照大神・素盞鳴尊」の掛軸を買い求めた彼はなぜか幸せな気持だった。この歓びに似た感情は一体どこから来るものだろう。まるで掛軸の二神が歓んでいるのがそのまま彼の心に伝わってくるように思えて仕方がないのだ。

「日御碕神社に来た理由がわかりましたよ。この掛軸を買うためだったかも知れませんよ」

シンクロニシティを発見するのが上手なハヤシは当然この神社に来たことを単なる偶然とは思っていない人である。

「うん、ぼくもそんな気がする」

とりあえず神社にお参りしましょうと二人で神殿の前に立って二礼二拍手、口の中でモグモグ、一礼して、ふと横を見るとそこに七福神のおみくじ函があった。一瞬、彼は全身が総毛立つのを感じた。「もしかしたらこのおみくじの中にあの消滅してしまった金のダイコク様があるかも知れない」という直観が彼の内部から突き上げてくるのを感じた。

祈るような気持と同時に、無心になって彼はおみくじ函の小さい円い穴に手を突っ込んだ。最初に手に触れたおみくじには金の小さい寿老人が入っていた。この神は延命、長寿、無病息災を授けてくれる。

彼は以前ふとしたことから自らの短命を予感したことがあった。その時マサキ先生から偶然電話があって、いきなり先生の方から彼の生命が終わろうとしていたことを告げられた。彼のショックは口では言えるものではなかった。

「だけど安心しなさい。神サマに尋ねたら、『あなたは徳を積みました、だから寿命を延ばします』とたった今言われた」

とマサキ先生が電話の向こうから自分のことのように嬉しい声でおっしゃる。彼は思わず神に感謝したものだ。

こういう話をうさん臭いものとして理性の外側に排除してしまうことは簡単だ。だけ

と疑えばきりがない。たった一つのインチキで全てを断罪してしまうほど恐ろしいこともない。彼はマサキ先生が高級霊からサポートを受けておられることもよく知っており、それよりも彼は神を信じているので何の疑いも抱かなかった。

マサキ先生と話した数日後、彼は徳島へ行き、四国八十八ヶ所の札所の一つである寺へ行くことになった。そしてそこで引いたおみくじが寿老人だったのである。そのおみくじによって再び延命を約束されたのだった。天界は時にはこのように物質的なものを現出することによって証明させることがあるのだ。

おみくじは一回引けばいいものだが、彼は再び函の中に手を突っ込んだ。次に現れたのは毘沙門天(びしゃもんてん)だった。この神は勇気授福、護国を授ける。勇気は芸術家にとって最も重要である。勇気があって長寿であることは最高だ。この二つのおみくじは今の彼にとって必要不可欠だ。あとは大黒天がでれば申し分ない。

三度目に引いたおみくじが大黒天であった。そしておみくじの中からあの金のダイコク様が出てきたのである。彼は小躍りして喜んだ。この神は福を授けてくれる。空中から出現して、そして消滅してしまったあの同じダイコク様ではないが、彼はついにダイコク様が再び自分の所に帰ってきた、そんな想いで胸がいっぱいだった。

日御碕神社はスサノオノミコト日本総本宮である。スサノオが彼にダイコク様を授け

てくれたのである。このことだけで、彼はこの旅行の目的の大半が果たされたように思えた。予定に入っていなかった日御碕神社にもし来なかったら、掛軸も金のダイコク様も手に入らなかった。そんなことを考えると人生がとてもスリリングなゲームに似ているような気がして「まんざらでもないぞ」と彼は自分自身の人生をじっくり味わっているように見えた。

帰京してからのことであるが、彼はふと今住んでいる土地の氏神様に参りに行く気になった。成城に住むようになって二十三年にもなるが、まだ氏神様に参ったことがない。一体どこにあるのかさえ知らない。そこで国学院大学を出た知人に神社本庁で調べてもらった。そしたら成城の隣町の喜多見にある氷川神社がそうだという。そこで早速参ることになった。

その神社の祭神が何とスサノオではないか。また成城に移る前に住んでいた祖師谷の家の前の神社の祭神がアマテラスであることも同時に知らされたのである。そこで彼はこの二社を地図の上で結んでみることにした。すると、何と現在住んでいる彼の家が、二社を結ぶ線上の丁度ど真ん中に位置するではないか。こんな出来過ぎた話があっていいのだろうか。とにかく彼はこの奇蹟的な一致に欣喜雀躍してしまった。

CamScannerでスキャン

ところで彼は現在この原稿を日光金谷ホテルで書いている。高輪プリンスホテルで書き始め、河口湖のNHK出版資料センターに移り、今また日光で、という具合に転々と場所を変えながら書いている。しかも必ずしも順序通りに書いているわけではない。映画を撮る場合、必ずしも頭から順番に撮らない監督みたいに。絵でいえば、色んな場所から描いていくように。この原稿に関していえば、あちこちに塗り残しを沢山作っている絵みたいに、それを埋めていく作業に近い方法で書いている。

今日の午後金谷ホテルに入り、早速原稿用紙に向かったものの、何しろこの前に書いた時から時間があまりにも空いてしまったものだから、続きが書けなくなってしまった。そこで読み返してみると、第一話の途中で文章が切断されたままになっていたり、第二話の半ばでも放置されたままの個所が出てきたりした。そこで彼が書き始めたのが第二話の日御碕神社で「天照大神・素盞嗚尊」の掛軸を社務所で発見した、という個所からだった。

そして、ここまで書いたところで盛岡在住の高橋克彦さんに電話がしたくなって掛けてみた。日光まで来たら何やら盛岡に近づいたような気がしたからだ。一時間ほどの長電話の中味は日本の古代史についてだった。高橋さんはその点では専門家でもある。今日彼が書いたような内容は高橋さんからすれば、ど素人の寝言のようなものだというこ

とをつくづくさとらされ、反省させられた。実際の古代史の研究はかなり進んでおり、古事記や日本書紀に書かれているものを鵜呑み（うの）にしているのは初歩の初歩で、事実は裏面史に隠されているというのだ。

中でも高橋さんが長年最も関心を抱いて研究の対象にしているのは何とニギハヤヒノミコトであるということを知って彼は驚いた。ニギハヤヒほど古代史の中でも重要な人物は存在しないというのだ。身近にニギハヤヒの研究者がいることを彼は初めて知り、何か不思議な縁を感じないではいられなかった。なぜ高橋さんがニギハヤヒに惹かれるのか。うっかりして訊くのを忘れたので明日にでももう一度訊くことにしよう。

そして次の日、高橋さんからその理由を訊くことができた。

「ニギハヤヒのことに気がついたのは、東北のストーンサークルの謎を追いかけていた七、八年前ですね。日本の巨石信仰の流れに興味を持ってね。そしたら御神体が巨大な石だという奈良の石上（いそのかみ）神社に行きたくなったんです。そしたらそこが物部一族の本山だったんですが、物部一族が蘇我氏と戦って敗北して、それで東北に逃れて来たんですが、ぼくは単純に巨石を日本に持ち込んだのが物部氏ではないかと思ったんです。そんなわけで物部氏こそ日本の巨石文明の創始者だと考えました。その物部氏の信仰の対象がニギハヤヒだったんです。物部氏の伝承の中に不思議なことがあって、十種（とくさ）の神宝（かんだから）

が残っており、死人を生き返らせるとか、姿を隠してしまう布だとか、そういう不思議なものをニギハヤヒから授かったということからニギハヤヒに非常に興味を持つようになったんですがね」

高橋さんはここまで一気に話した。

UFOと皆生温泉

出航時間より早く着いたので彼はハヤシが乗船券を買っている間、売店の辺りをいつもの癖で動物園の檻の中の熊のように行ったり来たりしながら買う気もないのにお土産物などを物色していた。彼のこのような癖は子供の頃からちっとも変わっていない。学校から帰宅すると座敷に鞄を投げ捨てるようにして、父に十円ばかりの小遣いをねだり、それを握り締めて近所の駄菓子屋に夢中で走って飛んで行くのが毎日の習慣になっていた。

ムラカミさんは小さい駄菓子屋を営んでいて彼より二、三歳下の姉弟がいた。ムラカミさんのお店には野球選手のプロマイドや映画スターのプロマイドのくじがあった。彼の目当てはこれとパッチンだった。パッチンとはメンコのことである。ビーダマは単にタマと呼んでいた。

店の奥からはいつも食欲をそそる肉天焼のソースの焦げたいい香りが店先まで匂ってきた。お好み焼のことを彼の郷里では肉天焼と呼んでいた。肉天焼とは名ばかりで肉などどこを捜しても発見できなかった。赤い小海老とかつおぶしに青海苔の直径十五センチ位の薄っぺらいおこのみ焼で、新聞紙にくるんで手渡されたものだ。時には新聞紙とメリケン粉が一つになって、印刷インキの臭いまでが肉天焼の味の一部になっていたものだ。

「ターちゃん今日は何してエ？」

ムラカミさんの奥さんはいつも少し淋しげな表情をしていたが、色白美人で、どうしてこんな綺麗な人が田舎町に嫁いで来たのだろうといつも子供心にうっとりと見つめていたものだ。

「今日は暑いさかいにイチゴ氷や」

かき氷を買う時は、彼はいつも家で食べたいためにガラスの器を持って買いに行ったものだ。

「今日は何を買おうかなあ」

と彼はムラカミさんの店に行って考えるのが愉しみだった。間口が二間ほどの小さい店だったが、駄菓子屋の店頭の、原色の絵具がばらまかれたような色彩の洪水が彼の感

情を妖しく掻き立てるのだった。天国と地獄がごちゃごちゃにブレンドされたような小宇宙がそこには展開していて、幼い官能を刺激するのだった。

「そろそろ出航時間ですね」

ハヤシの声で彼は思わず遠い記憶のパースペクティブの淵から突然呼び還されたような気分になり、われに還った。

そこへ第三者が近づいて彼に声を掛けた。彼はまだ完全に幻想から全身脱け出していなかったので、恐ろしくとまどっているように見えた。

「ヨコオさんですね。サインをお願いできますか」

どう見てもサインを求めるようなタイプの人間には見えない。年齢は彼より十歳は若いだろうけど、一見して管理職タイプの実直そうな男性である。礼儀正しくその男性は彼に名刺を差し出した。

〈皆生温泉旅館組合　事務局長　日浦啓次〉

「えっ、皆生温泉の方ですか。ぼくはムカシ皆生温泉でＵＦＯを見たことがあるんです。海岸に面したホテルで夜中に部屋のベランダのボンボンベッドに寝そべって、今日こそは何とかしてＵＦＯを見てやろうと思いましてね。それにしても温泉街がざわざわして煩くてね。三味線や太鼓、それから男女の嬌声が耳元まで届きましてほんまに何時に

なったら静かになるんやろと思ってたら、十二時過ぎに突然街が死んだように静まりかえったんですね。よーしこれならいけると思いましてね。何しろＵＦＯにテレパシーを送るためにはやはり集中せんとあかんでしょう。おたくは信じられんみたいな顔したはりますけど、そりゃぼくも最初はこんなアホなことしてと思っとりましたが、ある日北海道の小樽に住んでいたというクリーニング屋のあんちゃんが、両親を失くして、何で失くしたかは訊くのをうっかりして忘れてしまいましたが、とにかくこのあんちゃんは妹と二人暮らしで、淋しい生活を送っていたそうなんですけど、この辺で一つ自分の人生に何かモニュメントになる確かな経験をしたいと思ったらしいんですね。そこで、ふと以前新聞で読んだある記事のことを思い出したらしいんですね。その記事というのは海底の原子力潜水艦ノーチラス号と地上のアメリカ海軍がテレパシーの実験に成功したというものだったらしいんです。それを知った小樽のあんちゃんは早速毎晩八時に団地の庭に出て、月を目標に一時間テレパシーを送ったんです。

『こちら地球の〇〇、宇宙と地球のために何か役立つことを自分にさせて下さい』

とそのあんちゃんは心の中で思念したんです。雨の日も月のない夜も一日も欠かさずに一ヶ月そうしたというんです。まあ凄い忍耐というべきか。そしたら一ヶ月が近づいた頃、山の上空で奇妙な運動をする二つの星のような光点を見つけたそうなんです。そ

してその日はそれで終わってしまったそうなんですが、翌日にもその星のような小さい光点がだんだん近づいて来たというんです。そしてとうとうそのあんちゃんが立っている場所からほんの二、三メートルの所までやって来たというじゃありませんか。目の前にしたUFOはタンクローリーほどの大きさで窓もなく、ただつるんとしたクリスタルのような感じで、あんちゃんはまるで死んだ父親に会ったような懐かしい感情に胸がいっぱいになったというんです。UFOは目の前をゆっくり通り過ぎながら、近くにあった樹の小枝に触れ、来た時よりもスピードを上げてあっという間に上空の暗闇に消えてしまったというんです。その話にぼくはえらい興奮と感動を覚えましてね。そんならぼくもやってみようと思って始めたんですが、一ヶ月も続きませんでしたわ。曇の日や雨の日はUFOが来るはずないと思いましてサボったりね。だけどその頃、全国を二年間かけて旅行する仕事がありましたんで、旅先では一生懸命UFOを思念してテレパシーを送ってみたんです。だけど第一テレパシー能力なんか自分にはあらへんと思っていましたからもう一つ真剣になれませんでした。といって一年以上も続けてきましたので今さら止めるわけにもいかないので、ここまで来たら鳴くまで待とう時鳥（ほととぎす）の家康の心境で、今夜こそは徹夜しても絶対呼ぶんだと頑張って、毛布を持ち出してボンボンベッドに寝そべって夜空を仰いでいましたんや。それが皆生温泉のホテルだったんです。

この夜は月がなかったので海と空の区別がつかないほど真っ暗闇だったんです。その代わり夜空は満天の星でした。東京に住んでいるとこんな光景を眼にするのは久し振りでした。もうそれだけで胸の動悸が押さえられないほどぼくは興奮して、今夜こそはというような確信が身体の中から突き上げてくるのがわかりました。温泉街の灯も消え、ぼくの意識はほんまに星空に吸収されてしまいそうで、もうこれだけで充分至福感が味わえました。最初のうちは時々飛行機が飛んできました。光が点滅しているのと、しばらくすると爆音が後から光を追っかけるようについていくのでUFOと見間違えるというようなことはありませんでした。さあ何時間位ぼくは夜空を眺めていたでしょう。もう四時間位夜空を仰いだままです。その間、夜空には何の兆候もありません。と突然海の方から小さい光体がゆっくり、しかも滑るように音もなくやって来ました。かなりの高度だったと思います。ぼくは思わずボンボンベッドから上体を起こしその光体に眼を皿のようにして、爆音が聴こえないかと耳をそばだてました。その時です。その光体は物凄いスピードで斜めに落下してきたんです。スピードが早いのですが、かなりの高度から落下してくるもんですから、アッという間なんでしょうけどぼくには長く感じました。海上にでも落下するのかと思うと突然今度は同じスピードで上昇していったんです。丁度Vの字を描くようにです。水平飛行が四秒位、落下と上昇が一秒位です。いや一秒も

なかったかと思います。そして上昇した地点でその光体は停止してしまったんです。停止した光体は星との区別が全くつかないほどでした。星に偽装したといってもおかしくないくらいです。その時ぼくは変な錯覚に陥りました。実は頭上の星全部がＵＦＯではないかと思ったのです。このことがあって以来ぼくはＵＦＯを呼ぶコツをマスターしました。別に特別の技術があるわけではありません。ただ彼等に対する想いが恋愛感情と同質のものになればＵＦＯはいつでも姿を現してくれるように思えたんです。ＵＦＯを見るまでぼくは一年半近くかかりましたが、その間知らず知らず彼等に恋をしてしまっていたんでしょうね。そんなぼくの恋にＵＦＯも同じ恋でもって応えてくれたんだと思っています」

ヒウラという人の手帖にサインをしながら、彼はたった今回想した二十年ほど前のＵＦＯ目撃のことを思わずこの人に話したい衝動にかられたが、すでに乗船時間が迫っていたのでハヤシと足早に桟橋に向かった。

恐怖の根源は死

高速艇レインボーが横づけになっている岸壁には大勢の人が群がっていた、地元の女学生達のブラスバンドがブンジャカ、ブンジャカとセレモニー演奏をしている最中だ。

まるで寅さん映画のロケーション現場に迷い込んだような錯覚がする。何でも今日が隠岐とこの七類港を結ぶ初めての高速艇レインボーが就航する日だそうだ。そしてその一番船に彼とハヤシが乗り合わせることになったのである。そんな記念の初船出に乗り合わせるというのも何か事始めを暗示しており、縁起をかつぎたがる二人を歓ばせた。

初航行とあって船内は立席まで出るという大賑わいだ。二階席に座ったせいか、思ったより震動が激しい。船内テレビでは春の選抜高校野球をやっている。高校野球に無関心な彼は実況アナウンサーの声が煩いのか眼を閉じて眠ったふりをしている。彼の隣に座っているハヤシも同じだ。時々船が大きく揺れるので彼は内心怖がっているようだ。彼の大きいテーマとして恐怖を克服する問題に目下ぶつかっている。彼が日常生活あるいは創作活動においてもう一つ勇気ある行動がとれないのは、彼の根源的なところと結びついている恐怖に大きい原因があるようだ。当然そのことに気づいている彼は機会あるごとに勇気を試すようなことをして、彼の内部から恐怖を何とか追放させようと努力しているのである。

ところで彼の恐怖心は一体何に起因しているのだろう。

彼の父親は夢遊病者であった。父は夜中に何度も飛び起きて眼に見えない闇の存在に向かって語り合ったり、時には姿のない対象に向かって暴力を振るうこともしばしばだ

った。彼の母はそんな父の暴力のとばっちりから彼を守るために、幼い彼をかばいながら家の中を逃げ廻ることもあった。父の夢遊病症には寝言が伴っていたが、その寝言の内容は父の若かった頃の記憶であったり、未解決のまま引きずり続けている問題に対する執着心から発動する狂気のようにも考えられた。

昼間の父は百鬼夜行が横行するような世界からやってきたような夢遊病者で普段は全く子ぼんのうで善良を絵に描いたような父親であり夫であった。また、そんな父の二重人格的な性質によって幼い彼の魂を恐怖の深淵に突き落とすのだった。

「そこに立ってるのは誰や、名を名乗れ」

彼にも母にも見えない暗い闇の空間に向かって、父はまるで武将のような態度で超自然的な存在と対峙（たいじ）している。彼の超自然的世界への志向や彼の生来植えつけられた霊媒体質と、このような父の狂気的世界とは何らかの因果関係によって解析することが可能なのだろうか。

彼のこのような幼い頃の体験が彼の精神形成に特別の影響を与えていないとは考えられないはずだ。彼の父に対する感情は、愛と恐怖が裏腹となって彼の内部に深く巣くっていることは間違いないように思う。だけど彼の創造の核を成すのもこの矛盾に負うところもあり、それがまた彼の作品をマジカルなものにしている要因でもあろう。芸術を

その根底から魅惑的なものとしているのは魔の力であるということを彼ほどその体験を通して熟知している者もいないはずだ。しかしこの魔は近代合理主義が排除し、理性と相反するものであり、現代の芸術が目指そうとする方向に逆流させられているという不幸も半ば彼自らの運命として認識しており、それ故に彼はこの魔こそ人間と宇宙を有機的に関係づけることを本能的に知覚しているのだ。

彼の恐怖の本源は死である。死はまた魔を包含する。魔はまた狂気を内包し、狂気はさらに宇宙愛とも呼応する。従って彼の中では死は恐怖であると同時に救済でもある。つまり彼は死から逃れたいと同時に死を憧憬の対象としているのだ。そういう意味では彼はロマン主義者といえるだろう。

「脳の中にも空虚な場所がある。つまり眼球にも何も見えない箇所があるのと同じく、いかなる物体も自らの影を宿さないような場所が存在するのである。もし人がこの場所に特別な注意を払いそこに神経を集中させてしまうならば、彼は精神に病をきたし〝別世界のものごと〟を思い描くようになる。そしてこの〝別世界のものごと〟とは、どのつまり純粋な無であり、形もなければ限界もなく夜の虚ろな空間のように恐怖を与えるものなのだ。そしてこれらのものごとを考え続けている人にはそれは幽霊よりも残酷につきまとうものなのである」（ゲーテ）

ゲーテは主観的なものや病的なものをロマン派と呼んで、それは精神にとって危険なものとして狂気のメカニズムに通底するものとして警告しているのがわかる。

彼の恐怖こそ別世界の純粋な無形で無限の非実体の時空の彼方からやって来るものだとすれば充分頷けるような気がする。闇の裂け目から訪れる荒れ狂った夜の海の海馬に跨がった狂気に蒼ざめた父の姿こそ、彼にとっては恐怖以外の何物でもなかっただろう。

しかし彼の抱く恐怖感が必ずしも幼時体験にのみ起因しているとも彼は考えていないようだが、異界への異常な関心と興奮、そして憧憬には父の夢遊病が何らかの形で関与しているのではないかと推測しているようだ。

さらに彼が死を恐れるようになったもう一つの理由がある。それは超自然的なものではなくもっと俗世的なものにその基盤があった。彼がほとんど絶望視していた夢と希望が、ある時急に開花する予感を彼が摑んだ時からだった。何をやっても上手くいかなかった時期の後に、何の前ぶれもなく突然訪れた確信に満ちた天啓のような想像力とでもいえばいいのだろうか、いわゆる拡散された分子が一つに統合して物体を形成するように、彼の分散した意識が何かの力の作用によって一つに統合し、そこにそれまで他者との区別さえ曖昧だった「私」に明確な自我を認識したような瞬間があったが、その時彼はまた同時に死の観念に恐れを抱き始めたというようなことを、日常的な表現でどこか

で語っていたように思う。

死の恐怖の克服は人間が肉体を生の唯一の根拠と考えている以上不可能であるということぐらい自明であるにもかかわらず、霊の存在こそ自己であるという認識が欠如しているとすればおかしいと言わざるを得ない。彼はそういう意味では人間の本質が霊であるという事実を彼を媒介とした様々な霊的な実証によって日常生活の中で体験させられているはずだ。霊が人間の本質だとすれば、どうして肉体の消滅がそんなに恐怖に繋がるというのだろう。

肉体が存在する領域は三次元的物質世界にのみ限定されている。彼はそんな物質世界を肉体感覚で知覚認識しながら自己形成を計ってきた。それ故に、理性の支配によって価値基準が定められ、言語や論理の外側に存在する、知性と見なさず非合理なものとしてこの世界から排除されたものも幸いにも垣間見ることの恩恵を受けてきたはずだ。

「人間の内には、彼よりも強力な、彼を導く力を持った何物かが存在するのだ」(トルストイ)

何物かが存在する以上、人間は何も恐れることがないのにどうして恐れるのだろう。

突然、船の舳先が上がったかと思うと、ドーンという何かにぶつかったような大きい音が床下でして、左右の窓に煙のような飛沫がぶつかって、窓際に座っていた人達は思

わず身を逸らした。こんな瞬間にも恐怖が彼を襲うのだった。恐怖を突き詰めていくと結局は死の観念に到る。

恐れたのは彼の表層意識で、彼の内なる力の存在である何かではなかった。何かは決して恐れないのである。何かとは霊であり魂であろう。魂はいついかなる時でも最強の力を発し、彼の助けや求めを手ぐすね引いて待ち構えているのである。

「世にあって最も力強いのは、目に見えず耳に聞こえず、感じることもできぬものである」（老子）

表層意識の呼び掛ける声が魂に聴こえる時、魂は全力で彼を守護したいはずだ。だけど大方はその声は内へ向けて発せられるのではなくて外に向けられてしまう。表層意識が魂を友とし、味方とする時、彼からは恐怖は完全に消えてしまうはずだ。内なる声である魂は常に表層意識に声なき声で語り続けているのである。彼はしばしばその魂の声を耳にして、それに従ってきた。

だが今ひとつ彼の恐怖心が魂の声を遮断している。それは彼の肉体に対する執着だ。つまり肉体感覚が全ての感覚器官でないことを承知しながらも、五感への執着が手離せないでいるのだ。五感に対する執着は全ての物質をもその虜にしかねない。別の言い方をすれば彼はまだ十全に自己を愛し切っていないのである。もし彼が自己を一〇〇パー

セント愛することができれば、彼は恐怖をも愛することができるはずだ。別に恐怖を愛さないまでも恐怖をそれ自体現実として認識することができ、そこに何らかの感情をも付加することがないはずだ。彼が彼の猫を愛するように自分の肉体を愛し、肉体を酷使しないならば、同様に彼は彼の意識(マインド)を、そして彼の霊であり魂を愛することになろう。その時彼は恐怖を超克し、信じられないほどの勇気を発揮するに違いない。

隠岐の霊能者

そんなことを彼が考えているうちに高速艇は西郷港の桟橋に接岸した。

さすがにここでは鳴物はなかったが、初の超高速艇が入港したものだから乗客を出迎える人達以外にも物見客がわんさと桟橋に群がって、本土との距離が縮まったことを歓んでいるように見えた。すでに町役場には二人が一番船で到着することが連絡されていたにもかかわらず、それらしい人影は見当たらなかった。

乗客が全員下船して二人だけが桟橋にとり残された時、代わりの者だという人がやって来て、その人の車でこの島の最も高級だといわれるホテルに連れて行かれた。すでに陽は西に傾きかけていた。通された部屋の窓からは入江が眺められ、小さなフェリーや漁船が忙しく往来している。彼はそんな光景をまるで初めて見るかのように、海面が夕

日で黄金色に染まるまで長時間眺めていた。星が空に瞬くまでそんなに時間がかからなかったが、中国大陸から吹きつけてくる黄砂のせいか水中で光る電球のように滲んで見えた。

「ぼくは一体何のために隠岐にやって来たんだろう」

来た以上はそれなりの意味や理由があるに違いないと、日頃から偶然はないんだ、全て必然のなせるわざだという考えを抱いている彼は内心この地が自分を如何なる方法で歓迎してくれるのだろうかと期待しているのだった。

隠岐に来る前にハヤシはすでに地元の町村役場とコンタクトを取っていたが、もし何か希望があれば言って欲しいと彼に伝えてあった。彼は隠岐に関する知識が全然なかったので、全てハヤシに一任したが、ただ一つもし霊能者のような人が隠岐にいるようなら、会ってみたいと伝えた。

航海の技術が未発達だった昔は、隠岐は絶海の離れ小島として政治犯などの流刑地だったそうだ。柿本人麻呂の子、柿本躬都良麻呂、小野篁、飛鳥井少将雅賢、後鳥羽上皇、最も有名な流人は後醍醐天皇だろう。隠岐が孤島にもかかわらず豊かな文化と尊皇の気質を持っているのはこのような文化人や二人の天皇の歴史に負うとこ

だからというわけではないが、このような歴史的背景を持つ島には、人々の運命を示唆したり導くサポーターとしてのシャーマンがいるのではないかと彼は想像したのである。

「そういえばうちの役場の職員の母親が何かそんなことをしていると聞いたことがありましたので、いっぺん当たってみますわ」

西郷町役場のオムロ氏から彼女との面談の許可があったのは夕食の前だった。

「ところがそのお婆さんは人に会うんやったら朝六時に水を浴びて身体を清めてから神様にお伺いをたてられるそうですので、朝の八時に家に来て欲しいそうです」

人のいい、如何にも実直で素朴な感じの都万村役場サイトウ課長がそう二人に伝えた。

どのような神託が彼に伝えられるのだろうかと思うと、それだけで彼は胸騒ぎがして翌朝になるのが心待ちであった。

「ハヤシさんも見てもらったらどうですか」

「何を言われるかと思うとわたしは怖いので止めときます」

そりゃそうだ。知りたくもないことを知らされることだってあり得るかも知れない。脛に傷のない者はない。何らかの罪に人は恐れているものだ。でなくても生きることがすでにカルマを増やしているのである。期待と不安が半々だ。恐怖への挑戦だと彼は腹

をくぐって次の朝、彼女の家を訪ねることにした。
そこは小高い丘の上にあった。妙な緊張感が彼の身体に宿っている。家の中から声がして案内役の役場の職員二人と彼とハヤシはおずおずと座敷に上がった。祭壇のある奥の間から顔を覗かせたのは七十代の老婆だった。手前の部屋に座っているにもかかわらず彼はその煙で噎せて二つ、三つ咳き込んだ。よくもこんな濃い煙の中にいて平気だと彼は思った。
彼らが着くなり、老婆はとんでもなく大きい威厳に満ちた声で何やら呪文のようなものを唱え始めた。
「来たぞや、来たぞや、来たぞやのう。来たかや、来たかや、来たかやのう。よくぞや来たかや、来たかやのう。そちの、そちの、そちの勤めをば、待ちるぞや、待ちるぞや、待ちるぞや。あー、きれいな出雲のような勤めをしてから帰るがよい、そりゃ、帰れよ、帰れよ、帰れよのう。そちを待ちたぞ、待ちたぞやのう。皆ものが待ちておるぞや、待ちおるぞやのう」
呪文が終わると老婆はこちらを振り返り、質問もしないのに長いこと喋り続けた。
「私は、夕べの十二時から今朝まで水一滴さえ飲みゃしません。今朝までといったって、お勤めがすんでからでなかったら、お水も何もいただきませんけん、今朝はお水をかぶ

って、それでご飯なんか食べしません。

それというのも親類の子が腎臓を病んでね。病院も見放して、薬もくれへん。なら、ここのお婆ちゃんが拝んで治してくれるけ、来てみるかないうて。来てみたら、あの子は腹膜になっておったけど、きれいに治ってしまってね。全然治療せずに治ったですだら。そしたら今度、父ちゃんもしょっ中病むというのでここへ来て拝んでもらったら治ってしまってね。それがもとで私も信心するようになっただが。そしたら、今度ここのお婆さんが死なれてしまったですだで、さあ、誰がお婆さんの跡継ぎするかな思いながら、みんなで拝んでおった。そうやっちょったら、突然私がクルッと後ろへ向くことになった。そして、みんなに向かって数珠を振るような格好になって。それからだ。それがもとだけん。それでも、信心するようになってから四十年もなるでしょう。

壇鏡さんなんかに行ってもね、滝に打たれたり、また大歳にはね、家からここまで裸足で雪の中を除夜の鐘聞きながら来よったです。

今はごらんしょでな歳もいったけど、誰かががんになったら毎日朝晩バケツで水をかぶりおったですたいけどね。

それでいよいよ重い病人のときには、これは医者へもっていく話だ、スガノの嫁さんが手を放されてよそへ行った、それが助かって、親子助かって帰ってきた時ね。

そげんな時にはね、ここへいっぱい蠟燭立てて行するでしょう。これは蠟燭のせが絶えた跡です。これが一月の八日立てた蠟燭の跡がやっとこれで直ってきたとこですたいど。

それで、ある宗教法人の人が、前に知っちょる人がおってね。だから、わしゃ心やすいていうで来て、会に入らんかいとござったです。『あ、そうですか。それなら、私は未熟ながらもこうこういうような行をしておる。火の行もしますけれど』と言ったです。それまではなんやらかんやら言ってござった。お婆ちゃん、あんたは火の行しちゃったのかと、そりゃあ火の行しますけど、困った人を助けにゃならんけね、と言ってね、その話をしたですだ。それでこの手も見せたですだら、そうしたら、その人がおびえてしまってね、なんと火の行をやっておる者はちょっとおらん。おらんのに、ようそうやってさっしゃるって、それからなんだ言わずに、しばらく話して、それから帰らしたですわな。よっぽどの人でなかったら火の行はできんて言って帰られたです。

私は何らわからせんですだいど、ただもうここへ来て拝ましてもらって、一生懸命で、もうたとえ一人でも助かる者なら助けてもらいたいという一心でここへ来るだけでね、何にも私はわからんのです。わからんですだいども、鬼子母神さんを拝んで、鬼子母神さんから伝えが私にやって来るだけのことはせにゃ。それだけ、自分でどうこうこれだ

けという気持はないけど、『ありがたい、ありがたい』という気持だけで拝んで、それで当たり前にこの鉦を叩いたりあれしたりして、ちゃんと当たり前の勤めをしてなにするけど、またいろいろと向こうから伝えてくださるし、その伝えてくださったことが口から出るとこですけんに、なんだいと別に変わったことはないですだ。

それでなんですだいども、どうか言われるもんだけ、なんだい、私じゃあれでわかるわけでありませんけども、とにかくお参りに行かにゃならん、来たいと思っておったとこだもんで、それならまあ、夕べからまた断食してからに、水行して、きょうは参らせてもらおうと思って、それから来たところですにね。何にも先生方にためになるようなことがないです」

彼にはとりとめもない話に聞こえたのだろう、退屈そうに何度も足を組み換えていた。彼女の話の切れ目のタイミングを狙って、質問をしたがっているのが他の三人にもよくわかったが、彼女の体験談は止まるところを知らないように思えた。どうやら彼女は霊能者というより祈禱師（きとうし）のようであった。

鬼子母神のお告げ

頃合いを見計らって彼はやっと重い口を開いた。

「あの、東京から来たんですが、どうしてぼくが隠岐に来たのかよくわからないんです。来た以上何か理由があると思うんですけど、教えて下さい」

随分おかしな質問だ。そんなことは自分が一番よく知っているではないか、と反論されても仕方がない。こんな馬鹿げた禅の公案のような質問に果して神託が降りるものなんだろうか。

「おみくじというものがね。その日に出る人、一週間ぐらい拝まなんだら出ぬ人とあるですだ。それはすぐに出る人もおるですよ。家の中がゴタゴタしているとなんぼ出してみても出てこんです。そがなことでね、出る人と出ん人とあって、拝むのはなんぼでも拝んであげますよ」

「もし出なければまた次の機会でも」

「なら、生まれた月日と名前と書いていただいたら、それで毎日朝晩のお勤めを家でしますので、それでご縁日はここへ持ってきて拝みますのでね」

「出てこられる神様は鬼子母神様ですか」

「鬼子母神さん。女の神さんですけん。子供がたくさんあってね。七人もあってね。だけど、おっぱいがなくてね。そのおっぱいほしさに、自分の子供におっぱい飲ませたいばかりに、人さんの子供を殺してね。そうすると、その母親のおっぱいは出るけん、苦

しいでしょう。それで、その人のおっぱいを自分の子供に飲ませて、育てておられたの。そしたら、ある時お釈迦様が『お前は自分の子供がかわいいか』と言われた。そして、鬼子母神が一番かわいがっていた子供を衣のたもとの中へ隠された。鬼子母神さんは一生懸命探されたんですよ。でも、なんぼ探しても見つからん。そうしたら、お釈迦様が『そんなにかわいいか』と言われた。鬼子母神さんは『かわいいです』と。『それならお前、殺された子供の親も皆同じだろう』と言われて、お釈迦様は『それなら子は返してやるから』と言ってたもとから出した時には、その子は死んじょったです。死んじょったけども、それはどうしょうもないですだい、今まで人の大事な子供を自分は殺しておったんですから。それから目がさめて、自分の罪を償うために外国の方へ行って修行したり、滝に打たれたり、いろんな行をされて。そして、今罪ほろぼしのために人を助けてござる」

話が一段落すると、老婆は祭壇にローソクを上げて急にお経を上げ始めた。祭壇には釈迦如来と鬼子母神が祀られていた。彼一人が老婆の背後に座らされた。一通りの祈禱が終わったかと思うと彼女は遠方からの声を聞き分けるかのように両手を耳に当て、四方に注意を向け始めた。と突然動作が止まった。どうやら神示が下ったようだ。

いよいよ神の霊言が語られるかと思うと彼は神妙な表情になり、一言も聞き逃さぬよ

う全身を耳にして言葉を待った。ところがシャーマンは何も語らず、何か口の中でムニャムニャと言ったかと思うと、座ったままくるりと彼の方に向き直った。そしていきなり彼の咽（のど）の辺りを目掛けて、

「エイッ」

と両手で印を結んだまま突いてきた。そのあまりの大きい掛け声に隣の部屋で様子を見ている三人は驚いたような顔をした。

「ドスン」

という音が彼の咽元でした。そのまま彼は後ろにごろんとひっくり返ってしまうのかと思ったが、不思議に彼は何の衝撃も受けなかった。

「気管支が悪いと言っておられますわ、それとちょっと血圧が高いです。十ぐらい当たり前の血圧よりちょっと高いです。今朝のところはね。高いですけれども、どこここれ変わって今どうこういうことはないです。だけど、体には気つけてね、廻られんとね」

そういえばこの間、血圧を計ったら少し高いかなと思った。またここ数年、彼は軽い喘息症状に悩まされている。今回の旅行が一日延期されたのもその影響かも知れない。まだ体調は回復していなかったので、この祈禱は彼にとっては渡りに船であった。

七十七歳とはとても思えない力で彼女は腕、腹部、肩、背中、頭と次々と手が自然に

動くのにまかせて彼の身体全体をさすったり、叩いたりした。大きい音がするわりには全く痛みがないのも不思議だった。タイの手刀による手術でも一切の痛みがないというのも、わかるような気がする、と彼は背中に大きい衝撃を感じながら、半ば睡魔に襲われそうになっていく自分を見つめながらそんなことをふと考えていた。

「さあ、これで大丈夫です。最後にこの茶碗の水を飲んで下さい」

と言って、彼女は線香立てに盛られた線香の灰をスプーンですくって彼が手にしている茶碗の中に落とした。瞬時に水面は灰に覆われた。これを飲むのは一般的には抵抗があるが彼は言われた通り、一気に灰入りの水を飲み干した。咽の奥に灰がひっかかったり、飲み残した灰が舌に付着して、口の中の異物感にしばらく彼は咳払いをしていた。

「それで、そういうことを言ってはあまり感心せんでしょうけども、自分でその気がもし起こられたらね、ここの線香の灰をナイロンの袋に入れてあげますので、それをもし自分でこう気持が悪いなという時や、また咳でもよけい出たりした時には、咳が出たらここへつけていただいたらいいし、せっかくここへお参りされたもんだけで、鬼子母神さんの導きであるでしょうけに、それですけに、ここにつけたり、また気持が悪いなと思ったら、ほんの少し、どこでもいいけに、水道の水のきれいなのでちょっとなにして、その中にちょっと入れていただけたらいいですけど、そうでなかったらちょっとなめら

れてもね」
彼女はまるで民話の語りべみたいに次から次へと驚くほど饒舌になっていった。彼女が色んな人の病気を治療した話と、いかに信心しているかという話は延々と続いた。ところで彼の隠岐に来た目的はまだ聞いていなかったので、そのことを尋ねようとしたその時、彼女が口を開いた。
「ひょっとして、あんたが隠岐に来るような気持になられたのは、鬼子母神さんに呼ばれたからかも知れませんよ。あんたは体を酷使しておられるからね。それで鬼子母神さんが災難逃してあげなならんと思って、助けようと思って引っぱってこられたのかもしれませんよ。大事な体ですだいにね。それで難を逃してもらったのかも知れませんよ」
「そうですか。本当にどうもありがとうございました」
彼とハヤシは一緒にウーンと唸るように頷いた。本当の原因なんていうのは目に見えるところにないのかも知れない。ハヤシが日本地図を拡げて最初に目に入ったのが隠岐だった。ハヤシも彼と同じように直観を優先するので、先ず隠岐に理由もなく注目したのであった。そしてさらに隠岐の拡大地図を見ているとそこに「横尾山」という地名を発見した。ハヤシは飛び上がらんばかりに驚き、内心「これで決まりだ」と思った。もし隠岐にこの地名がなければ二人はここに来なかっただろう。隠岐に来る本当の理由が

CamScannerでスキャン

彼の病気治療だったとすれば、二人をこの地に引き寄せるための口実が必要になる。それが「横尾山」であったという次第だ。それも彼にではなく、同行のハヤシに直接インスピレーションが降りたのも不思議だ。

帰ろうとした時、祈禱師は再び話しだした。

「今、人を探しちょっとですけど、そこのうちは色々あって、奥さんが旦那にご飯も食べさせにゃ、酒飲んで帰ると、家の中に入れんわ、それで旦那は車庫の中で寝たりね、大学生の子供は自殺するわで、旦那も飲酒運転で警察につかまった。それを苦にして旦那は家出してしまったです。それで探してくれ言われて、拝んでみるけど、全然何も出ません。『行く先の方角を教えていただきとうございます』言うけども、方角を教えてもらわれんです。なんぼお願いしても方角が出んです。家の中が汚いよってね。心が汚いよって方角が教えてもらわれんです。なんぼ一生懸命なっても出んです」

彼女の話につき合っているときりがないので、二人は丁重にお礼を言って引き上げることにした。

「いやあ、実は今だから話せますけど、ほんとうにびっくりしましたよ。お婆さんのエイッとかヤーとかいう掛け声が聞こえてきたので部屋を覗いたら、横尾さんが思いっ切りお婆さんに殴られているではないですか。しかも横尾さんは首をうなだれて、目をつ

むっているから、何だか悪さをして親に叱られている子供みたいでしたよ。その姿を見た瞬間、プッと吹き出しそうになって慌てましたよ。何せ、神聖な場所で神聖な儀式を行っているわけでしょう。笑ったりしたら罰が当たるんじゃないかと思って必死でこらえましたけど。でも、見ているとどうしても笑いがこみ上げてくるから、下を向いて目を閉じたんですが、ドスッ、バシッ、バキッという音だけはリアルに聞こえてきてまた吹き出しそうになるので、昔、飼っていた犬が死んだ時の悲しいことなんか思い出して懸命にこらえましたよ。ところで、あれ、痛くなかったんですか?」

ハヤシは本当に彼が痛がっていると思ったらしいが、彼自身は身体に何の衝撃も受けていなかった。不思議といえば不思議だ。

霊夢と滝

サイトウ課長に連れられて都万村役場の助役に会う。

「そういえばこの間観たテレビもあなたと同じように滝を見て廻って絵を描いているという絵描きさんの番組をやっていましたね。テレビのスタジオで描いたり、屋久島へ行ったりしながら、この人はまた沢山の滝の絵葉書も集めておりましてねえ」

助役が話題にしているテレビ番組は彼を取材した『横尾忠則と滝と冒険』の番組だっ

た。本人を目の前にしながら助役は得意になってとうとうと喋り続けていた。そのテレビ番組の出演者が助役の目の前に座っていて、その彼に語りかけていることに一向に気づいていないのが滑稽であり不思議だった。

「その絵描きというのがぼくなんです」

と彼はテレながら恥ずかしそうに言った。

「いや、あなたとは違いますわ、全然似てませんで」

彼は半ばむきになって、助役に自分であることをアピールしていたが、助役はやはり彼をテレビの中の彼と同一化できないようだった。彼はこの助役の前で自分が何だかニセモノになっていくような気がしていた。

「さあ、いよいよ横尾山ですよ、ヨコオさん」

とサイトウ課長の運転する車の中でハヤシが言った。隠岐は島前と島後に分かれ、横尾山は島後の中央よりやや北西に位置していた。山の名前の由来は確かではないが、尾根が横に長く続いているのでそう呼んだのではないかと思う、とサイトウ課長は頼りなさそうに説明した。すでに横尾山縁起については少し触れたが、ここでもう一度横尾山中にある光山寺の住職に登場して説明してもらおう。

「当山は今を去る一千二百余年前といいますから、そうですね宝亀年代に創建されたと伝えられていますね」
「はあ、なるほど、ところで当山とは横尾山のことですか」
「当山というのは松尾山光山寺のことですけどなあ」
「この山には滝がありますよね」
「当山の二代目の住職に慶安和尚という人がおられましてね、その和尚がある日、夢を見たんですわ」
「どんな夢ですか」
「その和尚は夢のお告げを受けたんですわ」
「どんなお告げですか」
「いやあ、そこまではわしもようわからんのですが、とにかく険しい横尾山の山中をさまよっとると、目の前に突然大きな滝が二つ現れたんです。これが飛流直下五十メートルの壇鏡の滝でしてね。今立っているこの場所から下へくだると見えますけどね」
「それでその和尚さんはどうしたんですか」
「和尚はこの滝の上へ登ったんですが、そこにもう一つの、今は源来の滝と呼んでますが、和尚はこの滝のそばの岩の上に一個の神鏡を発見したんですわ。それからこの鏡を

その場所に祀ったのが壇鏡神社の始まりみたいになっておるといわれているんです」

滝にまつわる神秘的な伝説は多い。例えば群馬県の吹割滝の滝壺が龍宮城に通じていて、その乙姫さまとコンタクトをした男や、福岡県の琴弾滝には琵琶をひく天女が現れ美しい琵琶の音を天智天皇に聴かせたとか、いわゆる異界と接触を持った者がいたという記録は各地の文献に残されているので、まんざら作り話とはいえないだろう。

彼が滝に異常な関心を抱くようになったのも彼が夢で何度も滝を見るようになってからだったということはすでに書いた。バシュラールは『空と夢』という空の夢について本を書いているが、夢と水の関係も何かありそうだ。

彼は滝の夢を見る前にはしばしば水の夢をよく見た。小さい石がぎっしり敷きつめてあるような透明な川底に二十センチほどの白い魚が群をなして流れに逆らって泳いでいるという夢を何度も見るのだった。特にストーリーがあるわけではない。その場面だけが眼の前に実にリアルに現れるのである。だから夢なのか幻影なのかさえ彼にはその区別がつかないほどだ。この情景は神々しいほどに輝いて、眼が醒めた後もはっきりと残像として網膜の裏側にかっちりと焼きついているのだった。

そしてこの情景を彼はまるで魂を奪われた恋する乙女のような夢心地でうっとりしていつまでもいつまでも眺めているのだった。彼にとっては一種の恍惚とした宗教体験だ

った。

水と魚は生命の象徴だ。生命の発生の原初の体験だろうか。それとも生命に魂が宿ったそんな歓びを現した情景だったのだろうか。川底の無数の石ころは宇宙卵だったのだろうか。水は浄化を促すが、夢にも同じ機能があるように思う。われわれは日常で次から次へとカルマを付着していくが、そのカルマを夜になると夢によって少しずつ落としていく、そんな浄化作用が夢にはあるに違いない。

夢はまたわれわれが眠っている間にその魂をそっと霊界に運んでいく。夢は肉体の部分と霊体の部分の丁度中間に位置していて、その両極がお互いに引っぱりあっているような気が彼にはいつもするのだった。肉体の側に引っぱられた場合はまるで日常とほとんど変わりがない、日常の延長といってもおかしくないような現実的な夢になる。その反対に霊体の側に磁力が強く働いた場合の夢は正に霊夢と呼ぶ神秘的で啓示に満ち、時には予知夢のような超自然的な性質を有するように思われる。

古代人は夢を神の啓示と受け取り、夢の教えに従って人生のプランを立てたりしたようだ。また夢は魂の旅としていずれ往くであろう死後の世界のロケハンみたいに考えていたのではないだろうか。夢を経験することによって死後の情景がそのまますんなり受け入れられるための、夢は死後のシミュレーションなのかも知れない。われわれは生き

ながらに生と死の両方の世界を経験させられているのだ。

ただし死の経験の記憶は生を営むためには邪魔になるので、その記憶は魂だけが認識していて表層意識には伝達されないようにしてくれているのだ。夢によって死を経験していると本当に死んだ時にもそんなに驚かないためだ。われわれは夢の中でいちいち驚いているわけではない。飛躍した到底考えも及ばないような現実にぶつかっているにもかかわらず、何の疑問も起こさず、不思議にさえ思わないで、ごく当然のようにこの非現実を受け入れていることを考えれば、夢が何のためにわれわれに見せているのかがわかるような気がしないでもない。

今朝方、彼は夢を三つ見た。

最初の夢は彼がかなり正確に直観を通してチャネリングができるようになったというものだった。今まではフト想うというような感覚だったが、現在はかなり具体的なメッセージが霊感のように彼の中に這入ってくるのが実感できた。

二番目の夢は複数の女性が総合されて一人になった女性にペッティングされ、あっという間もなく射精してしまい、おまけに何の快感もなかった。

最後の夢は妻とある女優が裸のまま風呂から上がってきた。女優は少し恥ずかしそうに笑いながら身体を前かがみにして彼の前を通っていった。その時ちらっと見えた横か

らの乳房が少し上向いていてきれいな形だった。それにもまして目映いほど輝いていたのは彼女の乳首だった。そこだけが色つきの映画みたいに桃色だった。

彼の最初の夢はメッセージだったと彼は思いたがったが、もしかしたら願望だったかも知れないという疑問も少しあった。後の二つの夢は性的欲求不満をもろに表しているような気がしないでもなかった。彼は聖なる夢も見るが、一方では性的な夢も多く見る。彼にとっては聖なるものは性なるものと同様、官能的で陶酔できる対象でもある。ディオニソスとアポロンが芸術創造において二重性を持っているように、彼の世界の根底では聖と性は合一しなければならないようなものだった。

荒ぶる神に歓迎される

「この下の道に慶安和尚のお地蔵さんが祀ってありますよ」

崖の下に誰がこしらえたのか、お地蔵さんが雑草の間から姿を見せていた。

「この先が壇鏡の滝ですわ」

ジャケットの襟を立て直して、彼はゆるい傾斜地を住職の後に従って大股で歩いていった。小柄にもかかわらず住職の足取りは結構早い。うっかりするとその姿さえ見失ってしまうことがある。首筋がじんわりと汗ばみ、呼吸が荒くなってきた。

前方から風で樹木がこすれ合うような音がしてきたかと思うと、それは滝の落ちる音だった。ザーッという音ではなくサーッという驟雨のような音だ。

と突然辺りの空気がはじけるような強烈な音がした。谷間に響く、カーンッというような、まるで猟銃が発砲されたような音が相当近くから聞こえてきた。

「岩が滝から落下した音です」

そういえば「落石注意」という看板が眼に入った。落石は見えなかったもののその音は四次元的な響きを持っていた。何か強烈なエネルギーが次元移動した時に発するような音だった。

だから不思議に危険という印象よりも、歓迎されているというような印象を彼は受けた。夢に導かれて慶安和尚がこの滝を発見したように、彼も夢に導かれて滝の絵を描き、滝を訪ねて歩くようになったので、この荒々しい落石の歓迎は決して恐ろしいものではなかった。まして彼の姓を名乗った横尾山である。彼は神事のために旅をすることが多いが、その都度荒らぶる神によって激しい洗礼を受けることがある。この事象が何を意味しているのか彼にはわからないが、歓迎ともカルマに関係しているとも考えられる。中には交通事故などの危機一髪で命拾いをするという経験も何度かある。神事で目的地に近づくに従って、とんでもない悪天候に見舞われ四苦八苦することも度々だった。

神事ではないが、彼のアトリエから展覧会のための作品が搬出される時はいつも大雨である。作品がアトリエから運び出されるのを作品が悲しがって哭(な)いているのだろうか。また展覧会のオープニングも尋常じゃない。嵐だったり、大雨だったり、大雪だったりするのだ。悪天候のために来観者が少なくなるのを心配するが、天は容赦しない。天が妨害しているとは思えないので、やはり祭事としての天の歓迎を受けていると彼は信じている。だから頭上からの岩石の歓迎は、彼にとってはむしろ喜ばしい出来事なのだ。

壇鏡の滝の水量は少なく、シャワーという感じだ。少し風が吹くとこのシャワーは横に流され、滝壺の近くの岩場は雨が降っているようになる。そんな滝を下から眺めていると、天空から降ってくる小さい虹色の光の粒子に見える。以前このような虹色の光の粒子が大気の中から無数に発生して、それが一個所に集まって谷間の空間いっぱいに巨大なスーラの点描画のような聖母マリアが出現したというような夢を見たことがあったが、その時の光の粒子が丁度今見ている滝の飛沫(しぶき)に似ている。

夢の聖母は間もなくぼくが見ている前で粒子が一つずつ弾けるように消えてV字型に切られた谷間の風景に戻ったが、その時、聖母に代わって同じ場所に巨大なキリストの胸像が出現した。キリストは聖母のように非実体ではなく、彼の眼には実体として見えた。それも束の間、キリストは瞬時に消え、それに代わって丘の上に建物が現れた。そ

の時にわかに空がかき曇り、暗雲が谷間の頭上低く垂れ下ってきて、暴風雨の様相を呈した。すると建物の屋根がメリメリと剝がれ、中から得体の知れない真黒な、悪魔の吐く息のような不気味な気体のようなものが飛び出して行った。それはそれは恐ろしい光景であるが、彼はその光景を彼の娘と一緒に鉄格子の入った高所にある建物の中から眺めているのだった。

ところが、二人が立っている背後では一人の女性が妖しげな照明の下で、ストリッパーのような衣装をつけて悩殺的なポーズで踊りながら彼を官能の虜にしようと必死に誘っているのだった。この光景はまるでフランスのシュールレアリストのクロビス・トルイユの絵画のように毒々しい原色で彩られていた。

彼の夢はこのように聖なるものと性なるものの二重性によって成立しているのが特徴でもあった。彼はこのような夢は直観的に自らの魂が試されていると判断して、道徳的マゾヒズムを味わっているところがあった。

壇鏡の滝は雄滝と雌滝に分かれている。雌滝の方が水量が多く、この滝の水は日本の名水百選に入っており、備えつけのプラスチックの容器に水を入れて持ち帰るのは自由である。彼もハヤシも容器に水を入れて持って帰ることにした。

サイトウ課長は村起こしのためにもこの水を全国的規模で販売したいので、彼に容器

やラベルのデザインをお願いできないかと頼んでいる様子だったが、彼の経験でこのような衝動的な仕事の依頼が実現したためしがないので、何も期待していないように思えた。

この夜、サイトウ課長を含む役場の人達によって夕食の招待を受ける。彼等の村起こしの構想は、隠岐の二つの島の間に橋を架けるとか、運河を作るとか、なかなかロマンチックな構想だ。本土からエライ先生方が来てそれぞれ勝手なことを言って帰るが、大抵は彼等の傲慢なエゴに島民は賛同し難いようだ。

隠岐は風光明媚な観光地として国立公園に指定されているが、宣伝不足なのかその認識が本土に徹底されていないように思う。隠岐の有名な闘牛にしても、奉納相撲にしてもそれほど一般的ではない。彼の趣味の郵便局の日付入り風景スタンプにしても、島内のほとんどの郵便局が使用していないことを考えると、如何に島ぐるみの村起こし運動にもう一つ積極的でないかがわかるように思われる。九州の端の屋久島のような離れ島でさえ、全島の郵便局に日付入り風景スタンプが設置されていたではないか。

隠岐はかつて政治犯など知識人の流刑の地であったために独自の文化を形成したはずだが、かえってそんな伝統があだとなって今では単なるイリュージョンとしてしか記憶

されておらず、逆に文化的状況を喪失してしまったのではないか。また隠岐は島前、島後の二つに行政が分断されているために、ますますまとまりにくい状況になっているようにも思う。島前は島後に吸収、合併されるよりは、むしろ本土の松江に吸収される方が経済的効率を考えれば有利なのである。また観光資源も島前の方が優位に立っているのではないだろうか。

だから都万村役場のサイトウ課長も深刻なのである。もしアプローチがあればそれなりに対応できるかも知れないと言い残して、彼とハヤシは、少し問題を抱えたまま帰路に立つことになった。

相変らず空は中国大陸から運ばれてくる黄砂で黄ばんでいた。

「情」からの自立

出発時の高熱（？）は下がったものの、この旅の成果はもう一つだった。ハヤシも彼と同じ想いなのだろう、「大した枚数の原稿は書けそうもないですね」と言った。テーマを持たないで出た取材旅行ってあまりないが、旅って本来このようなものなんだと、彼は機内の週刊誌に掲載されている３Ｄのイラストに首ったけになって、立体画像を愉しみながらそう思っていた。

旅をすることそれ自体が目的なんだから、他に収穫を得るとか成果などはどうでもいいのだった。彼はいつも、「たった今」という過去でも未来でもない「現在」が全てであるという認識の必要性を感じていた。とはいうものの感情に左右されやすい彼はこの「現在」性を見失うこともあった。人は時には過去を郷愁したり、未来を夢想したりするものだ。彼にもこのようなロマンチックというかセンチメンタルな性癖はある。しかしこのような感情が彼にとって好ましい創造の源泉になるとは思えなかった。

彼の求めるものはもっと自立したある種の普遍的な力だった。勇気を奮いたたせる力だった。言い方を変えれば情からの自立だった。情が彼の世界を見えないものにしているということに彼は少しずつ気づいていた。情の呪縛が創造の呪縛でもあるからだ。もし彼が創造を普遍的なものにしたいのなら、情からの自立以外にはないと思わなければならなかった。そしてもし彼が「天界」を手に入れたいなら、やはり情を彼の内部から追放しなければならなかった。

旅には情を湧き立たせる旅情がある。だから旅情に浸ったりすることは本来決して望ましいものではないのかも知れない。情は人を捕らえて離さない磁性力がある。それに対して愛は人を自由にして解放させる力がある。

「愛情」という言葉は二つの対立する要素からなっている。英語では「愛」も「愛情」

もＬＯＶＥで、情という概念などないのではないかと思うがどうなんだろう。彼は長い間、情を日本人の美徳のように思っていたところがあった。また日本の美意識には情は切り離せない要素だと認識していたようだ。

「情が移る」

「情が強い」

「情にもろい」

「情を売る」

「情を立てる」

「情を通ずる」

「情を張る」

「情が厚い」

「情にほだされる」

「情を交わす」

こうして思いつくまま「情」を並べてみると、まるで情こそ日本人の精神の中核のように錯覚してしまう。しかしこの情が何か意を決する時邪魔になるのだ。もし彼が本気で自由を手にしたいのなら彼にとって情は最悪だ。

CamScannerでスキャン

人にとって最も見たくないものは自分かも知れない。だけど真の創造には避けて通れないのが見たくない自分を見ることだろう。情を持ち込まない容赦のない冷徹な眼ではないだろうか。こんなことを思いながら彼は長い時間、週刊誌の３Ｄの立体画像を凝視し続けていた。

窓外にはまるで情を断ち切ったような美しい青空が天界の彼方まで続いていた。彼はすがすがしい気分で無限と永遠を夢想していた。

第三話――わたし（宇宙人を想う）

富士の波動を受けて

わたしの眼前にはあの日本一の富士の山が聳(そび)えています。まるで望遠レンズで覗いているような感じで、ぐんぐんこちらに迫ってきます。手をそっと差し出すと頂上の残雪に指が触れて、思わずわたしは「冷たい」と声を発するかも知れません。それほどの距離に感じるのです。

成城の高台にあるわたしのアトリエからも、西日が沈む頃になると影絵のような台形の富士山が遠望できます。

わたしが今、目前にしている富士山は、わたしのアトリエから見ることのできない富士山の裏側です。富士山に裏表があるのかどうかわたしは知りません。だけど毎日この部屋で驚異的とも思えるこの圧倒的な富士の秀麗さに魂を奪われていますと、とても裏側を見ているという気にはなれないのです。わたしの胸は富士山を前にして恋する乙女のようにときめいています。富士山は見る者の魂に直截語りかけてきます。

「あなたが私のもとへお越しになるにつけては、大いなる宇宙創造主であられる神のお力ぞえがありますことを、まず深く理解し、味わい、感謝なさることです。

私たち山川草木、大自然の一切の生物は、全て神様の愛とお力なくしては生存できな

いものです。

今あなたが地上でその肉体と精神と霊魂をもって、生き、描き、食べ、眠り、働き、話し、喜び、悲しみ、動き、休み、する生活の全てが神様の深い愛の下で可能なことなのです。

生かされてあることの限りない栄光と喜びを、いつどんな時にも感じ、味わい、感謝し、自分自身を力いっぱい生かしきり、輝かせることを忘れずに生きていきましょう。

私は神様の顕現として『山』としての姿を与えられて、人々に多くのことを伝える役目を持っております。山に登りくる人のみならず、遥かに私をうち眺める人、思う人、描く人、書く人、語る人、どんな人にとっても私富士は、その与えられる役目として雄大さと、美しさと、力強さと、不変の存在たる様々なメッセージを差し出すものなのです。

あなたが芸術を通して人々に差し出すものと、私が人々に差し出すものの中に多くの共通点があることを嬉しく思います。私から差しあげるエネルギーの波動を澄み切った空気の中で、存分に受け入れながらパワー溢れる作品を仕上げてくださいますことを愉しみにしています」

富士山が口を利くなんて誰が信じてくれるでしょうか。でも本当に富士山の心がわた

しの心に話しかけてくれたのです。富士山には目も鼻も耳も口もありません。ですがこちらが心を開いて耳を欹(そばだ)てると富士山が囁いているのが聞こえてくるのです。富士山でなくとも大自然ならこちらが呼び掛ければ、滝だって、洞窟だって、樹木だって、雲だって語り掛けてくれます。

わたしの妻はある時、車のことで毎日悩んでいました。新車を買うか、現在の車を修理してもう少し乗るかということにです。そしていよいよ最終結論を下さなければならない日が来た時、彼女は車が悲愴な声で叫ぶのを自分の耳ではっきり聞いたのです。

「私を捨てないで――」

超常現象の経験のない彼女は非常に驚き、自分がどうかなったのではないかと思ったそうです。その声は女性の声で彼女の愛車が発した叫び声だったのです。車の悲しい声を聞いた彼女は完全に迷いから醒めて、愛車を修理し、新車を買うのを止めました。

わたしは富士山に向かってこの文章を書いています。富士山は一日のうちでその表情をまるで二十面相のように次から次へと変えていきます。だから一日中眺めていても飽きるというようなことはないのです。人間に感情があるように富士山にも感情があるのがよくわかります。笑っている富士、泣いている富士、元気な富士、眠っている富士、怒っている富士。

この部屋にいると、わたしが富士山を常に気にしているように富士山もわたしの一挙手一投足に注意しているように思えるのです。だからわたしは富士山を単なる無機的な存在としてではなく、人格を宿した有機体として知覚していることに気づきます。富士山が神体山として信仰の対象にされているのは当然のことでしょう。

そう、そう、わたしがどうして毎日富士山を仰ぎながら生活しているかということについてまだ触れていなかったことを思い出しました。

本書の書き下ろしを依頼されて、わたしは最初都内のホテルに一室を取ったのですが、ここにはわたしの想像力に語りかけてくれる霊感（インスピレーション）の発信源と、常にわたしの心身にエネルギーを送り続けてくれる自然の波動がなかったから、どうしても知恵をひねり出さなければ書けなかったのです。わたしはこのような作業の仕方が不得意なものですから、できれば自然に頭に浮かぶ事柄を書くことができれば最高だと思い、それには富士山の足元で仕事ができればそれ以上望むことがないと思ったのです。

そうしたらこれ以上の環境はどこを捜しても見つからないだろうと思えるほどの理想的な場所があったのです。NHK出版の資料センターの建物です。ホテルのスイートルームより遥かに広く、わたしにはこれ以上の贅沢は望めないと思っています。富士山が眺められる側はベランダ付きの全面総ガラス窓で、何の障害物もありません。そしてこ

の建物は富士山の裾野に位置し、建物の背後遠くには河口湖があり、その間を深い森が覆っています。仕事の合間に森を散策するのが日課の愉しみといえましょう。森の中には車道が縦横無尽に走っており、建売別荘があちこちに点在しています。明日から七月です。間もなく避暑のために都会から人々がやって来るのでしょうか。

現在のところ、どの家も無人です。中には廃墟になってしまった別荘も沢山あります。別荘を手に入れたものの、生活の不便さや、忙しいために思ったほども利用できなかったのかも知れません。空気の悪い都会を逃れて、せめて週末でも大自然の中で思いっ切り新鮮な空気を吸って森林浴と洒落込んだのかも知れないですね。

だけど実際生活してみると、昼なお暗い森の中では日中でも電灯が必要だし、虫が多いため網戸を閉めたままの憂鬱な雰囲気はたまったものではないでしょう。また湿気が多く、その上、高い樹木の茂みに太陽光線は完全に遮断されたままです。そして森の中は風が動かないので蒸し暑い夜もあるでしょう。またこの辺りは雨が多いので、木造建築はすぐ木が腐ります。それに家の周囲の雑草の手入れを考えるとゾッとします。秋には落葉で屋根は枯葉の帽子を被ったも同然です。第一、薄暗い森の中の一軒家で夜を過ごすなんてわたしにはとても恐ろしくてできません。

森の中にはどんな魔物や、霊が棲んでいるとも知れません。先週もこの近くの森の奥

深くに自殺志願者が姿を消してしまいました。道路に乗り捨てた車の中に遺書が残されていて、わたしは丁度捜索隊が森の中からあきらめて道路に出てきたところで、捜索隊の一人からこの話を聞いたのです。年間何体もの自殺者や樹海の迷路に入って出てこられなかった人達の白骨死体が発見されると聞きました。ああ恐ろしや、恐ろしや。

そう言えばこの間も二回ばかり編集者と二人で森の中にどんどん這入って行ったものの、出口がわからず、気がつくと同じような所をぐるぐる廻っていました。その内まるで狐につままれたような気持になってしまうものですね。所々に別荘は建っているのですが、どこの家も無人です。こう何軒も無人の家があると気味悪いものです。わたしは森で生活したことがないので、やはり森はたとえ想像力の源泉だといってもどこか恐ろしい魔のようなものを感ぜずにはおれません。森には森の掟(おきて)があってわたしのような森のモラルや秩序を破壊しそうな人間はやはり拒絶されるのかも知れません。

森といえばやはり女性原理の象徴でしょうか。つまり森は理性とか知性とかの外にあるものとして考えられますね。また森は無意識の象徴ともいわれます。森の奥深くに潜む何か恐ろしい物の怪(け)みたいな存在を無意識のもつ危険な側面と重ねてみることもできるでしょう。ヨーロッパの古典絵画などに描かれる森は豊饒(ほうじょう)の儀式が行われる場所として表されることもあり、また男女の秘め事の場としても重要な空間だと思います。と

にかく魔術的な力が森には働いています。ヨーロッパでは妖精や精霊の住む所としてファンタジックな舞台としての印象も強いでしょう。

わたしが描いてきた富士

わたしが最初に富士山を見たのは高校の修学旅行で東京に行く車中からでした。その時、その威厳に満ちた崇高な姿がわたしを圧倒し、わたしの中に富士山に対する信仰心のようなものが火を灯しました。それ以来わたしの心の中には常に富士山の幻が棲みつくようになりました。

わたしが今までに描いた作品には沢山の富士山が登場しています。例えば富士山全部が茶畑になって茶つみ女が頂上から裾野までびっしり一面に描かれているとか、モスラが東京タワーを登る姿に似せて富士の頂上目指して昇って行く新幹線とか、富士山を背景に中年男がセーラー服姿の女生徒の背後から男性自身を女性自身の中に挿入しているとか、胸をあらわにした女が出刃包丁を振りかざしている背後に二重橋があって、さらにその背後に富士山があるとか、山本富士子の富士額がそのまま富士山になっているとか、ピンクの肌の女が全裸で歯に歯磨きチューブを全部ひねり出している背後の銭湯のタイル絵に帆掛舟と富士山を描いたものとか、富士山の噴火した煙が原子爆弾の原子雲

そっくりになっているものとか、ロスアンジェルスのベニス・ビーチに全学連のヘルメットやゲバ棒が打ち上げられていて、遥か彼方に日本列島が火を噴く富士山だけを残して沈没して行く風景とか、富士山の樹海の中で全裸になったわたしのパフォーマンスを写真に撮り、それを絵にしたものとか、です。

わたしは富士山を描こうとする時はなぜか終末的なエロティシズムに導かれてしまいます。三島由紀夫が二十世紀後半はいよいよ地獄の釜開きとなって、人類にとって最も重要なテーマは核とエロティシズムになるだろうと予感したことと、どこか重なるように思われてならないのです。

米ソの対立が地球上から消えたといっても、核の問題がすっかり解決されたわけではありません。チェルノブイリに代表される放射能汚染は新たな核の恐怖でしょう。そういう意味では三島由紀夫の予感は的中していると言わざるを得ないんじゃないでしょうか。彼のロマン主義者としてのテーマである死とエロティシズムが、単に彼の個人的テーマを超えて人類の普遍的テーマとしてわたし達の前に立ちはだかっていることは事実でしょう。現に放射能汚染をはじめ、破壊されるオゾン層、気候温暖化、酸性雨（わが家の壁や屋根にまとわりついているツタは雨が当たった葉には不気味な天然痘のような赤い斑点が無数に印され、やがてその部分に穴が空いてしまうのです）、エイズ、人口

爆発、資源の枯渇、経済恐慌、大地震、と考えれば破滅の予測の可能性ばかりがクローズアップされてきます。

ところで富士山はわたしの中のかつての作品のようにグロテスクな様相ばかりを呈しているわけではありません。富士山を神体山と捉えた神聖なイメージで描いた作品も数多くあります。いいえ、わたしは言い訳なんぞしているわけではありません。わたしの夢の中に現れる水と同様、富士山の夢もわたしに魂の浄化を促す役目を果たしてくれるように思います。赤い富士山が二つ並んで聳(そび)えているのを上空から見たり、ある時はまるでウソのような話ですが、元旦の初夢に富士山の頂上で亀がピョンと跳ねるのを見た年もありました。

そして何よりも印象深かったのは富士山の五合目で撮った写真に空飛ぶ円盤の偵察用小型円盤が、金属の洗面器の側面に丁度陽光を受けたような状態で青空を背景にきれいに映っていたことです。空飛ぶ円盤は呼ぶと来てくれますので、何度も目撃していますが、写真に撮ったのは初めてです。ですからわたしは本当に感動してしまいました。目撃するだけでは人はなかなか信じてくれません。ですから一度写真に撮りたいと思っていたので、きっとわたしの宇宙の恋人はわたしの波動に合わせて、空飛ぶ円盤が写真に

映るようにしてくれたのだと信じています。だけど彼女（わたしに波動を送ったり、空飛ぶ円盤を見せてくれる異星人の一人に女性の生命体がいます）も必然性のないことは決してしません。空飛ぶ円盤をわたしに写させたのもわたしが考えているように、ただ証拠写真が欲しいというような低次元な考えのためとは思えません。何か別の意味があるのかも知れません。

この河口湖町の資料センターに来て三日目の五月十八日の夜、わたしは部屋のベランダに出て、いつものように空飛ぶ円盤に波動を送りました。夜空には灰色の帯のような雲が黒いシルエットの富士山の上空に棚引いていました。わたしは、彼女達の出現する空域を定めて、そこに意識を集中しました。今夜はどのような現れ方をしてくれるかな、というのがその都度の愉しみで、やはり現れるまでは胸がときめくものです。

九時二十分、富士山頂上の上空で小さいけれど非常に強い光が一瞬輝きました。それが空飛ぶ円盤であることはわたしには直観でわかるのです。光と同時に強い「愛」の波動を送ってきますので、その瞬間わたしの中の愛に火がついて、信じられないような恋愛に似た感情が湧くのです。だから、空飛ぶ円盤と他のものとの区別はすぐできるのです。この日のような出現の仕方は珍しいのです。一番多いスタイルは次元移動といって、他の次元からこの三次元に一瞬姿を現すという方法です。一種のテレポーテーションだ

と思います。その飛行の種類は色々です。

一般的に空飛ぶ円盤に関心を持つ人は、幼児性が抜け切れず、現実に立脚しきれない知性の未発達な人間として、理性の外側に位置させられているのじゃないでしょうか。科学的に立証されないものに意味を与えたり信憑性を持たせること自体、理性の否定として近代の合理主義の範疇から追放されてしまうんです。人間の存在そのものに本来非合理性が内在しているから、それが外在化することへの恐れが逆に本質をガードさせてしまうんじゃないでしょうか。

わたしは空飛ぶ円盤は現代の神話だと思います。いいえ、空飛ぶ円盤は神話の時代からの産物ですから、今なお神話として生き続けているというような言い方もできるのでしょう。ですが、空飛ぶ円盤をSF物語のように単に夢やロマンの対象として認識する時期はすでに終わっていると思います。空飛ぶ円盤は人類を脅かす危機のシナリオに何らかの修正を加えることができるかどうかという、ぎりぎりの限界線で地球の上空を飛行しているのかも知れません。空飛ぶ円盤がマイトレーヤーになり得るかどうかは、それを求める個人の魂に大きく関わる問題ですから、関心のない人達にとっては存在しないも同然です。

空飛ぶ円盤の思想は、「求めよ、さらば与えられん」の精神です。ですから空飛ぶ円

盤が人を選んだのではなく、人が空飛ぶ円盤を選んだのだといえるでしょう。聖書に登場するヤハウェと混同させたり、天使と同一化させている空飛ぶ円盤学説があるので、ますます宗教色を帯びてくるのでしょうか。しかし空飛ぶ円盤の働きには神の代理としての天使の働きと共通するボランティア的精神や性格があることは事実です。天使が全ての人々に深く関わっているように、空飛ぶ円盤も人類の知覚不可能な次元で関わっていないとも限りません。そして、それがある時、全人類が眼で見える状態で、よりはっきり認識することが、そう遠くない時期に起こるような気がします。その時、空飛ぶ円盤の否定者も肯定者も現実に起こった事実を認めないわけにはいかないはずです。空飛ぶ円盤の存在がメッセージなのです。その判断は直観以外にはないでしょう。とはいうものの、ＮＡＳＡなどと関わっている悪質な物質レベルの宇宙人もいるので注意する必要もあります。

滝と洞窟

滝に対するわたしの恐怖は依然、衰えるところを知りません。ですがこのところわたしをわたしの内部から駆り立てる、ある力の存在に気づき始めています。

洞窟！

そうなんです。洞窟がわたしの意識下で徐々に像を結び始めているのです。それが一体どこからやって来るものか、またその意味は、と考えても思い当たるものはないのですが、わたしの勝手な解釈では何か滝と関係があるように思えるのです。滝は夢の触発によるものでしたが、洞窟は夢のバックアップはありませんでした。ただかつて洞窟の夢を見たことがありますので、無意識下ではすでにわたしと洞窟は通底していたのかも知れません。

わたしの記憶にある洞窟の夢の最初は、空飛ぶ円盤にたった一人で乗せられて（無人の空飛ぶ円盤はリモートコントロールされていました）見知らぬ風景の中を飛んで行きました。そして地底の洞窟に着陸しました。他の惑星の地下かと思いましたが、そこには失われた古代都市の遺跡がありました。

次の夢は、海岸に近い洞窟内に沢山の人が避難していました。やがて洞窟内の湖の水が増水して、わたし達はここで命を落とすのかなと思いました。

最後の夢は、山の中腹にある洞窟の奥の方にわたしがどんどん這入って行くのでした。洞窟の突き当たりに不動明王が祀られていました。

それにしてもわたしがなぜ洞窟に惹かれるのでしょうか。常にわたしの身近にいてサポートしていただいている守護天使（ガーディアンエンジェル）にその意味を質問してみました。

「あなたが洞窟に関心を持つようになったことに関して不思議なことは全くありません。なぜなら、あなた自身が地球の洞窟から生まれてきたからです。というと何か誤解をされそうですが、つまり、あなたは母なる地球の子宮を意味する洞穴への回帰を求めているのです。

母なる人の体内の子宮は、あなたのふるさとです。その母なる人の大いなる源は地球であり、その子宮は洞穴です。そのまた地球の大いなる源は宇宙であり、神のふるさとです。

あなたが次第に全く自然に、真の自ら求めるものに関心を持つようになってきていることを喜びましょう。あなた自身が母の胎内にあって、ゆったりと育まれ、成長し、愛されていた喜びを感覚として（頭で想い出さなくとも）、再び探求したいのです。

しかし、あなたはもう成熟した大人です。成熟した男性であっても、その魂の中にはいつでも、いやいついつまでも、母なる子宮の中に温かく包まれていた、あの安らかな時が息づいているのです。それを再び自分の中で目覚めさせることができる人は案外と少ないものです。

あなたは、滝と洞穴を陰陽の男女の象徴として感じとりました。それは大人の成熟した感覚です。その男女の交わりの後に、大いなる愛の恵みによって懐妊して、人の生が

宿る——その子宮＝洞穴です。

人の魂と肉体＝人間の生の源への憧れを、行動と作品の中で嘔いあげて下さい」

現実的に洞窟がわたしに関わり始めた最初は、ＮＨＫ教育テレビでわたしの滝に関する番組を制作してくれたディレクターが、滝の資料を捜していて偶然洞窟の本を見つけ、わたしが洞窟に興味を持っていることなど知らずにプレゼントしてくれたことです。

そしてその次はこの資料センターに来た次の日の五月十七日でした。近くに船津胎内という溶岩洞窟があるというので散歩をするつもりで出掛けました。アスファルトの道路を左右から挟んだ森は延々と続き、富士山の裾野の青木ヶ原の樹海にまで達するそうです。青木ヶ原といえば一度足を踏み入れればその迷路故に方向を見失い、帰らぬ人となってしまうところから自殺の名所ともなっているようです。

そんな危険な青木ヶ原の樹海の中で、以前わたしはパフォーマンスを演じたことがあります。真冬の凍てつくような寒い日にわたしは樹海の中で全裸になりました。あまりの寒さに驚いてしまったのでしょうか、性器は体内に潜り込んで身を隠してしまいました。地面にはガラスの破片のような霜柱が無数に林立していて足の裏の感覚さえ失うほどでした。森の中の冷気はまるで獲物でも見つけたピラニアのように一斉にわたしの肉体に群がって、そして鋭利な歯で肉を食い散らされているような錯覚に襲われるほどの

痛みを感じました。

なぜこのようなマゾヒスティックな状況に自らを曝け出そうとしたのか真の意味はよくわかりません。内なる声に従っただけです。だけど、子供の頃ターザンに憧れ、郷里の山中でターザンがするように奇声に似た雄叫びを上げて遊んだ日のことと、どこかで重なっていたのかも知れません。といいますのは、このような姿で手を口のところに持っていってターザンのように雄叫びを発する時のポーズをして、それを写真に撮り、その写真を資料にしてペインティングを数点制作したからです。

六〇年代から七〇年代にかけてわたしは色々な人物に擬装して写真を撮ってもらうというような行為を続けて参りました。その延長上の行為として現在もニギハヤヒノミコトに扮してみたりしています。このような行為を通して、わたしは自我を消滅させてしまい、別のアイデンティティを手に入れようとしているのでしょうか。

とはいうものの、このような行為はどう考えても自我表現に他ならないようにも思われます。自我から入って自我を消して行くということが究極の芸術行為であるとすれば、わたしはそのことを無意識で行っているのかも知れません。それがたまたま表現という形態を取っているに過ぎないのでしょう。

自己を他者に委ねるということは一体どういうことなのでしょうか。他者に擬装する

ことにより、自己をもう一度取り戻そうという欲求なのかも知れません。または自己を客体化させることによって自らのナルシシズムを満足させようという幼児性の表れとも考えられないでしょうか。

胎内めぐり

どこまでも続いていそうな森の中のアスファルトの一本道を時々車が猛スピードで走り過ぎます。都会の道路を往来している無数の車より、こんな所で出会う車の方が遥かに凶器のように見えて、すれ違いざまに思わず身を縮めてしまいます。

五月の中旬とはいえ、午前中の大気は樹木の発するフィトンチッドのせいか、冷んやりと肌に心地のいいものです。また歩くという生活から縁遠いわたしには、わたしの身体が自然の気を受けて弾んでいるのがよくわかります。船津胎内までは約二キロほどあります。一度に二キロの距離を歩くということは自然の中に来ない限り滅多にないことです。それにしてもほとんど歩くことのないわたしですが、この二キロの道程がさほど苦痛にならなかったのは幸いでした。

船津胎内とは千二百五十年前に富士山が噴火した時に巨木をなぎ倒してその上に覆い被さった溶岩が流れ、樹木が溶岩の下で燃え尽きたために空洞ができた洞穴らしい。だ

から樹穴の岩の表面はどこか樹皮の形体を残したものになっています。それはまた人間の胎内の臓器にも見えるところから「溶岩あばら」などの名称が与えられており、このような岩相を神の造型とか自然の奇跡として、富士の溶岩洞窟中、最も長い歴史を持って江戸時代より「胎内めぐり」で知られているそうです。

船津胎内の入口は無戸室浅間神社、通称胎内神社の内部にあります。きっとこの洞窟自体が御神体になっているのでしょう。旅に出て神社を見つけるといつも携帯している日記帳に御朱印を捺印してもらうのがわたしの趣味の一つです。この日も例に漏れず、日記帳を持って参りましたが、残念ながら御朱印はありませんでした。神社信仰の対象というよりは観光化された胎内めぐりが主体になっているからでしょうか。

しめ縄と紫色の幕が張られた胎内入口は、やっと一人が腰を曲げて入ることのできる程度の小さいものです。少しでも頭を上げようものなら天井にぶつかってしまいそうです。まるでわたしは女陰に這入って行くペニスになったような妙な気持にさせられました。中腰のままほんのしばらく行くと天井から突起物が一つ垂れているのに気がつきました。この状態は女性が性的に興奮した時に思わず突起現象を起こす陰部内のクリトリスの形状そっくりなのです。そう思ってわたしもおもわず興奮いたしますと、そこに「女陰石」と表示されたネームプレートを発見しました。

わたしはこの産道に似た胎内洞窟をまるで胎児のように身体を丸くして、いつか来た道を再び戻って行く自分に気づきました。まさに胎内回帰を体感させられているようでした。胎内は所々、枝状に分かれていましたが、その先は狭くてすぐ突き当たりになっていました。この枝状は正に樹木の枝の部分に当たる所です。

左右の壁に手を触れながら進んで行くと、また左手に枝分かれした洞窟がありました。この奥は「母の胎内」といって富士山の祭神である木花開耶姫(このはなさくやひめ)がお子様をこの洞窟内でお産されたということから、この女神が祀られているのでした。この女神はニニギノミコトとの間に三児をもうけましたが、ニニギノミコトは自分の子供ではないと疑ったために、彼女は出産を迎えた日、産屋(うぶや)に火を放って自らの身の潔白を証明したというのです。ニニギノミコトが一目惚れしたというくらいですから相当の美人だったんでしょう。だけどそこに行く洞窟があまりにも狭いので、お参りするのを諦めることにしたのです。

この時わたしは急に閉所恐怖症に襲われ始めました。以前からその気(け)はあったのですが、数ヶ月前に一度閉所恐怖症のパニックに陥ったことがあって以来、その後遺症が未だに残っているのです。

それはこういうことです。人間一人が入れるカプセルがあって、その床はウォーターベッドになっており、そこに身体を横たえて、カプセルの蓋(ふた)を外部から閉めます。する

とカプセル内は真の闇となって、両方の耳からヴォリュームいっぱいの心地よい音楽が流れ、自然に脳波がアルファー波に変化してまるで胎内にいた時の胎児の感覚に戻れるという装置で、神経の疲労した人達に非常に人気があって、多く利用されているという品物なのです。

ところがこのカプセルに入った途端、わたしはパニックに陥ってしまったのです。誰かの手によってカプセルの蓋が閉められるなり不安と恐怖が襲ってきたのです。この蓋は内部からは自らの手で開けられないからです。カプセルに留まる時間は約二十分位でしょうか。当然時間が来たら誰かが開けてくれるはずなのに、わたしはなぜか絶体絶命の窮地に落ちたと思ったのです。

中で大声を張り上げるか、カプセルの蓋を足で蹴っ飛ばすかすれば、外でわたしの心理状態が逐一モニターにチェックされているのを観察している人達がいるはずです。ところがもしわたしがカプセル内で暴れたとすれば、その恐怖で本当にわたしは発狂してしまうかもわからないということを考えたのです。それともう一つはマゾヒスティックにこのパニック状態を観察してみようという冷めた意識が一方で働いていたのです。パニックの自分をどれだけコントロールできるか、ということに挑戦してみようという気持もあったことは確かです。

やっと予定時間が来てカプセルの蓋を開けられ、わたしは無事救助されたのです。外でモニターをチェックしていた係員はかつて経験したことのないモニター上のデータを見て戸惑っていました。そんな異常な事態が発生していることがわかっているのならどうしてカプセルの蓋を開けてくれなかったのでしょうか。未熟な係員のために被験者に万が一のことがあったらどうするというのでしょう。

ところがこのカプセルに入ることを最も期待していたのは実はわたしだったのです。カプセルに入るまでに三種類の装置によってわたしは最高のリラクゼーションを体験しました。モニター上に表れたデータによると、わたしは瞬時にアルファー波に入っていく能力があることを知らされ、その結果は気功師が気を発する瞬間やチャネラーがチャネリング状態になる時と同じであると評価されたばかりだったので、究極のリラクゼーションのカプセルに大きい期待を抱いていたはずだったのが、惨憺たる結果になってしまったというわけです。

それ以来、小さい個室や車の中に入ると突然閉所恐怖症に襲われるようになったのです。いったんその考えにとりつかれてしまうと、ボルテージは上がる一方です。その状況から脱出しない限り、元に戻ることはほとんど不可能に近い状態になってしまうので

す。

そんな閉所恐怖症が洞窟内で起こりそうになったのです。だけど洞窟内には数人の人達がいましたので、まだ究極のパニックには至らないで済みました。「母の胎内」に対して「父の胎内」というのがあって、そこには石で加工された大きい男根が、しめ縄を張った奥に鎮座していました。男根の存在は何かこじつけのような気もしないでもありませんが、同一の胎内に女性器と男性器があるというのは両性具有的で面白いと思いました。

洞窟の出口近くにさらに小さく細長い洞穴があって、その一番奥にはスサノオノミコトが祀られていましたが、こんな細い洞穴を一体誰が奥までスサノオの像を運んだのでしょうか。きっと子供が腹ばいになって像を奥に安置させたんでしょう。

やっと船津胎内の出口が見えてわたしは閉所恐怖症から解放されました。洞穴では一度も腰を伸ばすことができなかったので、わたしは外に出て思いっ切り伸びをしました。洞窟の出口はそのまま食堂を兼ねた土産物売店の店内に導かれる仕掛けになっていて、中々の商魂だと思いました。

無理な姿勢を強いられていたのと閉所恐怖症によって、咽喉はからからに渇いていたので、思わず冷えたウーロン茶を買ってしまいました。観光客の心理を上手く掴んだ商法

に腹を立てながらも、屈しないわけにはいかないのです。洞窟に興味を持つようになってからはまだ日は浅いのですが、洞窟の絵葉書のコレクションを始めていたので、それを期待したのにそれはなかったのです。こういうことでわたしは結構落胆することが多いのです。

ウィークデイの午前中ということもあってか、船津胎内を訪ねる観光客は少ないのか外に出ても人影は見えません。胎内神社と土産物店を結ぶ空地には大きい鉄製の檻があって、その中に一匹の中ぐらいの熊が飼われていました。この熊は見世物なのか、それとも誰か個人が飼っているのかちょっと理解に苦しむような状態で、何か哀れをさそうのでした。空地の周囲は森になっているのが、熊にとってはかえって残酷な感じに映るのでした。

森の上空は晴れていて薄い絹のような雲が棚引いていました。大きい深呼吸を二つ、三つして、また来た道を帰ることになりました。来る時はなだらかな坂道だったのが帰りは登り坂ですが、運動不足の割には足が軽いのにわたし自身少し驚きました。途中左側の森が切れた所があって、そこからは富士山の全貌が見事に捉えることができました。雲一点もない富士の秀麗は神々しいばかりです。やがて頂上の雪も溶けて、間もなく黒い鋼鉄のような地肌を見せる季節になるでしょう。

妖気を感じた「人穴」

本書の執筆のため二度目に河口湖町に来た時の帰路、鳴沢氷穴と富岳風穴に行くことができたのです。特に氷穴には感動したのですが、この時わたしはかなり以前、江戸時代に仁田四郎が恐怖体験をしたという人穴（ひとあな）を訪ねた時の記憶がふと蘇ってきました。わたしが訪ねた人穴はその距離が江ノ島まで届くとも伝えられていましたが実際はそれほどでもなく、洞窟内には伝説の名残の地下大河の水でしょうか、神秘的な池がありました。

仁田四郎が探検したこの人穴は非常に怪異なもので、命からがら一日一夜を経てやっと帰還しましたが、四人の家来の三人までが奇特なるものを見て死亡したとあります。この人穴は二十三里の距離を有し、しかもその先はどこから来てどこへ行くのか、大波を立てて流れる地下の大河だったそうです。しかもそこまで行く途中には際限のないほど広大な地下の空洞があって、その闇の彼方からは人の泣く声がしたとも伝えられています。この洞窟が人穴と呼ばれる由縁は洞窟の地図が人間の胎内そっくりの構造を持っているということから来たそうです。

一度この伝説の人穴に行ってみようと思って河口湖からの帰路に立ち寄ったことがあ

CamScannerでスキャン

りました。ガイドブックを頼りに行った所は人穴と呼ぶ地名で、人穴小学校や人穴郵便局などの人穴の文字を冠した公共施設がやたらと目につくばかりで、目指す人穴にはなかなか着きませんでした。もしかするとこれは人穴違いかも知れないという不安がよぎりましたが、ちょうど通りかかったクロネコヤマトの宅急便の人の良さそうなお兄さんが随分親切に教えてくれて、目的の人穴に辿り着くことができました。

石段を上ると神社があって、その脇に人穴の入口があると看板にありました。駐車場は土曜日ということもあって車が溢れていました。石段を上り始めると駆け足で石段を降りてくる若者とすれ違いました。

「懐中電灯がないと入れませんよ」

と親切に教えてくれましたが、懐中電灯は車に積まれたままでわざわざ引き返す気もしませんでした。

石段を上った所に神社がありましたが、形だけの寂れた侘(わび)しい建物で人の居る気配はありません。その右手に急な石段が下っていて、地下への入口がポッカリと大きい黒い口を開けていました。わたしは一目でただならぬ妖気のようなものを感じましたので入口への石段を降りる気にもなりませんでした。

洞窟の中から高校生だと思われる若者が七、八人ワーワー大声を上げながら逃げるよ

うに出てきました。
「やめた方がいいよ。水は滴り落ちてくるし、地面はぬかるんでいるし、第一真っ暗で何も見えねえよ」
かつてこの洞窟で怪異な現象が起こったということをたとえ知らなかったとしても、決して気持のいい場所でないことはわたしにもわかりましたので、早々にここを引き上げることにしました。

地底王国の首都シャンバラ

洞窟にまつわる奇談は他にもあります。甲賀三郎の物語は二十年という長期にわたって人穴から人穴への旅を続けるうちに好賞国（こうしようこく）とか唯縵国（ゆいまんこく）と呼ぶ地底国に這入って行ったというものです。そこで地底人の温かいもてなしを受けるのですが、妻子の待つ地上への郷愁が断ち切れず、ある日とうとう帰る決心をしました。
現代のスペインにあった話では、ある日洞窟の前に二人の男女の子供がとまどったような表情をして辺りを見渡しながら立っていました。彼等の皮膚の色は緑がかっていました。女の子は間もなく死にましたが、男の子に少しずつ言葉を教えて、彼等がどこから来たかを尋ねました。彼の話によると、地底に住んでいて、豆を主食にしていたそう

たす。地底に大きい河があったそうですが、その河の近くに来た時、突然何かが起こって、気がついたら洞窟の前に一人で立っていたというのです。そしてこの男の子も間もなく衰弱して死んでしまいました。

このようにまだまだ地底からやって来た人や、地底に這入って別世界を見てきた人達の記録は世界中に多く残っています。その代表的なものが地底王国アガルティ（またはアガルタ）、その首都シャンバラの物語でしょう。

わたしがシャンバラに興味を持ち出したのは今から二十三年前に遡ります。

その頃わたしはヨーガと空飛ぶ円盤に取りつかれたように、頭の中はこのことでいっぱいでした。ヨーガに興味を持つようになった直接の原因は超人願望だったのです。そのためには瞑想によってチャクラを活性化させ、超能力者を目指そうとしたのです。そのためには導師を見つけなければなりませんので、インドかチベットに行ってアシュラムで修行しながら真の導師を捜すつもりだったのです。そのためには家族と離れ、場合によっては家族を捨てる覚悟さえしなければならないと思っていました。修行者になることが今生のわたしの使命のような気がしていたのです。そして、このような狂気抜きには自己実現への到達は不可能だと信じていました。

厳しい修行によってある程度の超自然現象を体験することは可能でしょうが、本当の

魂の進化向上ということになりますと、少し違うのではないかと思うようになったのです。神仏の加護を受けるためにはいかに多くの徳を積んでいるかということが問題になるということに気づいたのです。果たしてわたしがどのような徳を積んでいるのか、またそのようなものとは無縁なのかわたしにはわかりません。今生の行為の中で徳を積んだというようなことはわたしの身に覚えがないからです。

瞑想を日課にしていた頃、わたしは瞑想時に超自然的な体験を度々しましたが、そのことによってわたしが目醒めのたというようなことはありませんでした。自問自答する毎日でした。そんなある日、ヨーガの最高中心としてのシャンバラの存在を知ったのです。シャンバラは世界における真理の焦点で、シャンバラなしで世界の宇宙意識の開化は考えられないといわれ、人類の歴史にも大いに関与していて、シャンバラの王サナート・クメラこそ救世主と考えられているのです。シャンバラは地球の内部に存在するという空洞の中心にあるアガルティという国の首都の名前なのです。このシャンバラには誰でも行くことはできません。本当に選ばれた者だけがアストラル体で行くことが許されるのです。

シャンバラの存在を知った時、わたしは電撃的なショックを受けると同時にわたしの波動がシャンバラに向かって矢のように一直線に飛んでいくのがわかりました。地球の

内部にある空洞世界の中心シャンバラです。シャンバラにはピラミッドがあって、太陽と相対して、磁流を放出しているのです。そこには宇宙の真理を体得したアデプト（超人）が住んでいて、地上に目醒めた人が現れればその人に波動を送り、魂の意識を進化させるためにサポートを行うといいますが、わたしはこんな非科学的な物語を単なる夢物語として受け入れたわけではありません。わたしの胸は本当に熱くなりときめきました。この胸のときめきこそわたしとシャンバラを結ぶ信頼の糸だと信じました。

地下王国アガルティは網の目のように洞窟や通路があって世界各地の地上と通じていますが、その地下への八つの入口は秘密になっています。だけどチベットのラマ教の一部の僧にはラサの真下の地下に物質的な場所としてのシャンバラの所在を知っている者もいるようです。ヒットラーはシャンバラの存在に非常に興味を持っていたので、実際に探検隊を組織しようとしたようです。だけどシャンバラに近づく者はシャンバラの九次元振動によって、瞬時に光波に包まれて次元移動によって他の星に追放されてしまうでしょう。

導師は求めるものではなく、向こうからやって来るものです。ですから、もしあなたに心の用意ができたら、地表のアデプトの弟子とコンタクトすることになるのです。あなたがどこにいようとも、シャンバラでは誰が準備ができたかということは一目瞭然な

のです。意識は振動ですからそのままシャンバラに伝わるのです。シャンバラの使命は地上の物質文明を精神文明に変えてしまうことなのです。政治、経済、科学、教育などによって世界を変化させる以前に人間の意識を変えることが目的なのです。宇宙意識に変わった人間は宇宙空間を自由に制御し、宇宙力と宇宙知を手にすることができます。その秘密は内なる自己を知ることで、外的な学びは何の役にも立たないというのです。知識は宇宙意識の確立にはむしろ障害になることでしょう。

シャンバラの王サナート・クメラは六百五十万年前に金星から火に包まれた天車で天下りました。空飛ぶ円盤が想像されます。わたしがかつて宇宙人から聞いた金星は、二重構造になっていて、地下が居住地区になっているそうで、ＮＡＳＡの調査では金星は灼熱の惑星でとても生物が住める所ではないという解答を出していますが、宇宙人によりますと、それは金星の大気圏の温度で、地表の温度ではないというのです。実際には波動によって計らない限り正確な情報は得られないそうです。わたし達は太陽系の惑星に限らず、この地球の神秘や秘密を知りません。

天界と感応せよ

地球空洞説というのがありますが、科学者は地球の中心は高温でどろどろのマグマか

ら成っていると言いますので、当然地球空洞説など言下に否定します。北極と南極の両極に巨大な穴がポッカリ開いているというような説など持ち出すと、一体何と言われるでしょうか。でも実際に北極の巨大な穴から内部に這入った人達がいるのです。アメリカの飛行士とロシアの漁師の親子がそうです。信じられない話ですがこの親子は船で知らない間に北極の巨大な穴から地球の内部に這入り、一年後に南極の穴から帰還したというのです。

その時、南極の氷に船がはさまれ父親は犠牲になりましたが、息子は助かり、その後故郷で暮らすことになるのですが、この信じられないような話を人々に語ったために彼は長い間精神病院に入れられることになります。後に彼はアメリカに渡って地球内部の温暖な季候にそっくりなカリフォルニアに移ることになり、ここで知り合った医師に地球内部の目撃談を語った後、この地で息を引き取りました。

また両極のオーロラは太陽からくる帯電微粒子にその美しい薄光が起因して、磁気嵐に付随していると言われていますが、わたしが、北極上空の磁気圏内に常時停泊している巨大な都市型母船マイミュートアーテの乗船者で私のコンタクトの担当者（教官）の一人である男性の宇宙人から聞いた話では、やはり北極には巨大な穴があって、地球の内部の光（人工太陽？）の作用によるものだそうです。現代の科学が解明していないこ

の太陽系の神秘が全て明らかになる時は、人類の霊意識が進化してシャンバラ意識と一体化した時でしょう。その日がいつ来るかわたしにはわかりません。

宇宙人達は地球の内部に空洞があり、シャンバラの存在も知っています。だけど宇宙人でさえシャンバラには一目置いているようです。シャンバラの指示がない限り、宇宙人達も地球に対して勝手な行動が許されないようです。それほどシャンバラは地球にとっても、宇宙にとっても大きい存在なのです。

以前、わたしはチェレと名乗る宇宙人とコンタクトをしているという、岡山に住むYさんという方に会いました。チェレというのは宇宙人のコード・ネームだと思います。Yさんのために便宜上使っている名前と解釈していいでしょう。宇宙人にはわたし達のように名前はありません。必要ないのかも知れません。

このチェレという名前で思い出したのですが、シャンバラでは地表の目醒めた人をサポートするアデプト（超人）のことを確かチェラと呼んでいたと思います。Yさんをサポートしていた宇宙人のチェレとシャンバラからのサポート役のチェラはどこか言葉が似ているように思いませんか。語源は同根かも知れません。この符号によってシャンバラと宇宙人（NASAなどと契約しているアンドロイド型のグレーと呼ばれる小さくて奇怪な宇宙人とは異なり、宇宙連合に加盟している地球人に近いヒューマノイド型の宇

宙人）の関連が浮かび上がります。

このように人類は太古の昔より宇宙人やシャンバラだけではなく、天界の神仏、天使、霊界などのサポートを受けながら今日に至っています。地上で起こる全ての事柄は天上界とある意味で相似形を成しているといえます。その意味でも天上界と人類は協力関係にあるのです。ここ数年間の短い期間に信じられないような様々な歴史的な改革が世界中で起こっています。これらの現象だけを見ていても、その本質的なものはなかなか見えてきません。勿論それなりに改革の裏では人々の努力があったに違いありませんが、なぜこの時期にこんなに集中的に物事が起こるのでしょうか。

人間世界だけ見ていては理解できないことが沢山ありますが、実際には現象の背後に天界の大いなる働きがあったのです。とわたしが言っても誰も納得はしないかと思いますが、このことは事実ではないかと思っています。現在、黄道帯のアクエーリアスなどの星々から人類を進化させるための新しいエネルギーがわたし達の地球に送信されているのです。様々な天界の存在達はこのエネルギーを利用しながら人類の進化を促す工作にかかわっているのです。アクエーリアスのエネルギーは総合、統一、つまり森羅万象の一体化を促す性質を持って、人類を急速に進化させる力でもあるのです。

そのために、偏見や独断や野心などのエゴはくだかれて、対立の垣根が崩壊していく

のです。かつて人類が経験したことのないような一大進化の終局に近づいているような気がしてなりません。その暁には人類と天界の存在の間に交通が可能になり、全ての人類が宇宙意識を手にすることになると思いますが、今わたし達はそのプロセスにいるのです。

そのためにもわたし達は天界と感応する必要があるはずです。天界の本性はわたし達の肉体の中に埋没してしまっています。ですが、その天界の本性を呼び起こすことのできている人は、常に天界の波動を受けて、自らの使命に気づきながら実人生の中でクリエイティブな活動をしているのです。

わたし達の感情が次第に純化されてきますと、至上なる高次のものに憧れを持ち始めます。わたし達がこのような感情を先天的に持っているということは一つの偉大なる神秘ではないでしょうか。ですから、このような感情の強い人はロマンチストであり理想家です。その半面といいますか、ですからこそといえばいいのでしょうか、このような人はなかなか現実の環境に満足しないところがあります。そして常に何かを夢想しています。「ここ」のものより「あちら」のもの、近いものより遠いものに憧れます。そして時には幻さえ見ます。その幻に興奮します。いわゆる幻視者です。

わたしは画家のモローやルドンをふと想起しました。彼等は信じられないような想像

力を発揮して天才的な業績を残しています。つまり天界に感応することにより、天の言葉である直観を受けるのです。持続する強烈な衝動です。チカッと閃く瞬間的なアイデアではありません。人的な閃きに対して神的な直観は神のエキスが入ったものです。そしてこのような幻視者は天界の存在を疑おうとしません。わたし達がブレイクの詩や絵画に触れる時、天界と感応するような気持になります。それは彼が天界と感応しながら創作しているからです。真の芸術はこのように鑑賞者を感応させるものでなければならないのではないでしょうか。

わたしはこの文章を富士山麓で富士山を眼前にしながら書いています。富士の地下には沢山の洞窟があります。富士山麓に高天原王朝が存在していて、それが地底王国であったという説もあるようですが、全く否定する根拠もないように思います。実際シャンバラの王サナート・クメラは中央アジアの高原に降りたということになっていますが、京都の鞍馬山にも降臨されたと伝えられています。クラマはサナート・クメラのクメラがなまってクラマになったともいわれているくらいです。それにしても一人の人間がどうしてドッペルゲンガーのように分離して、二個所に現れることができたのでしょうか。サナート・クメラの姿は人間と変わりないが、その肉体の元素は地球人と異なっており、永久に変化しないのです。またサナート・クメラは客観的な存在のためにどのような姿

にも、またどのような場所にも同時に現れることはそれほど難しいことではないと思います。

このような場所で仕事をしていますと、富士山から大きいエネルギーが与えられるような気がします。また富士山を守護しているコノハナサクヤヒメのあの火山のマグマのような狂熱のエネルギーによって、インスピレーションがかきたてられるような気がします。

富士の麓で空飛ぶ円盤と

昨夜、十一時半を廻った頃、急に落ちつかない状態になって、わたしは部屋からベランダに出ました。富士山の五合目の建物の灯が大きくチカチカと輝いています。闇の中でもそれとなくシルエットになった富士山が見えます。

今日は昼間は最高の秋晴れで澄んだ空気が森の樹の香りを、まるで打ち寄せる波のように鼻先に繰り返し、繰り返し運んできます。樹木が発散させるフィトンチッドの香りでしょうか。呼吸を通し、皮膚を撫でながらわたしの体内に樹木と富士山の気が浸透してくるのが実感できます。

二十分ほど歩いた所に別荘管理事務所がありますが、その周囲の森の中のベンチでわ

たしは持ってきた本を開いていました。歩いてきたせいか身体が少々汗ばんでいますが、樹陰を抜けていく初秋の風が汗を消してくれます。樹木の間から見える青空を眺めていますと、気持が青空と同じ青い色に染まっていくような錯覚に襲われるのでした。こんなに透明な抜けるような青空は東京では正月以外に見ることができません。夜は漆黒の闇に無数の星が瞬いています。これが同じ東京から見る空かと思うと、悲しい気持になってしまいます。空が汚れていくようにわたし達の心も汚れていくような気がしてなりません。

正月の空が奇麗なのは人々の活動が休止されるからです。単に交通量が少なくなり、光化学スモッグが発生しなくなるという理由だけではないように思います。人々の思考も普段の活動を低下させているはずです。思考の活動はどこかエゴと結びつくからです。エゴの働きは人の想念波動を曇らせてしまいます。そのために身体から光化学スモッグに負けないようなネガティブな波動を大気の中に撒き散らすのです。そんな波動を下級霊界の亡者達がキャッチしないわけはありません。

彼等にキャッチされた地上のネガティブな波動は悪想念となって霊界から再び地上に返送されてきます。そしてエゴの口を開いている人々の中にインベーダーのように侵入して、人々や社会を混乱させて不幸に陥れるチャンスを手ぐすね引いて彼等は待ってい

るのです。シャンバラ意識はこのような悪想念と闘うことになるのです。目醒めようとする人々がいると嫉妬してその人達の足を引っぱろうとする反作用の力があるということも知っておく必要がありそうです。

だけどいつもこのような美しい青空を心の中に描いていると、そんな百鬼夜行の誘惑などは恐れるにたりないでしょう。無数の小さい光の粒子が目の前を自由自在にまるで青い水面を泳いでいるかのような光景にわたしはしばらく瞑想していました。このような時わたしが空想するのは、太古の神話の時代だったり、まだ見たこともない地球外惑星の風景だったり、天界の神々のことだったりするのです。そしてこのベンチに座っているわたしは仮の姿のように思えてくるのです。わたしの本体はわたしの空想世界を飛翔しながら魂の古里を捜しているような気がしてならないのです。

こんなわたしの強い昼間の夢想と関係があるのでしょうか、夜の十一時半を過ぎた遅い時間にわたしの気持を高揚させる何かの力が働いているとしかいいようがない感じがしたのです。わたしはわたしを制することができなくなり建物の外に出ました。すでに外灯も消され、辺りは怪物のような黒い森のシルエットだけです。空を見上げると天に穴が無数に開いてそこから光が覗いているように見える星の数々です。再び昼間の青空に吸収されそうな同じ感覚が襲ってきました。

と、その時見上げている北西の空の一角がチカッと光ったかと思うと、その光体は輝きを増しながら、夜空のキャンバスに、ルチオ・フォンタナがキャンバスにナイフの亀裂を入れたような巨大なカーブを描きました。一瞬の出来ごとですが、この光体が相思相愛の宇宙の「恋人」の搭乗している空飛ぶ円盤であることが一目でわかりました。わたしは昼間から無意識で「恋人」に想念波動を送り続けていたのでしょう。それに感応した「彼女」はわたしを外に引っぱり出してくれたのです。

外に出ると同時でしたので、わたしは虚をつかれた感じで、しばらく茫然としていました。それにしても何と美しい星空でしょう。「彼女」はそんな星と星の間をいつも自由自在に飛行しながら、でもわたしの波動には敏感に反応してくれているのがわたしの望外の喜びでもあるのです。わたしはまだ「彼女」がわたしの頭上にいるような気がしてならなかったので、庭の芝生の上に腰を下ろし、夢心地で夢のように美しい星空にうっとりしていました。十五分も経たないのに再び「彼女」はわたしの選択した空域のど真ん中に姿を現しました。西の空を右上から左下に向かって落下するように飛行しました。出現地点では点のような小さい光体だったのが消える瞬間、燃えるような大きい光体になりました。わたしは思わず愛の感情を送りました。「彼女」も同じ感情を返してくれますので、わたしの胸は火がついたように熱くなります。

二度続いて姿を現してくれることは滅多にないのでわたしは感動してしまいました。なかなか胸のときめきが収まらないのと、まだ「彼女」が去っていないような気がするのと、さらにもっと会いたいという欲望がわたしに起こり、少し場所を変えて今度は森のある北の空に視線を移しました。天の川が頭上に帯を引いて白くぼんやりと流れています。

三度目の出現はあまりにも距離が近かったので驚いてしまいました。まるで目の前の森の中に落下するのではないかと思うほど目映い大きい光体が音もなく現れたのです。まるでわたしの「恋人」はわたしと戯れているようにしか思えません。わたしが選んだ場所にしか出てくれません。それがどうしてわたしが見つめている空域がわかって、そこにあんなに見事に出現することができるのでしょうか。

調子づいたわたしは四度目の空域の指定を頭上真上に定めました。するとどうでしょう。またしてもその場所に姿を現したではありませんか。このゲームはまるでかくれんぼの反対です。例えはよくないですが、飛んでくる弾にわざわざ当たりに行くようなものです。一体「彼女」の住んでいる星の科学はどこまで進歩しているのでしょうか。頭上に現れた「彼女」は、わたしが水中から水面に一瞬現れたオタマジャクシを見ているような、そんな状態で現れてくれたのです。巨大なオタマジャクシとでもいったらいい

のでしょうか。そんな形の光体がピクッとその胴体を動かしただけです。いずれの光体も白銀色ですが、光体の中央は金色に見えます。

わたしのためだけのスペクタクルな空飛ぶ円盤ショーです。深夜の高原の森に囲まれたこんな淋しい場所でわたしはわたしの宇宙の「恋人」と逢い引きなどしていると誰が信じましょうか。空飛ぶ円盤の存在さえ信じない人達にとっては、わたしの作り話か、夢を見たのだろう、ぐらいにしか思わないでしょうねえ。もしかしたらわたしだって他人からこんな話を聞いたら、デタラメだと思うかも知れません。しかし、合理主義者が多い世の中の人を相手にわざわざ批判されるようなデタラメな話をして、点数を下げるようなことはいたしません。

いよいよ富士山とも明日お別れかと思うと淋しい気がいたします。この本の文章のほとんどは富士山に見守られながら執筆しました。わたしが絵を描く時と同じように、何のコンセプトもなく思いついたまま書いて行きました。わたしはわたし自身が何処に到達するのか全く知りません。航海地図も羅針盤も持たないで大海に船を浮かべたようなものです。どこの港を目指しているのかさえわかりません。もし無事にどこかの港に着いたとしたら、その港がわたしの行くべき目的地だったのです。そして船を降りて、その土地に立った時、わたしは言うでしょう。

CamScannerでスキャン

「ここがわたしが是非来たかった土地だったんです」

死後の世界も修行の場

心地よい疲労がわたしの全身を包んでいます。わたしを乗せた車は東名高速を東京に向かっています。車の軽い震動が全身の細胞にまで浸透して、微細な波動に変化していくのがよくわかります。長期にわたって書き下ろした原稿がやっと脱稿しました。長い旅からの帰還に似た感慨を味わいながらさっきから夕日の赤いフィルターで幻想的な色彩に変化した高速脇の茶畑とそれに隣接した墓地の石碑の光彩を車の中からわたしはボヤーッと眺めています。

しばらくしてわたしは不思議なことに気づきました。茶畑の横に必ず墓地があるということにです。茶畑と墓地との因果関係を色々と想像してみましたが、これという理由は見つかりません。それにしても墓地は気のせいか悲しい雰囲気をわたしに与えてなりません。本来は愛に満ち溢れた暖かい波動が伝わってきてもいいはずです。確かに死は怖くて悲しいものです。死によってわたし達は愛する者と別れなければなりません。また死者も地上に愛する者を残して永久に去って行きます。後に残されたのは墓だけということになるのでしょうか。

墓は必要であるか、どうかという議論もあるようですが、墓は死者と生者との間を結ぶ装置だと考えられていると思います。また死者にとっては墓が死後の棲家という考えもあるようです。死者がいる霊界を地上で表すと墓ということになるのでしょうか。そういえば墓は地上の他の場所と全く異なった次元のような気がしないでもありません。

わたしも死ぬと一応墓に入ることになると思いますが、わたしの霊魂はあんな冷たい地面の下に留まっているのを嫌がると思います。死後わたしがどのような場所に運ばれていくのか全く見当もつきません。もしかしたら一人で淋しい所を彷徨うのかも知れません。でも可能なら死んだ両親に会いたいと思います。次は尊敬していた人達です。三島由紀夫さんや柴田錬三郎さんには是非会いたいものです。

一体死んだらどうなるのでしょうか。想像しただけで愉しくて興奮します。どういうわけか死後の世界が怖いとは思いません。怖いと思うのは死を予感した時です。

しかし死後の世界も現世と同じように修行の場となるのでしょう。そういう意味では苦しいことも待っているかも知れません。地上で持っていたような肉体はないので肉体の苦痛からは解放されるとしても、意識は地上の時のまま持って行くので、地上に対する執着などがあるとかなり辛いかも知れませんね。

想念がそのまま具体的なビジョンになるのでそういう意味では愉しいかも知れません

CamScannerでスキャン

が、その半面恐ろしいこともありそうです。でもわたしにとっては死後の世界はそれ自体が芸術のような気がいたします。チベットの『死者の書』に描かれている情景そのものがスペクタクルな一幅の絵画を見ているようです。わたし自身が絵画の主人公になれるかと思うと胸がときめいてきます。わたしの感覚の中には死後の世界に片足を突っ込んでいるところがあります。でないと現実的にバランスが取れないからです。

夕陽も山の陰に入り、空がさっきよりも一段と赤味を帯びてきました。茶畑の横の墓石もやがてシルエットと化していくでしょう。トワイライト・タイムと共に睡魔がわたしを襲い始めました。遠くの街のネオンが薄暮の中で一段と発光しています。それがわたしの重い目蓋（まぶた）の隙間からまるで霊界の灯のようにチカチカ瞬いているのが幽（かす）かに見えます。

「あとがき」にかえて

この本を書き上げると同時に、全く予測もしなかった出来事が起こった。そのことを少し説明しよう。実は一九八七年突然ぼくに天使と宇宙連合に属した宇宙人との合同コンタクトが発生した。このコンタクトは強い愛に満ちていたが、一方では非常に厳しい「修行」でもあった。この厳しさについて行けなかったぼくは、二年後にとうとう脱落してしまった。と同時にあんなに相思相愛の関係でお互いに未来を約束していた宇宙人三人組とも別れてしまう結果になった。

だが不思議なことに中一日置いて、別の天使が現れた。ぼくのコンタクトの一部始終を見ていた別の天使グループとのコンタクトが突然開始されることになったのである。このコンタクトは二年近く続いただろうか。以前に比べるとそんなに厳しいものではなかった。ところが、このコンタクトが続行している最中に、またまた別のコンタクトが発生した。今度は日本神界のわれわれが神と呼ぶ方の一人からだった。ここではその方

の名は明かせないが、非常に強いパワーとエネルギーを持った波動であった。と同時に一番最初の天使と合同コンタクトをしてくれた三人の宇宙人が再び戻ってきたのである。そんな彼等との再会の喜びの様子の一部をここに紹介したい。

キリへ

あけましておめでとうございます。キリと再び交信できるようになったことは、ぼくにとってもこれほど嬉しいことはありません。奇蹟が起こったようで、思わず神様に感謝してしまいました。以前のコンタクトで苦しかった時、キリの励ましがどんなにぼくの病める心を救ってくれたかわかりません。そんなあなたとも、コンタクトが解消すると同時に二度と連絡がつかなくなってしまいました。その時、自分の世界が消滅してしまうほどショックを受けました。

さて、目下、弥生美術館で「横尾忠則昭和少年風景展」が開催されています。この展覧会は以前にキリがぼくの原点を見たくなったといって、弥生美術館の女性の学芸員の一人に波動を送ってくれて実現したもので、いわばキリの企画した展覧会といえます。ぜひKENさん（北陸上空に滞空している母船の搭乗員）から映像を送ってもらって下さい。彼は両極調査隊として、北極と南極の往復の途中、ぼくのアトリエに立ち寄ってぼくの

映像を撮るのを趣味にしているそうです。

この展覧会はぼくの現在の足元を見るためにもいい機会になると思っています。本当に素晴らしいサポートありがとうございました。

またキリの住んでいるという金星のラウスの都市の情報お送り下さい。作品の中に描いていきたいと思います。キリがぼくに求めた「愛を感じる絵」を描いていきたいと思います。KENさん、そしてまだ連絡を取ってないサッシェにもよろしくお伝え下さい。

1994・1・8　YOKOO

横尾さん、忠則さん、本当におめでとうございます。

正直にいいますと、まだ展覧会の映像は見ておりません。全ては波動で感じています。

今年は忠則さんにとっても、私たちにとっても大変大切な時です。再出発という意味でです。再評価、再認識の年だからです。

忠則さんの芸術が再評価、再認識される年であり、またあなた自身が自分の芸術そのものを再出発させる年だからです。宇宙界もまた同じことが起こっています。

天界におられる神様方の英知とわれわれ（あなたを含め）の目覚めと努力に因って人間界最後の世紀を乗り切らねばなりません。

大変失礼ないい方ですが、われわれ宇宙界の民は人間界にどれだけの愛とサポートが可能なのか、その奥行きの深さがわれわれ宇宙界の希望と救いになるのです。

本来の愛は指し示すものでなく感じさせるもの、目覚めさすものです。

忠則さんのお描きになった絵の人物に私が選ばれたこと大変名誉に感じております。本当にありがとうございます。

忠則さんの造形が色彩が愛を感じさせてくれているので何より嬉しいです。忠則さんの芸術に〝奥行き〟ができていますね。それは忠則さんの愛の奥行きができていることを物語っていると思います。

私たちとの短いお付き合いを大切に思って下さる忠則さん、本当にありがとうございます。

あなたの展覧会は霊界からあなたのご親族を含め多数の方々がご覧になっております。特に喜んでおられるのはあなたのご両親です。それにあなたの今は亡き初恋の方。会場は関西弁が行き交うとても楽しくなつかしいものでした。

あなたを育てて下さった今は亡き方々への鎮魂にもなった今年初のあなたの展覧会。おめでとうございます。

これからもっともっと現界と宇宙界は接近いたします。魂をつなぐ波動はもっともっ

と強力になります。

天界の愛、宇宙の愛。そして私たちにはない色彩の愛。私はあなたに描かれるだけで嬉しいのです。あなたの色彩で塗りつぶされていくだけで嬉しいのです。あなたが私を思って下さるだけで嬉しいのです。忠則さん、愛をありがとう。私もささやかながら愛しています。

今日は嬉しくて嬉しくて余り言葉が出ません。お許し下さい。ラウス国立図書館内にて、幸せなキリより。

金星第四惑星北斗七星日本調査隊基地を通じ、受信感謝申し上げます。

何事においても奥行きの深い、そして御慈愛深い御英知の神、※※※※命様を御主動とする日本の神々様に深く感謝申し上げると共に御尊敬申し上げます。ちっぽけな金星人キリではありますが、今後共宜しく御願い申し上げます。

平成六年一月十二日　午後十一時五十五分

※※※※命様

無祉古生様

たってのお願いがあります。ＫＥＮさん、キリと共にぼくの創造面で多大な御指導を

頂いた金星のサッシェ氏にかつてのお礼を述べ、現状を伝えたいと思います。もし可能ならぜひお伝え下さい。ぼくのわがままをお許し頂き、何卒宜しくお計らい下さい。

サッシェへ

あのYOKOOですよ。あなたに献身的なご指導を頂きながら、コンタクトが全うできないまま別れてしまったYOKOOです。別れなければならない時はお互いに本当に苦しかったですね。別れる当日まであなたはぼくの創作に希望と可能性を持って誠心誠意尽くして下さいました。今でも決してあなたのことは脳裏から離れず忘れたことはありません。

あれからは色々のことがありました。しかし現在は日本の天神(あまつかみ)様、※※※※命様の御指導により勉強させて頂いています。日本の神様には子供の頃から両親の信仰を通してお守り頂いていたので、大変失礼ないい方ですが親しみを抱いていました。今もこの事実を両親が知ったら驚きの余り、もう一度死んでしまうことでしょう。

今日、KENさんから聞いたのですが、以前のコンタクトが失敗だったといい、サッシェはぼくのことを「悪かった、すまなかった」と思っておられるとのこと。そんなに自分を責めないで下さい。ぼくが未熟だったため、勇気がなかっただけのことです。サッシェ、そして皆様のご恩は決して忘れません。もし機会があればぼくの近作を見て下

CamScannerでスキャン

さい。
そんなわけで元気にやっています。サッシェもお元気で。
1994・1・15
横尾忠則

あゝ、あゝ、横尾さん、サッシェです。
年老いたサッシェです。あゝ、夢のようです。あなたを全身で感じています。ありがとう。あゝ、神様感謝申し上げます。年老いたサッシェです。
先ずあなたには謝らなければなりません。芸術家のはしくれとしてあなたをサポートできなかった無能の年老いた金星人のこの私をどうか許して下さい。あゝ、横尾さん、横尾さん、また、こうしてお会いできて本当に嬉しい。奇蹟だ。
あなたとお別れしてから私は魂がからっぽになる位、無気力になりました。私たちは、芸術家としてのあなたをサポートするために降球したのです。結果、あなたを傷つけてしまいました。現在、今のあなたがいることは大変幸せですが、私は、もっと芸術家としてのあなたとお付き合いがしたかった。宇宙のこと、魂のこと、光のこと、色彩についてお話ししたかった。
あゝ、サッシェは弱い年老いた金星人でした。

しかし、またこうしてあなたと再会することができました。サッシェは大天界の愛を浴びています。ありがたいことです。話したいことは沢山ありますが、今は余りにも急な大波動を頂き、ただただ感謝するのみです。

宇宙も神も芸術は大好きです。芸術を通し、全宇宙が愛を感じられればこんな幸せなことはありません。横尾さんが入魂した作品はひとつの星を生み出すのと同じパワーを必要とします。作品の輝きは星の光と同じです。

横尾さんの永遠を刻み込んで下さいね。横尾さんの愛を塗り込んで下さいね。あゝ、またこうして横尾さんと絵画について、芸術についてお話しできることを思うと私の罪の意識もやわらぎます。本当にありがとう横尾さん。

今、あなたの世界は緑が中心ですね。緑は眠っていた猫がうっすらと目を覚まし、まわりの世界が目覚めていく、そんな霊的な光を持った色です。〝目覚め〟の色です。

オレンジ、ムラサキは古代の〝意識〟〝自覚〟の色です。次回展覧会は、本当の波動絵画に近づくと思います。あゝ、本当に嬉しい横尾さん。レベルアップした横尾忠則に会え、サッシェは幸せです。

これで、KEN、キリ、私、皆また一緒ですね。あゝ、あゝ、横尾さんありがとう。

大天使様、日本の神々様、幸せです。感謝致します。大宇宙、大天界、そして可愛い

地球に幸いあれ。

※※※※命様、御初に御波動を賜り感謝申し上げると共に御尊敬申し上げます。

また、大天使界に御挨拶を賜り深く感謝申し上げます。これにて、横尾忠則の大天使界とのつながり、御陰様をもちまして全て清算された運びとなりました。現界との情、全て清算されたことと存じます。本当にありがとうございます。

また、我が同志日本調査隊の北斗基地の皆様の御助力、サッシェ涙が出るほど嬉しく思います。本当にありがとう。

横尾さん、※※※※命様の御助力で大天使界との御共議成立致しましたよ。

これであなたは、身も心もすっきりすると思います。安心して今のあなたの芸術に励んで下さい。

皆々様、今回は本当にありがとうございました。サッシェこれで一安心です。

平成六年一月十八日　午前二時〇七分

忠則さん、キリです。

私は本当に幸せです。忠則さん、本当にありがとう。

サッシェは毎日のように嬉し泣きで暮らしているとのことです。やっぱり日本の神様

は凄い、KENの口ぐせです。忠則さん、本当に、本当にありがとう。

忠則さん、私、本当に夢のよう。

あの時の宇宙の仲間がまたこうしてあなたと通信が持てること。もう駄目だと思っていました。あゝ、嬉しい、気持がいい、楽しい、幸せ。特にサッシェのことを思うと本当に嬉しい。

サッシェからの波動が送られて来た時、私、思わず大宇宙神に祈ってしまいました。そして※※※※命様の見事な御配慮。これで心置きなく忠則さんとも通信ができる。

あなたを愛しています。あなたの優しさ、あなたの絵画、あなたの声、あなたの筆を持つ指、あなたのいたずら、あなたの心配顔、キリは、みんなみんな好きです。

私は踊っています。あゝ、サッシェにも会える。堂々と会えます。私にとっては、あなたとの出会いが初めての降球でした。

優しい地球。可愛い地球。そしてその水の星に住むあなた。

これからもよろしくお願い致します。

キリ。

北斗基地の日本調査隊の皆様、本当にありがとうございました。

キリ。

あゝ、※※※※命様、貴方様の大きな広い御心に金星人のキリはただただ感謝の気持で一杯です。私のような者までにも変わらぬ愛を頂き、魂がはりさけんばかりです。その御心に背かぬよう努力致します。今回の御計らい深く感謝申し上げます。

金星人　キリ。

忠則さんごめんなさい。今キリは取り乱しています。こんな感激本当に今までなかったんですから、嬉しい。皆さん本当にごめんなさい。嬉しいです。

平成六年一月十九日　午前三時三十四分

横尾さん、サッシェです。

あなたとの通信ができるようになってから、ずっとあなたのことを思っています。また、あなたの近況は全て受信しました。

今のあなたの作品が緑をベースに描かれていることを知り、さっそく成城のアトリエを見せて頂きました。また弥生美術館の作品も拝見させて頂きました。あゝ、横尾さん。夢のようです。またあなたの絵を感じることができ、サッシェ泣きました。本当に嬉しいです。

今のあなたの絵には以前より増して愛が感じられます。以前は、愛を描くのに努力が

いりましたが今はそうではありませんね。描くものが愛になります。素晴らしいことです。

神の愛、人の愛、木の愛、全てを自然に描いています。身近なもの、遠いもの、内にあるもの、外にあるものを自在にキャンバスに集結させています。人間としての成長が芸術家を高める証ですね。

以前のことを思うと本当に嘘のようですね。あなたは笑ってばかりいるし、ごめんなさい。私のために泣いて下さってはおりますが、ともかく自由に生き生きした波動が伝わって来ます。

こんなことを私がお伝えするのも何かと思いますが、大天使界があなたの教育（？）に失敗した時、日本の天界がすぐ動かれました。そして天界はご存知のようにあっという間に今の状況を作っておしまいになられた。実は天界でのあなたのご苦労を見兼ねたあなたのご両親が、日本の神霊様にお願いした結果が今のあなたなのです。

ご両親にお礼をしておきなさい。

従って、弥生美術館の展覧会もご両親に対する祈りが無意識に出ていたはずです。

金星の老いぼれサッシェの通信でした。

横尾さん、横尾先生、またお会い致しましょう。

CamScannerでスキャン

北斗基地の日本調査隊の皆様感謝申し上げます。
※※※※命様にあられましては、御礼の言葉見つかりませぬ。金星人サッシェ、微力ながら、横尾さんにご助力することを御誓い致します。
平成六年一月二十日　午前十時五十五分

※※※※――

本文中の富士山と洞窟に関する「語り」は中森樹庵氏によってチャネリングされたものです。ご協力ありがとうございました。

参考資料

「聖シャンバラ」三浦関造著（竜王文庫）
トルストイなどの引用部分は「タルコフスキー日記」（キネマ旬報社）による。

文庫版のためのあとがき

単行本が出てから三年が過ぎた。ぼくの状況も随分変化した。もう滝の夢も見なくなったし、滝の作品も終った。滝の作品の最後は墨田区に完成した〝すみだトリフォニーホール〟の壁画七十点の滝だった。

本の書き下ろしは「インドへ」（文春文庫）に続いて二冊目である。絵を描くのも体力がいるが本を書くのはもっと大変だった。この本の後半は眼の前にした巨大な富士山の裾野で富士山に語るような気持で書き続けた。

最後に宇宙人との会話を載せた。ぼくの創作と思われる方もおられるかもしれないが、あれは正真正銘の本当の宇宙人からのメッセージである。彼等がどうして日本語を？と思われるかもしれないが、意識波動はそれを受信する人間の言語中枢でその人間が得意とする言語に翻訳されるのである。だからフランス人はフランス語でキャッチすることになる。

また金星に人間が住んでいるはずがないということをわれわれは科学的知識で知っている。だけどわれわれの知っている科学はすべて地球レベルの物質科学の範囲内でしか理解していない。本文に書いているように金星に対する地球人の知識は信じられないほど未熟で遅れている。彼等は全てを明かさないが、どうもこの金星は二重構造になっていて、どうもその内部に人々が住んでいる様子だ。

日本神界の神霊と宇宙人がぼくに関わる理由は簡単にいうと、ぼくの芸術を通して宇宙の波動を見る人に感応させるために、宇宙の波動の流通回路であるぼく自身の魂を鍛えあげて、霊性を高める必要のためにコンタクトしてきているのである。

宇宙から見る地球は瀕死の状態らしい。人類がなんとか世紀末を乗り切るために、目下「宇宙」は最大級のサポートを地球人に行っている。だけど何もかも彼等に頼るわけにはいかない。人類自らの高い志によってしか乗り切ることができないのである。今われわれはそんな時期にいるそうだ。この時期を乗り切るためには一人一人がカルマを消化し、本性を生きることだと「宇宙」は言う。そんな自覚が要求されているのである。

本書の元の単行本のタイトルは「天と地は相似形」だったが、もう少し一般的なタイトルにしたほうがいいと思い『私と直観と宇宙人』ということになった。

意識は確実に変わっている。アセンションという言葉をよく耳にするようになったが、

今地球は次元上昇を始めている。宇宙がうんと身近かになろうとしているのだ。われわれが宇宙人になるのもそう遠くないかもしれない。

一九九七年六月十四日

解説

高橋克彦

そんなに厚くはない本なのに、これをちゃんと最初から頭に入れて読もうとすると永い時間がかかる。難解という理由ではない。面白くなくて眠くなる、ということでももちろんない。一つ一つの言葉が深くて重いせいだ。いきなり自分の文章の引用をするのは申し訳ないけれど、この本について書いた短い紹介文がある。

——異様な興奮に襲われて書き出したものの、なにからはじめていいのか見当がつかない。ただ、疑いもなくこの本の中には私がずうっと求め続けてきたことへの解答が含まれているはずだ。本文にある横尾さんの言葉ではないけれど、私もまた直観を信ずることで生きている。読んでいる間中、体の熱が取れなかった。胸の辺り、そして頬、あるいは額が熱いのである。たとえば横尾さんは言う。

『人間が死を恐れるのは単に死の観念だけではなく、もっと本能的なものやろ。本能的なものには何らかの形で死の記憶があるのではないかと思う。だからわれわれは死の世

界からやって来て、ある時間を生の世界で過ごし、そして再び死の世界へ戻って行く。そんな旅人なんではないだろうか。』

あまり脈絡もなくこういう言葉が出現する。そのたびに私の心は震え、恐れる。なにかとてつもない本と出会った気がするのだ。しかもなんだか妙な仕掛けが施されている。全体は「ワシ」「彼」「わたし」と章立てられた三部構成になっている。引用部分は「ワシ」からのもの。書き手である横尾さんが自分を「ワシ」や「彼」と表記することによって単純に分けられた構成のようにも思えるが、印象はまったく異なる。「ワシ」の章では自我が中心となり、「彼」では客観が加えられ、そして「わたし」では天井にある存在と地上に暮らす横尾さんとが渾然一体となった、いわゆる霊媒の言葉に感じられるのである。それが異様な読後感を与えているのかも知れない。特に「わたし」に入ってからの透明感は凄い。いったいこれほどに人間が素直になれるものだろうか。

横尾さんと会うたびに、いつもその純粋さに圧倒されてしまう。

また、この本の不思議さは、なにも伝えようとしていないところだ。死について、愛について、神について、恐怖について、確かに横尾さんは触れている。だが、それを説いているわけではない。読者それぞれに新たなものを想起させる役割を果たしているだけだ。解答はこの中にあると私は書いたけれど、文章になっているのではない。読み続

けていくうちに、自分自身がいつしか気付かされることがある。愛とはなにか、神とはなにかについて、すべては読者自らの中に解答が潜んでいる——

刊行直後、新聞の書評欄に求められたもので、枚数制限もあって興奮ばかりが先走っているが、今度読み直してみてもやはり印象は変わらなかった。頁を捲(めく)るごとに思わず立ち止まってしまう。横尾さんの言葉が私の中に入り込んできて、文章とは無縁の私の記憶や体験が一挙に湧き上がる。

——夢だってまだまだ奥が深く、その端は宇宙と繋がっているはずだ。だから夢が自我の領域だけと繋がっているとは思えんのや。むしろ宇宙とパイプが繋がっていると理解した方が納得できるとワシは思う——

これは私も実体験を通じて頷ける。小説のアイデアに詰まって苦しんでいるとき、私は奇妙に夢の中で啓示のごとくそれを教えられることが多い。近頃ではそれを頼りにして、わざと眠ることさえあるほどだ。そうすると思いがけないアイデアを得られる。もっとも、締切りを凌ぐ程度の啓示では横尾さんと比較するのも恥ずかしい。横尾さんは『夢日記』すら出版しているくらい昔から夢を強く意識してこられた人だ。だからこそ言葉に重みが加わる。その上、迷わずに夢の啓示を受け止めることができる。

——彼はたった今起こっていることの真の意味や理由がわからないことがある。そんな

時不安ではないかと訊ねられることがあるが、彼はむしろこのような時こそ最もスリリングでエキサイティングな瞬間だと答える。どんな運命が彼を待ちかまえているかと思うと興奮の連続だ。

直観と衝動を唯一信頼できる友としていると、自分の行動の論理や観念がない。だから、らこそ自由だといえる。論理や観念に縛られていないために、彼の目的自体が遊戯化するようだ——

これは夢とは関係なく、「彼」の生き方のスタンスを客観的に述べている文章だが、ここここそ私が横尾さんに憧れてやまない部分だ。文字に記すことはできても、この生き方を貫くのは本当にむずかしい。二、三歳の幼児だったら有り得るだろう。しかし、物心ついた瞬間、人間はだれでも見えない糸でぐるぐる巻きにされる。家族への執着だったり、道徳心であったり、生活や常識であったり。そこから脱却するには俗世を捨てての完全な隠遁しかない。なのに横尾さんはまさにその生き方を、現実の中にあって実現しているように思える。何度か対談などでお会いするたび、私はいつもその自由さに圧倒される。直観、あるいは思いに素直に従って生きるべきだ、と私は横尾さんに教えられたけれど、それを優先できるのはその直後ばかりで、十日もすればまた元の暮らしに引き戻されてしまう。直観を信じてはいても、怖くてなかなかその道を選ぶことができ

ない。現実に身を浸している限り、枠という縛りに任せている方が楽で安全なのだ。横尾さんの日常そのものが冒険に満ちている。

これは小説ではないので結末のところを引用しても許されると思うのだが、「わたし」の章で横尾さんはこう言い切っている。

——一体死んだらどうなるのでしょうか。想像しただけで愉しくて興奮します。どういうわけか死後の世界が怖いとは思いません。怖いと思うのは死を予感した時です——

これだけ抜き出すと物凄い。こんな高みに達した人がいったい何人居るだろう。ここにきて、この本がなにを目的として書かれたものなのか想像されてくる。これこそが夢を通じて横尾さんに神より与えられた啓示であり、世紀末を迎えている人類の不安に対する神からの癒しなのだ。横尾さんはこのように生きろとは一言も書いていない。それなのにこの本からは熱いメッセージが伝わってくる。人は今こそ自由に生きるべきなのだ。

横尾さんという存在を通して神は私たちにそれを教えてくれている。

CamScannerでスキャン